
見えない自分

こんこん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見えない自分

【Nコード】

N6480L

【作者名】

こんこん

【あらすじ】

高崎朔夜は高校一年生の16歳で、県内でも有数の進学校に入っ

た。それまでは苦難なみちのりがあるのだが、友人の全く存在しない朔夜に初めての友人ができた。

名前は遠藤克哉で、幼い頃遊んでいた仲であった。両者とも引越してどこにいったのか分からなくなっていたのだが、高校生になって再会し驚いた。

朔夜には人に言えない過去があった。それは・・・

そんな過去を隠しながら克哉とも付き合い、そして他校の高田美羽とも不良にからまれていくことから偶然知り合ってしまう。

朔夜は自らの過去を引きずりながらも何気ない学園生活を楽しむのだが、トラブルにも巻き込まれていくことに・・・
そして・・・

1話

世の中は空前の大不況を迎えて、就職率も低ければ、一人当たりの年収も低くなっていた。

それでも青春という奴はみんなに平等で、あの時間だけは金をいくら出しても買えるものではなかった。

そんな短い時間で起こる出来事は心の中に深く刻まれたり、この先を生きていく糧になっていくこともある。

それぞれの人間が感じることは様々で自分だけの物語を作っている…

たかさぎくや
高崎朔夜は市内の高校に通う男子高校生だったが、家庭環境は最悪だった。

朔夜が小学生の頃に彼の父親は理不尽な形で職を失い、いくら再就職先を探しても見つからず荒れに荒れた。そんな典型的な転がり方を見せれば当然母親にも逃げられる。

何も告げずに母親は蒸発したのだ。

朔夜少年は幼心に傷ついた。そのことは今でもはっきりと覚えていた。

いつもなら帰ってくればいるはずの母親の姿があの日どこにもなかったのだから…

テーブルの上には、紙切れが一つ残っていて「限界です…」その一言が書かれていた。

父親は幸いそこにはいなかった。

なけなしの金でパチンコにでも行ったのだろう。少年の心には無常にもその短い言葉が突き刺さっていた。

呆然と立ち尽くし、何も考えられなかった。

いつも守ってくれるはずの母親が…もういないのだから…

自分は…これからどうしたらいいのだろう…ああ…一人ぼっちになつてしまった…

そこから朔夜少年の地獄は始まったのだ。

あれから五年が経った。

高崎朔夜はというと、元々住んでいた所の隣の市にある高校に進学していた。

過去に傷害事件を数度起こして、問題にもなった。中学生の頃の彼は情緒が最も不安定な時期で自分の理性を抑えられなかった。

多感な年頃に受けた傷は大きく、何かをしなければ自分の気持ちに紛らわせなかった。

それは暴力であったり、自分の命を削る行為そのものでしかなか

った。心が挫けて何度も死に向かって進んでいることも自分では分かってはいたが、こればかりはどうすることはできなかった。割り切って人生を歩めるほどまだ大人ではないのだ。だから中学生時代の彼は絶対に人殺しをするのではないかと周囲から噂されていた。

何度も児童相談所の人間と学校の先生が彼の家を訪れていた。

父親に養育能力があるかどうかで散々揉めていたが、結局役所関係の人間はそれほど強引に踏み込まなかった。

その一つの理由として父親はそうだった福祉職員が訪問をするときはまともな対応を見せていたのだ。普段は朔夜に見せることもない父親らしい言動と立ち振る舞い。そんなものを間近で見せられた本人としては気持ちの良いものではないということぐらい幼少期から悟っていた。

それから数度行われた面会によって更正の余地が幾許かあることと、本人が施設に入ることを頑なに拒んだので保護という結論はご破算となってしまった。

本当のところは、職員がそこまで一人の人間に時間が掛けられないということと、無駄な出費は避けたいという思いもあった。

そうして朔夜という人間は社会的に除外されてしまったのだ。

2話

本人は正直どうでも良かった。長い時間で諦めるということを選択してしまっただ。だから自暴自棄にもなる。

まるで親に対するうつぶんを晴らすかのように。幾度となく引き起こされる問題行動にも父親は知らない振りだった。

学校や警察に出向くものの上辺だけで何も聞いてはいない。心ここにあらずといった様子で平謝りだけをする。

「あなたのお子さんの問題なんですよ。このままではどうなるかわかりません」

そんな言葉を耳にたごができるくらい聞かされた。

だからどうだというのだ…

父親は自分の生活さえ無事ならそれで良かった。響かない言葉はいくつも並べられたところで息子に対する態度が変わるはずもない。

ろくに働かず、酒ばかりを浴びるように飲み、息子に金をせびり、なけなしの金を散財して終わる毎日の繰り返しだった。そんな無限に続くであろう地獄にも朔夜は必死に耐えていた。

幼少期からそんな生活を繰り返したことで当たり前のようにもなっていたが、父親を変えたい部分もあり悪行に身を染めた部分もあった。しかし父親は何も変わらない。

自分が学校で問題を起こそうが、警察に捕まろうが…

そんな想いのまま中学二年生になった時に転機が訪れた。

精神的にもぎりぎりの状態の父親は酔って暴れて、朔夜を包丁で刺したのだ。

無限とも思える墮落した生活はか細い糸で繋がれていた。しかしそれがぶつとりと切れてしまったのだ。

「お…お…俺は…悪くねえ…あいつが…ガキのくせに生意気なことを話すからだ。俺に働けだあ？どいつもこいつも俺のこと馬鹿にしようがって！おらあ！うるせえ！俺に触るんじゃねえ！」

警察に連れられる時もまだ酔った状態だった。血まみれになったシャツを着たままパトカーに乗せられた。

その一方で朔夜は病院で目覚めていた。

そこで自分は助かったのだと認識し寂しそうな表情を浮かべていた。

ちくしょう…あのまま死んでも良かったのに…

そんな様子でしばらく誰とも口を聞かなかった。

今まで動かなかった警察も福祉関係もこの一件で動かざるをえなかった。傷害事件に虐待の容疑も浮上した父親とは一緒に住ませるわけにはいかない。

世間の目は誰もがみんな同じだった。

いつかはこうなると分かっていたはずなのに…

焦る警察関係者をよそに今までのことが嘘のように手続きが迅速に行われた。

朔夜は半ば放心状態であったが、次第に現実を受け止めていった。

もう…父親はいない。自分一人で生きなくてはならない…

あれだけのことをされても父親を殺してやるうという気持ちは湧かなかつた。それよりもこれからどうやって生きていくかという選択の方が自分には重くのしかかっていたのだ。

今までのように馬鹿な行為を続けていれば父親の二の舞になるのは確実だということも薄々感付いていた。

施設職員は面会に何度も訪れ、様々な説明をした。父親の現状やらどうし入所しなくてはいけないか、今後どうやって生活をしていくのか…何日も掛けて朔夜に話した。

思春期の人間を無碍に扱うことは、危険な行為だと言うことを重々承知なので、時間を掛けてゆっくりとした。

そんな数回の面会で朔夜自身も自分の将来についていろいろ考え始めたのだ。今まではそんなことを考えもしなかったが、岐路に立たされ改めているんなことを知ったのだ。

そしてある日、施設に入所する手続きが行われることを告げに児童相談所の人間が来た。

「君はここから少し離れた養護施設で引き取ることになるが…一生そこにいると言うわけではない。自立できるようになったら出て構わない。今まで何度も断られたが、今回は法的に無理だからそのつもりで…」

そんなことを話された朔夜は、ここから自分という人間が始まるのかもしれないとも思った。これは転機なのだ。今までの自分はそのガキで、父親に構って欲しくて無茶なことをしてきた。そして父親をどこか心配し悪事で得た金を渡した。罪悪感も感じるようになっていた。自分は…今まで何をしてきたんだろう。

このままでは空っぽの人生じゃないか。ここで変わらなければ、一生無理かもしれない。

生まれて初めて生きるために何かを選択しなくてはならない衝動に駆られた。

そこから朔夜という人間の第二の人生が始まった。

3話

朔夜が進学した高校は普通高で、大学進学を主とした勉強中心の教育をしていた。

生徒数三学年で六百人で偏差値のレベルも上の方だったので不良らしい生徒は皆無だった。

そんな学校だから朔夜は逆に不安な部分もあった。自分のような存在がいてもいいのだろうかと…

いろんなことを想像しながら入学式に出席したが、そこには両親の姿などあるはずもなく一人で馴染みのないブレザーの制服に身を包みその日を何事もなく過ごしていた。

暗い過去とはよそに朔夜の見た目は普通だった。そんなに長くない黒髪で表情も憑き物がとれたかのように穏やかである。身長は高い方だが自分よりも大きな人間も数人いた。だから以前のように自然と道を開けるような人間はこの学校にはいなかったのだ。

「はあ…」

施設に帰るなり開口一番はため息しか出なかった。

「どうしたの？」

同じ施設の中学生ぐらいの女の子が浮かない表情の朔夜に尋ねてきた。

「何でもない」

自分が年下に身の上の話などできるかと、すぐに会話を遮断してしまった。だからかもしれない、その子は怒ってしまった。

「何よそれ。心配して聞いているのにさ。別にいいよだ…ばーか…」

悪態をつけてそのままいなくなってしまった。

「何だよあいつ…」

慣れない環境に一日身を置いて疲れていたので、施設長にも挨拶はそこそこに自分の部屋に入った。

自分の部屋といっても相部屋だから歳の近いルームメイトもいた。

名前は神林晃人^{かんばやしあまこ}で年は十四歳と朔夜の二つ下だった。

「あ…おかえり…」

晃人は部屋に入ってきた朔夜を見るなり軽く挨拶をした。

「ああ…ただいま」

「どしたの？ 凄く疲れた顔してるけど…」

普段見せない顔をしていたせいか、すぐに悟られてしまった。それに晃人は勘がいいので、人のことを見てすぐに違いに気が付く。

「いや…大したことじゃない。ちょっと慣れない環境に疲れただけ

だ…」

「高校の入学式ってそんなに疲れるものなの？」

「いや…俺の場合はさ、高校デビューみたいなもんだから周りとの付き合い方ってのがいろいろあるんだよ。いわくつきのような存在だったからなあ…」

「朔兄にとってみたら逆の高校デビューだね。まさか元ヤンが進学校なんて誰も想像しないからね」

「そういうものか？ドラマにだって漫画にだってよくあるだろ？」

「あれは、大人になってから落ち着くのがほとんどなの…：中学から高校ですぐに落ち着くなんて思春期で有り得ないじゃん」

「そういうもんか…」

中学生の晃人に教わりながらもこいつはいろんなことを知ってるなど感心してしまった。

「それはさておいて、どうなの？高校は楽しそう？」

「今日だけじゃ分からないよ…：俺もがむしゃらにこの半年勉強ばかりしたから全然人付き合いもしていないしな…：知り合いもいたのかわからないのかも分からない」

中学が途中で変わっていたのでそれもそのはずで、朔夜は周りの人間のことがあまり分からなかった。

悪に手を染めていた頃はほとんど学校にもいかなかった。それだけ周囲との時間の差と人間関係の差があり、すぐに埋めることはできなかつたのだ。

「朔兄にとってこれからが大変だよ。誰も知らない場所の高校ならまだいいけど、そんなに離れていない狭い街だから何かあれば悪い噂はすぐに広まるよ……」

「まあ、そうだろうな。俺のしてきたことだからなあ……」

そのことばかりは覆すことなどできない。全て起こってしまった事実なのだから。だからそこから逃げようとも思っていなかった。前に進むためにも避けられない試練だと感じながら物思いにふけた。

「俺たちみたいな施設入居者はさ……初めからいわく付きみたいなものなんだよ。だからそんなに深く考えない方がいいよ……」

「お前なあ……入学早々にそんな暗い話をするなよ」

「それなら明るく帰ってきてよね。ため息ばかりで部屋の雰囲気が悪くなるんだからさ……」

それもそうだと思いつつ朔夜は風呂に入る準備を整えていた。

「まあ、同情はするけど頑張つてね。ある意味、朔兄はこの施設の期待の星みたいなものなんだからさ……」

その言葉が何を意味しているのか分からなかったが、そのまま黙って風呂場へと向かった。

4話

朔夜が高校に入学してから一週間が経った頃にはクラスの中でも大体のグループが出来上がっていた。

中学が同じの者たちが自然とくっつき、そこから新しい友達が変わりといった感じで自然と作り上げられる。

その中でもやはり朔夜は浮いていた。

別に過去の悪行がばれた訳でもなければ、誰かと揉めた訳でもなかった。

元々集団になるのが嫌いな性格と大人しく振舞っていたのが災いしたのか、自然と避けるような形になってしまったのだ。

ここは進学校で至って普通の人が通っている学校だから、朔夜という存在は異質で目立ってしまうのだ。

しかし本人もそのことは覚悟していたから深く考えずにただ黙って学園生活を過ごしていた。

授業はそこまで高度なものではなかったため、朔夜もどうにかついていけた。とりあえず学業面で心配だったからほっとしていた。

帰り道いつものように一人で歩いていると、誰かが声を掛けてきた。

それは聞いたことのないような声だったので、朔夜も自分が声を

掛けられたのか不安になってしまった。

振り返るとそこには同じ高校の男子が立っていた。

誰だ？

同じクラスではないことは確かだったので、そんな顔を見せた。

するとその男は近づいて、

「朔夜。俺…覚えてない？」

そんなことを口にしたが、朔夜はさっぱりだった。誰だっけこいつ…そんなことを思いながら悩んでいると、相手も察したのか名前を告げた。

「克哉だよ…えんどうかつや遠藤克哉」

フルネームで挙げられたその名前だが、朔夜には思い当たることもなく益々首をかしげることになってしまった。

「おいおい…幼馴染を忘れたのかよ…っていつでも無理ないか。もう十年以上会ってないからな…」

少し残念そうに話しているこの男のことを本当に朔夜は忘れていた。だからなかなか思い浮かばない…しかしその会話から推測すれば、こいつは自分の保育園の同級生だということになると思った。

だから必死に思い出した。

「よくお前の家の前でサッカーしただろ？狭い空き地でさ…道路にボールを出しちゃって運転手に怒られたこともあったよなあ…」

断片的にいろんな情報を与えられることで朔夜の曖昧だった記憶が蘇っていった。

そういえば…昔よく遊んでいた男の子がいた。おかつぱで子どものかせに眼鏡を掛けている奴だったと…

しかしこいつはおかつぱでもなければ眼鏡も掛けていなかった。

「お互い大きくなったから雰囲気も違うだろ？でもさ、入学したときお前のご遠目から見えずくに気づいたよ。高崎朔夜だってね」

「お前…記憶力がいいんだな。俺はほとんど覚えてないよ…でも誰かとよく遊んだ記憶はある。それがお前だってことか」

「多分ね。でもさ、こっちだってかなり勇気がいるんだ。もしも間違っていたらどうしようってさ…まあ…名前も別の奴から聞いていたからそれはないけど、全く知らないって顔されたらこっちも引くよ…流石にさ…」

「悪かったな。俺もあまり記憶力が良い方ではないから昔のことは断片的にしか覚えていないんだ…でも、お前の記憶は確かにあったよ」

育児放棄と虐待に近い行為をされていた朔夜にとって過去はあまり思い出したくないものだったから無理もなかった。

幸せだった過去もあるが、過去は辛いことばかりだったから自ら

閉ざしてしまっただ。

自己防衛本能がそうさせるのかは分からなかったが、忘れることを望んでいた。しかし克哉はそんな朔夜の過去に踏み込んできた。

「薄っすらとも覚えてくれたらいいよ。俺もさ…小学校に上がる頃に別の県に引っ越してまたこちら辺に戻ってきたからほとんど知り合いがないんだよ…そんな時にまさか幼馴染に会えるなんて思わなかったからさ、つい嬉しくなって…その…悪かったな」

悪気などそこにはない。だから朔夜も冷たくあしらうこともできなかった。

「いや…別に…俺もそこまで気にしてないし」

心はどこか冷めているが、相手を不快にさせないように配慮はできていた。

「そうか…なら、俺とまた遊んでくれるか？」

「え？」

「俺もなかなか友達できないからさ…一緒に話したりしようぜ」

突然のその誘いを断る理由は特になかった。だが、施設外の人間と話すことはほとんど皆無だったのでどうしたらいいのか分からない部分もあった。

どうしようかと迷っていたが、口に出た言葉は、「いいよ」「の三文字だった。

自分でも何故あそこでそう言ったのかは理解できなかったが、自分を変える良いきっかけかもしれないとも思った。

そのまま二人はそこで別れ、朔夜は施設へと帰った。

そして早速年下の晃人にその話をした。

「どう思うっ？」

「どう思っつて…朔兄次第でしょ。友達も作っただ方がいいとは思っけど…上辺だけの関係は結局疲れるよ」

まるで社会人の人間関係を例に挙げるかのように晃人は話したが、間違いでもないなと朔夜は聞いていた。

「それでも…話さなきゃ前にも進まないからなあ…俺もいつまでも過去のこと引きずっている訳にもいかないだろ？」

「それはそうだよ…でも、そこまでまだ割り切れないでしょ。焦らないでゆっくり進んだ方がいいよ」

「ああ…そうするよ」

どちらが年上か分からない関係だったが、晃人はそれだけ博識で人の行動を良く見ていた。

冷めているのはお互い様であるとも朔夜は感じていたが、晃人は心の奥底に本当の自分を隠しているようにも思えた。

だが、そこは詮索しない。それがルールだとも分かっていたから
…自分から話す時が来なければ人の過去を勝手にほじくり返すのは
良くない。

「ありがとよ…本当にお前の話はためになるよ」

そしてまた次の日を迎えようとしていた。

5話

幼馴染の克哉は朔夜が施設から学校に通っているとは知らなかった。そのことを朔夜自信も話すことなく日は経っていた。

休み時間、昼食時、下校時に会話をする回数も徐々に増えていき心配していた距離感も次第に縮まっていた。

昔の話をして懐かしんだり、勉強や部活をどうするか、そういう話が多かった。

別のクラスだったので、そんなに頻繁に会えなかったがそれでも朔夜はしばらくぶりに新鮮だと思い始めていた。

一年前位は誰も自分に寄り付きもしない。同級生は冷めた目で見て、教師もまるで不潔なものでも見るかのように煙たがっていた。

それも自分の撒いた種だということも自覚できていた。それは施設長たちのおかげだとも今は感じる事ができた。

こんな当たり前のことができるようになり少し幸せを感じるあたりがまだ子どもの証拠でもあった。

克哉が朔夜のクラスに顔を出すたびに周囲の目は晃人に釘付けだった。

それもそのはずである。

遠藤克哉は、中学時代は秀才で有名だったのだ。本来ならもっと

学力の高い高校に入れるはずなのにどうしてここにいるんだ？という感じで周囲は見ていたのだ。

同じ中学の者が数人いたからそこから漏れた情報ではあったが、本人はそんなことを気にもしていない様子でこの学校に通っていた。

「あいつさ…遠藤だよな」

「何でも中学時代は常にトップだったらしいよ」

「へえ…珍しい奴だな…それだけ頭がよけりや県外にでも進学すればいいのにな」

そんな会話もひそひそとされることも多からずもあつた。

「おい…お前有名人なのか？」

そんな周囲の様子を気に掛けてか、朔夜は克哉に聞いてみたが、本人は相変わらず気のない返事だった。

「いや…別に…何にもしてないけどな。そんなことよりも帰りにゲーセン寄って行かないか？」

「ゲーセン…意外だなあ…お前そんな所に行くのか？」

「あのなあ…俺だって普通の高校生だ。ずっと勉強しているガリ勉野郎に見えるのか？」

「見える」

「おいおい…即答かよ。いいから、付き合ってくれよな」

「はいはい…」

休み時間にそんな会話を済ませると始業のチャイムが鳴り響いた。

6話

下校時間になるとほとんどの生徒が帰る支度を整えていた。部活動もあるのだが、新入生が参加するのはもう少し後からだった。入部期限は今週いっぱいだったので、まだ時間はあつた。優先的に参加しているのは、推薦入学した中学時代から有名な選手だけだったのだ。二人はそんな部活の話もしながら歩いていった。

「どうする？」

「部活かあ？俺は…パスだな」

やる気のない様子を前面に朔夜が答えると、それなら俺も入らなかなと克哉は投げやりだった。

「別に俺の意見に賛同しなくても…」

「いや…面倒なんだよ。俺はそこまで身体能力が高い訳ではないし、内向的だからな…そんな奴が向くわけもないだろ」

「随分と早い見極めだな」

「そついうお前はどつなんだよ」

「俺か？俺はバイトしたいからなあ…」

「そついや、うちの学校普通高には珍しくバイト大丈夫だったもんな…そつか…それも一つの選択肢だな」

感心しながら街の方に向かって歩いてみると、克哉が思い出したかのように朔夜に聞いた。

「そついや…朔夜はどこに住んでるんだ？昔の所じゃないだろ？昔の実家ならここから三、四駅離れているからな…」

不意に訪れた予想外の質問に多少の戸惑いを見せた。そしてここで答えるべきか悩み、保留することを決断していた。

「いや…歩いて帰れる所だ…まあ、引越したんだよ。最近な…」

言葉の切れが悪くたどたどしい。しかし克哉は疑うことをしなかった。

「そつなのか…それなら今度遊びに行くかもな…」

「ん…ああ…」

この会話を切り替えたかったのか、逆に朔夜が質問した。

「そついうお前はどこに住んでいるんだよ。学校の側か？」

「俺の家はバスで街から少し行けばあるよ」

「へえ…アパートか？」

「いや…一軒家だ」

「ふーん…」

上手く話題が変えられて少しほっとしていると、お目当てのゲームセンターの前に着いた。ゲームセンターの看板はぎらぎらとしたネオンが光輝き、誘惑しているかのようだった。この街はそんなに大きくもないが、普通に栄えているので、人もそれなりに入っていた。

建物の規模もそれなりで、他にもボーリング場も連なっていたので、学割が効く学生が主に多く出入りしていた。

「たくさんいるなあ…」

「そうだな…暇人ばかりだ」

「俺たちもな…」

どんどん奥に入っていくと、いろんな学校の生徒を見かけた。四月の入学したばかりのこの時期は、時間を持って余す者が多いのだということが分かった。

朔夜と克哉は適当なゲーム機を探すと二人で対戦してみた。朔夜は時間の掛かるゲームが嫌いだった。だからすっと決着がつくゲームが望ましかったのだ。

格闘ゲームは何回かやっていたので、そこそこ強かった。克哉がどれほどの実力かは分からなかったが自分には勝てないだろうと思っていた。しかし…ものの数秒で完敗してしまった。

「マジかよ…」

相手が全くの無傷であったことが、朔夜にとって屈辱的だったの

か間髪いれずに再選を申し込んだ。

「もう一度だ…」

目つきが変わっていた。

その様子を見た克哉は望むところとはかりにその挑戦を受けた。しかし結果は同じだった。

「もう一度だ…」

朔夜の闘争本能にスイッチが入ってしまった。そこは白熱した空間へと変貌を遂げ、誰も入り込めない状況へと変わってしまった。

元々のめりこむタイプの性格だったので朔夜は勝つための道を見つけようと必死だった。

だが…そんな努力も空しく勝つことはできなかった。五度続いた挑戦で流石に朔夜も諦めてしまった。

「はあ…もういいよ…」

白旗を上げて降参の意思表示を出すと、克哉は満面の笑みを浮かべていた。

「何かむかつく…」

「そう、怒るなよ。俺の得意なゲームだったからな。これは他人に負けたことがないんだよ。朔夜は少しかじった程度だろ？そんな奴に俺が負けるかよ…」

得意げに話していたが、返す言葉も見つからなかった。そんなことを知っていたらやらなかったのに…と五百円も使ってしまった行為を後悔していた。

「さて…次は何をやる？」

「そつだなあ…」

広いゲームセンターを見回していると、何やら揉めている男女が目に入った。

7話

「おい…あれは？喧嘩か？」

「さあな…」

朔夜は別に興味もない素振りで、克哉に勝てそうなゲーム機を探していた。

すると揉めている場所からは何度も大きな声が飛び交い、それに釣られてギャラリィも少しずつ増えていた。そんな状況に克哉は行ってみようと話した。

「いいよ…何でわざわざ揉め事に巻き込まれに行くんだよ」

「見るだけだつて…」

そんな克哉を止めることもできないと思い、渋々朔夜は後を追いかけて現場に踏み込んだ。

そこには三人の男女がいた。

制服を見て分かったのは女と男は同じ学校の生徒ではなかった。そして自分たちの高校とも違っていた。

「どこの高校だ？」

朔夜は他の高校についてあまり知らないので、克哉に聞いた。

「男は松陵高校：女は聖愛女子学園かな…」

「お前詳しいんだな。マニアか？」

「ば…馬鹿！この地区で同じ高校生ならそれぐらい知っとけよ」

恥ずかしがる克哉に俺はこの界隈の高校はあまり知らないからと答えていた。

声を荒げて話すのは男たちの方が多かった。

「てめえ、俺らが誰か分かってんのか？正直に答えろよな！」

「財布を抜き取ってこっから逃げようとしただろ？」

ここまで怒り狂っているのは、理由があるのだろうと朔夜たちは客観視していた。

「知らないよ…何だよ、私のことばつか疑って。あんたら確証があつて言ってるわけ？どこにそんな証拠があんのよ！」

強気で攻める男に対して真っ向から立ち向かう女。珍しい光景といえはそうだが、会話はあまりにも高校生からかけ離れているような内容だった。

男たちは女を逃がさないように必死に腕を掴んでいた。

見ている人物が次第に増えるにつれて、二人の男は場所を変えなくてはまずいと思っただらしい。

「てめえら、そこどけよ！」

男は女の腕を掴んで、かき分けるようにして外に連れて行った。

「まずくないか？」

周囲の声はそんな感じだった。しかしあの男たちが悪名高き松陵高校だと知ると、助けに行こうと思うものは誰もいなかった。

ただそのまま蜘蛛の子を散らすように自然といなくなっていた。

「おいおい…あいつらの高校ってそんなにやばいのか？」

朔夜は克哉に聞いてみた。

「あいつらの高校は不良養成施設みたいな所だからなあ…幾度となくこの街でも騒ぎを起こしているからある意味有名校だな」

「へー…」

内心では自分がそんな高校に行ってもおかしくなかったから複雑な気持ちだった。「関わらない方が利口だ…俺たちみたいな普通の高校に通っている奴らはいいつらの鴨のような存在だからな。何人かがカツアゲされたって嘆いているのも聞いている…」

耳の痛い話だと朔夜は自己嫌悪に陥ってしまった。しかし今はもう悪事には手を染めていないし、しないと誓ったのだから過去のこごと、割り切った。

「さ…気を取り直して違うやつやろうぜ」

「元気だな…」

そんな出来事を忘れるかのように克哉は新たなゲームに朔夜を誘った。

一時間後…思う存分に楽しんだ克哉は満足げな表情でゲームセンターから出た。

一方で朔夜は浮かない表情だった。

「お前…なんであんなにゲーム強いんだよ」

うな垂れる朔夜に克哉はこの違いだなと頭を指差していった。

確かにそれを認めざるを得ない位に克哉は強かった。朔夜もそんなにゲームに弱い訳ではないのに全く歯が立たなかったのだ。

「次やる時はもう少し強くなっておいてくれよな」

「全く…お前とやると金がすぐに底を尽きそうだよ」

「ははは…何事も経験だよ…」

「はいはい…」

8話

二人はその場で解散した。そして朔夜が歩いて帰っていると、閑静な住宅街の中にある広い公園から怒鳴り声が聞こえた。

「ぐだぐだ言っていないでさっさと金をよこせよ」

「うるさいわね！分かってるわよ。私だって大変だったんだからちよっと位取り分多くてもいいでしょう」

「約束は約束だ…」

二人の男と女のやり取りだということが聞いていて分かった。のぞく気はなかったが、通り道だから自然と目に入ってしまった。

よく見るとその女は先ほどゲームセンターで揉めていた女だった。男はさっきの男たちとは違った。男の学生服を見ればそれが一目瞭然だった。

「大体お前の手際がもつと良かったら、あいつらにばれずに済んだのに騒ぎを大きくしやがって…」

「しょうがないでしょ…思ったよりも勘がいい奴だったんだからさ。気を引く役のあんたらがもつと引き付けておけば良かったのよ」

「しっかし…財布の中身が全部で三万か…しけてるな。あいつら恐喝とかやってるからもつと持ってるかと思ったのによお…」

「いいからさっさと等分しようぜ」

そんな会話から朔夜は察した。

こいつらはさっきの松陵高校の奴らから財布を抜き取った。気を引き付ける役と財布を抜く役に分かれてやっていたんだと。そして抜いた財布はすぐにもう一人の奴に渡してその場から立ち去らせる。だから真っ先に疑われた女は財布を持っていないかったのだ。

人ごみの中のスリは近い存在が怪しいと思うのが心境だからその盲点をつけていた。盗った本人はそこにいるが、財布だけがどんどん遠くに行ってしまったのだから…

なかなかやるなあ…と感心しながらも自分には関係ないことだと無視して目の前を素通りしようとした。しかしそれを見ていた連中は朔夜をそのまま通すことはしなかった。

「おい！待てよ」

朔夜はそんな一言に振り向いた。自分が呼ばれたかどうかは分からないが条件反射というものである。

「お前：蓮学の奴だな？」

朔夜の制服を見るなりそう話しかけた。

蓮学とは、朔夜の通う学校の蓮旺学園の略称である。

無視しようかとも思っていたが、相手はそれを許さない雰囲気をも出し出していた。だから適当にはぐらかそうとも考えていた。

「そうですけど…」

何も聞いてません、知らないといった様子を振る舞い、対応をした。しかし

「金出せよ!」

そんな話を急にしてきた。

朔夜は二人をじっと見てしまった。ここで喧嘩慣れしてなければ、目すら合わせることはできないが、平然とそんな行為をやっていた。

朔夜は百戦錬磨の猛者に近い人物だったので、相手の力量というものを見ればすぐに分かった。

その結果…この二人は自分の敵ではないということが明確に分かった。

さっきの松陵高校の二人の方がよほど強そうだった。だが、そんなことを口にするなどできずにただ黙っていた。

「おい…早くしろよお…お前らお勉強が出来て金もたくさん持つてるって噂だぞ?」

朔夜をぱつと見るとどこにでもいそうなひ弱な男だったので、二人は始めから格下と勝手に決め付けていたのだ。そしてそんな様子を女も黙って見ていた。

どうする？ここで二人をぶん殴って片付けるのは容易いことだが…それをやってはまずいのも分かる…

頭の中でいろんな選択肢を探していたが、最終的に決めたのは逃げるという行動だった。

何もせずにただ走って逃げる。これなら相手を傷つけることもないし、自分が財布を差し出すこともなくて済む…

そんな判断は正しかったのだろう。相手は追いかけることをしなかった。

「はぁ…はぁ…はぁ…あいつら…無駄な体力使わせやがって…」

朔夜は相手が見えなくなっただけからゆっくりと歩きながら呼吸を整えていた。

以前の自分なら問答無用で相手の顔面に拳なり頭突きを叩き込んでいたはずだが、丸くなったものだとして一人で納得していた。

9話

「おかえりー」

息を少し切らせながら帰ると、晃人が勉強をしていたらしく机に向かいながら出迎えた。

「どうしたの？そんなに息を切らせてさあ」

流石にいつもと違う様子に突っ込んできた。

「ああ…実はな…」

素直に今日の出来事を話した。

それを聞くなり、晃人はよく相手を殴らなかったねと驚きながら話した。

「俺もそこまで馬鹿じゃない…入学早々に喧嘩で退学なんてこの半年の努力が水の泡になるだろ？」

「いやー…ついこの前までどんな悪童にも恐れられていた存在がねえ…」

「逃げることも戦略の一つだろうが…別に…格好悪いことじゃ…ない…」

最後の方は恥ずかしさのあまり声が小さくなってしまった。朔夜にとって逃げるという選択が今までなかったから屈辱的でもあった

のだ。しかし晃人は冷静な判断を下した。

「いいんじゃない。ここで揉め事起こしても何の徳にもならないんだからさ…それに相手もまさか極悪最強とまで謳われた人物がそこにいるなんて思いもしないでしょ」

「褒め言葉にもなつてねえーよ。俺からすれば、どれもこれも慣れない行動なんだからな…」

「まあ…血の雨を降らさないことを祈ってるけど、朔兄はそういつたトラブルに巻き込まれる運命の星なんだからやっぱり気をつけた方がいいよ…」

「どういうことだ？」

「引力つて奴だよ。修羅場に生きた人間は不思議と人を引き付けたり、呼んでもいないトラブルに巻き込まれるからね…」

「何だそれ？」

「あ…俺個人の意見だから…気にしないで」

「気になるわ！」

その出来事から数日後、朔夜は放課後一人で帰ろうとしていた。

いつも側にいた克哉は先生に手伝いを頼まれ居残りをしていた。たまには一人もいいものだ。と朔夜は軽い足取りで校門から出た。

春先の五時過ぎはそんなに日が長くはないので夕焼けが眩しかった。そして朔夜は部活動は入部しないことを決めたのでこの時間に帰ることができた。

このまますんなりと帰るか寄り道をするか決めかねていた時に、不意に克哉とのゲームセンターの対決が記憶に蘇った。

そうだ…俺は負けっぱなしだったじゃないか。しかもぼこぼこのけちよんけちよんに…

それならば克哉のいない今こそ、自分の腕を磨く時だといきなり心に火を灯して行き先を決めた。

大分歩きなれてきた街を見回しながら悠々と足を動かしていると、不意にその足が止まった。

裏路地をたまたま歩いていたらトラブルに出くわしてしまったのだ。これはもう晃人の話していたことそのものだった。

そしてその揉めている現場にいたのは、あの財布を盗まれた松陵高校の生徒と、その盗んだ本人だった。

朔夜はその姿を見て思わず物陰に体を隠してしまった。

「離せよ！」

女は男に腕を掴まれて暴れていた。

「お前らがやっていることはもう分かったぜ」

「俺らも馬鹿じゃない。悪い話つてのはすぐに回ってくるからな…
そこで佐久間工業高校に窃盗団グループがあつて最近派手に荒らし
まわっている噂を聞いた」

「手っ取り早く関係者何人かをぼこつて吐かせたら簡単にお前らの
名前が出てきた…いやあ…まいったねえ。俺らのお株を奪つような
行動をして…雑魚がさあ…」

にやにやと笑いながら楽しそうに話していた。自分らを騙した報
いはきつちりと受けてもらつと言わんばかりに。

「残りの二人見つけて脅したらすぐにゲロしたから、まあ…示談金を用意させることで勘弁してやったよ…それで後はお前だけだ…どうする？俺たちに誠意を見せてくれないと酷い目にあうのは分かっていると思うが？」

女はそんな話を聞いてもどうすることもできなかった。自分だけの力で二人の男から逃げることは不可能に近いからだ。

無理やり腕を振り払おうと必死に抵抗するが全く意味を成していなかった。男たちは喧嘩慣れしすぎている。だから相手をどう押さえ込めばいいのか知っていたのだ。

「暴れんな…ここで逃げたって居場所も割れてる…しつこく追い込みをかけるだけだからな。お前らの窃盗容疑のネタもあることだよ…警察に駆け込んだって不利なのはお前の方なんだよ」

まるでヤクザのような暴言と追い込み方だった。が朔夜にとっては聞きなれた言葉ばかりだった。

「金で勘弁してやるって言ってるんだから。飲んだ方が得だ…それとも体で払うか？俺らは別にどっちでも構わないんだぜ」

エスカレートしていく発言を聞きながら朔夜は隠れながらも頭を抱えて悩んでいた。それは昔の自分がそこにいるような感覚に襲われて恥ずかしくなっていたせいもあった。

どうする？このまま引き返して、見なかったことにしようか…ま

してや相手は悪の巣窟の住人だ。俺が巻き込まれれば巻き添えを食って今後の生活に影響することも絶大だ。しかしなあ…見殺しつてのもなあ…

そんな感じで朔夜は心の中で葛藤していたが、体が勝手に動いていた。修羅場は慣れていた。だから頭とは関係なしに条件反射で動いてしまったのかもしれない。

ずっと前に出るとその場を何事もなかったかのように素通りしようとした。通行人を装うことで男たちが驚いてその場を諦めてくれるかとも期待した。しかし同じ高校生がそこに現れても別に焦る様子もなかった。だから何見てもやがんだあっちに行けよ。程度に脅されてしまった。

「はあ…」

分かりきった結果だけに、ため息が漏れてしまった。となると残された選択肢は二つだった。このまま素通りするか、女を助けるかだ。助けるといっても話し合いの場が成立するのは難しいから、当然の如く喧嘩が前提となってしまう。

そうこう考えている内に女は声を発せずとも何とかしてくれといった泣きそうな表情で朔夜を見た。

それを見て朔夜は決意が固まった。

男たちになじりよると、丁寧に「離してやりなよ」と声を掛ける。

男たちはそれを聞いて笑った。

まさか自分たちの高校に喧嘩を売る奴がいるのかといった感じで見下していた。朔夜は二人の男に比べると小柄な方である。しかも真面目そうな容姿は男たちから負ける要素をどんどん奪い去っていた。

しかし朔夜はそんな油断している奴らを逆手に取る。相手が動く前に動くことを決めていたからだ。

ぎっ…

ノーモーションで間髪入れずに相手の領域にいきなり踏み込んだ。そして女の腕を押さええている奴の腹部に直線的に拳を一発、そのまま横にいた奴の腹部に横蹴りを叩き込んだ。

衝撃が激しいことを表すように蹴られた相手の体は空中で海老のように丸まった。

「ううう…」

二人は完全に予期することなどできなかつたので、打撃を避けることも軽減することもできずに肉体にまともに入っていた。

根本的な間違いは朔夜を初めから舐めてかかっていたことだ。喧嘩なれしている人間がここにいるとも知らずに警戒心を緩めていた結果がこれである。

意識はあるものの腹部の激痛に耐えるためにうずくまっていた。

女を押さえつけていた手も離してしまい、女はそこで自由になっていた。しかし何が起きたのか理解できていないので、離された手を見てもすぐには動けなかった。

それとは対照的に朔夜はすぐに逃げるようにその場から離れていた。

「え？」

女は走り去る朔夜の背中を黙って見ていた。そして男たちが動けないのを確認するなり、朔夜同様その場から離れていった。

朔夜は暗い裏路地から一気に抜けると、人の多い大きな通りへと出た。しばらく走っていたので、呼吸を必死に整えていた。

「はあ…はあ…はあ…」

何で自分がこんな目に…

汗をぬぐいながら今日は大人しく帰ろうと考えそのままゲームセンターにも寄らずに施設へと歩いていった。

11話

日課のように同室の晃人には今日会った出来事を話した。すると晃人は楽しそうに話を聞いていた。

「流石だねえ…この前話したばかりなのにもう巻き込まれたの？」

「そう言うなよ…俺だってまさかこんなすぐにこうなるなんて思いもしないんだからよ」

自分の話した通りに事が進んでいることが嬉しかったのかもしれないが、朔夜にとっては楽しいことではなかった。

「いやいや…まさかこんなに早くそうなるとは思わないじゃない…」

腹を抱えて笑っていやがる。ちくしょう。話すんじゃないかと朔夜は後悔していた。

「でもさ…済んでしまったことはしょうがないじゃない。これからどうするかってことが大事でしょ？」

「まあ…そうだな」

「朔兄のことだから手際よくやってのけたんでしょ？」

そう聞かれると、あの時の光景が脳裏に蘇っていた。会話もほとんど交わさず、視線が合つて数分後には相手は地べたにはいつくばっていた。だから自分のことをはつきりと認識させる時間は与えなかったとも思っていた。

「なら…追い込みの方は大丈夫なんじゃない？どこの高校の制服かまでは分かって、誰がやったかなんて分かっていると思っよ。それに…朔兄を探すよりも女の方を探した方が相手にとっては手っ取り早いでしょ」

効率を考えたならその通りである。しかし自分が探されない保障はどこにもなかった。

「大丈夫だよ…無いとは思っけど、朔兄がそのことをネタに追い込まれてこの施設にいらなくなるようなことがあったら、俺も助けるからさ」

晃人はそんな力強いことを口にした。

「お前…そんな力あるのか？」

「俺にそんな力はないよ…法律に助けてもらっただけだからね…」

あっさりとそんなことを口にしたので、朔夜は拍子抜けした。

「案外そういう力も馬鹿にはできないんだよ。もしも俺がやるって言うなら徹底的にやるしね。それに…暴力しかない子どもには脳みそを増やして欲しいから制裁の意味で親や親戚を巻き込んでもちが追い込んでやるよ」

晃人は不適な笑みを浮かべた。正にブラックな部分の彼の性格が出た瞬間だった。だから朔夜も内心、こいつは怒らせると何をするか分からないなとも思っていた。

「まあ…お前が頭がいいのは知ってるからな。その時は…その…期待しとくよ」

若干引き気味であったが、晃人の善意を無駄にすることは出来な
いとも思っていた。

12話

あの件から更に数日の時間が流れたが、特に朔夜の生活に変化はなかった。

自分のことを嗅ぎまわっている松陵高校の生徒の姿がないことで多少の安心感があった。それでも警戒心を緩めることはしなかった。

「朔夜：お前部活しないで、バイトするんだろ？どこかいいところ見つかりそうか？」

克哉が屋上で昼食中にそんな話題を振ってきた。

「まあ：一、三候補があるかな：そういうお前はどつするんだ？バイトするのか？」

朔夜が切り返すと、克哉はそれがさ…と話し始めた。

「文化部の先生に頼まれてさ、パソコン研究会に入ってくれないかって言われてて…」

「へー：お前、パソコン使えるんだ」

「あのなあ：俺らぐらいの年なら携帯同様に誰でも使えるだろ？」

当たり前のように話したが、朔夜は使ったことがなかった。すると克哉は驚いた顔をした。

「授業でもやらなかったのか？まあ…やらないところもあるか…」

授業にほとんどでなかった朔夜にとって、パソコンとは縁のない話なのである。それでも携帯はどうにか使いこなしていた。

「でもさ…先生に頼まれるぐらいなんだから相当できるんだろ？」

「まあ…趣味だったからな。いろいろ独自で勉強して覚えたことも多いから」

現代人だなあと朔夜は感心していた。

「だから、これから放課後はそつちに顔を出すからお前とも帰れなくなるな」

「いや…俺もバイト始めるからお互い様だ。丁度良かったじゃないか」

そのまま青空の下で食事を続けながら春の暖かい日差しと風を浴びていた。入学して二週間が過ぎたが、それぞれの一日のスケジュールが変わりつつあった。

朔夜はバイト先を決めるために施設に程近いショッピングエリアをうろつろしていた。

事前に電話連絡していたのは、大手スーパー「まるふく」だった。

ここはいろいろな部門でのバイトを募集していたので、朔夜の好みの条件にぴったりの部門もあった。

それは品だし部門だった。

人目を避けたい朔夜にとって荷物の運び出しは願ってもない仕事だった。うざったい接客もなければトラブルも少ない。体力さえあれば誰でもできる単純作業だったので真っ先に喰らいついたのだ。

「君は…高校生だけど、バイト大丈夫な高校なんだよね」

四十代後半の少し髪薄い店長が朔夜の面接をしていた。履歴書を見ながらも朔夜の顔を何度もちら見する。

少し緊張した面持ちで朔夜は対応をしていた。だから上ずった声で返事をする。

「は…はい…」

店長の一番知りたかった部分はそこだったらしくそれ以外は、あまり聞かれなかった。それだけこのスーパーは忙しく人手が不足しているということだった。だから即採用が決まり明日から入ってくれとのことだった。

時給と仕事内容、そして給料の受け取り方法の簡単な確認をするとそのまま朔夜はスーパーから出て行った。

13話

朔夜はすんなり決まったことを嬉しく思っていたそして上機嫌のまま側にあつた自販機でジュースを買った。

「はあ……」

一仕事終えたような清しさを感じながら一息ついていると、背後から話し声が聞こえた。

「佐久間工業の奴らよ、最近調子に乗りすぎてねえか？」

「ああ、実力もないくせに粹がっている奴ばかりだからなあ……」

朔夜は松陵高校の生徒だということがはっきりと分かったので、そちらを見ないように黙って聞いていた。

そいつらは制服を着ながらも堂々と煙草をふかしていた。

「この前もさ……松田の財布を狙った奴がいたらしいけど」

「ああ、それが、結局そいつら締め上げたんだろ？」

「なんだけど……お前その先知らねえの？」

「え？何かあつたのか？」

「関係者の女を脅していたらいきなり現れた男があいつらを瞬殺でぶちのめしたんだってよ……」

「はあ？あの松田たちをか？どこのどいつよ？」

「それが分からないんだと…あいつらも面をはつきりと確認しようにも間に合わないぐらいの速さでやられたらしい」

「おいおい…学年一、二の不良を誇る奴らだぞ…そんな簡単に倒されるってことはその筋の人間か？」

「高校生らしいが、学校も分からないだと…これじゃあ探しようがないよな」

二人は朔夜の行った一部始終を話していた。だから余計に顔をそちらに向けることなどできなかった。黙ってそのまま動かずに話を聞いていた。

しかし朔夜はほっとしていた。その話を聞いたことで自分の存在がばれていないということに。

「でもよ…それなら逃げた女から話を聞くんじゃないか？」

「そうなるかもな。いやーその女も気の毒に…あいつら男女関係なく容赦しないからなあ」

笑いながら自分たちには関係のないといったように話していた。

朔夜はその会話を聞いても特に心が動くわけでもない。あの場は仕方なく助けたのだからその後の面倒など知らないのだ。ましてや、あの女が何者かなど自分も知らなかった。不良同士の揉め事はそつちで勝手に盛り上がってくれといった様子だった。

朔夜はジュースを飲み終わるとすぐにその場から退散した。悪名高い高校の生徒なら自分の制服を見ただけでも恐喝されかねないから…

施設に帰ってから朔夜は施設長にバイトの許可を貰いに行った。

「そうですか、決まったんですね」

施設長は温和で性格の優しい人だった。いわくつきで思春期の人間がたくさんいる中でまとめるのは大変なことである。力で押し付けることは絶対にできない。諭すことが重要になるのでこのような性格の人が適任なんだなと朔夜も思っていた。

「朔夜君なら根性もありますから、がんばれますね。いいですよ…」
簡単な言葉だけで説教じみたことも言わなかった。自分が昔出会った人間は、第一声が決まって「問題を起こすなよ」の一言だっただけに自分を信頼してくれているのだと感じた。

「ありがとうございます」

そのまま部屋を立ち去ろうとした時に、また声を掛けられた。朔夜が振り向くと、

「朔夜君：無理しすぎてはいけないよ。僕らに迷惑をかけまいとしているのは分かるけど、君ももっと自由にしていいたからね」

そんな言葉を掛けられた。

「え…は…はい…」

朔夜は複雑な面持ちでそのまま部屋を出た。

施設長の言葉はまるで朔夜の心を見透かしていたかのようなだった。

確かに迷惑を掛けないことを前提にこの数ヶ月行動していたことがたくさんあったのだ。しかしだからといって軽率な行動は避けたかった。自分にとってここは人生を変えられた大きな場所なのだから。簡単に壊していいものではない。そのことを自分が一番知っていた。

14話

翌日、学校帰りにバイト先に向かうと早速仕事に取り掛かった。

朔夜は要領が良い方だったので言われたことは次々にこなしていた。

相手が要求すること以上に動けるので、仕事を任せる方も楽しかった。

「新人の奴…なかなか素直で動けるなあ」

そんな言葉も飛び交っていた。

てきぱきと足りなくなった物の品出しをしているとバイト時間の三時間はあっという間に過ぎた。

五時から八時までのバイトだったので高校で部活をする時間とそんなに違いはなかった。だから帰りも遅くならないので施設の人間も心配しなかった。

それから一週間が経ち五月に入ると、朔夜はそのバイト先でも大分馴染み、世間話程度ならできるような関係を築くことができた。

いつものように店内を見ながら足りない物を補充したり、お客さんの要望の物を取りに行ったり慌ただしく動いていると、一人の高校生が目についた。

「あれは…」

どこかで見たことのある女子高生だった。

そう、朔夜が数週間前に助けたあの女子高生だった。茶髪のロングで耳にピアス、胸元も開いて、ミニスカートという大胆な服装はよく覚えていたのだ。

凝視する気はなかったのだが、相手がどうも怪しい行動をしていたのでつい見てしまった。

女は菓子売り場のコーナーをうろつろしながら回りを気にしていたのだ。そんな動きを棚の影から見ていた朔夜は、

「こいつ、やる気だな」と心の中で思っていた。

すると、案の定女は何個かの菓子を視線はそのままで鞆の中に無造作に突っ込んでいた。

何度か万引きをしたことのある朔夜にとって、万引きをする時の空気が分かっていた。だから絶対的な自信があったのだ。

さて…どうするか？

朔夜はそのまま見過ごしてもいいとも思ったが、ことが大事になる前に防ぎたいとも考えていた。

だから未だに店内をうろついている女の側に近づいた。あまり人気がないコーナーにいるのを見計らい背後から肩を叩いた。

「え？」

女は一瞬びくつとなり反応した。慌てながら振り返ると更に驚いていた。

「あ…あんだ！」

自分の最悪の状況を救ってくれた人間がこんな所で会えるなど思ってもいなかったから当然である。

そんな驚く相手とは違い朔夜は冷静に手を差し出すだけだった。

「な…何？」

その行動の意味が分からなかった。しかし朔夜は同じ行動を続ける。

「ほら…出せよ…速く…」

「え？何のこと言ってるの？この前助けたから金出せってこと？」

「違う…分かってるんだろ？鞆の中だよ。ほら、速く…」

女はしらを切るうとしたが、朔夜の無言のプレッシャーが効いたのだろうか、観念して鞆から先ほど盗った菓子を全部出した。

「もうやるな…それで、この店にも来るな」

そんなことを話すと朔夜はその場からいなくなった。女もそんな状況ではここにいるのが気ままずくなったらしくすぐに店を出た。

時刻は八時を回った。

バイト終了時間を時計で確認すると朔夜は「上がります」と一言声を掛けて、ロッカールームに行った。そして着替えを済ませると店員入り口から外に出た。

するとそこにはあの女が待っていたのだ。

「最悪だ…」

思わずそんなことを口にして頭を抱えた。

女は自販機で買ったコーヒーを飲みながら朔夜を待っていたのだろう。足元に缶が数本置いてあった。

「お前な…」

説教でもしてやろうかという勢いで相手に話しかけようとしたが、逆に相手の言葉に遮られた。

「やっと会えたあ…」

朔夜に近づいてきた。その距離はほんの数センチという位だった。

「は？」

「私あれからずっと探したんだよ？聞き込みしたり、近場の遊び場をうるついたり…だけど全然見つからなかったからさあ…まさかこんな所で会えるとはねえー」

「おい…何言って…」

「あんたさどこの高校？何歳？何でここでバイトしてるの？」

「ちょっと待て…」

「家とかもここから近いの？私は少し離れてるんだけどさあ…」

「だから…」

「そつだ！彼女とかいるのかなあ？ねえ？そこ大事なんだけど…」

朔夜の話など聞かずにどんどんマシンガントークが繰り広げられる。それに腹が立ってきた朔夜はついに大声を張り上げた。

「うるせえ！俺の話を聞け！」

すると先ほどの騒がしかった場が嘘のように静まり返った。

「万引き未遂女にいきなりぎゃーぎゃー言われてもこっちは心の準備も何も出来てないだろうが！っつて言うか俺に構わないでくれよ」

「え？」

「あの時は気まぐれで偶然助けたただけだ。だから気にしないでくれ。俺はもう帰らなきゃならないから…その…じゃあな！」

はっきりと言いたいことを伝えられるはずもなくそのまま朔夜は女を無視して帰ろうとした。しかし女は後についてこようとした。

だから、

「ついてくんな！」

その一言で一蹴した。

女は寂しそうに朔夜の背中を見つめながら黙ってその場に立っていたが、朔夜が振り返ることはなかった。

15話

翌日朔夜は少し機嫌の悪いまま登校した。

この学校に入学してからもう一ヶ月と少しが経ったわけだが、未だにクラスの人間とは溶け込めていなかった。

席についても誰も自分の側には寄り付かない。

元々広く浅くの付き合い方が下手な朔夜にとってはしょうがないことだったが、別に悪い気はしなかった。克哉もいるからそれで十分だと考えてもいた。

授業は常に静かで見んな一生懸命ノートをとって勉強に励んでいた。朔夜は考え事をしていたのか、半ば上の空で教師の話聞いていた。

「朔夜：バイトの方はどうだ？」

克哉が休み時間にそんなことを聞いてきた。

「ああ…まあまあだな…」

浮かない表情の朔夜だったが、それを見た克哉は何かあったことだけは分かったようで余計な詮索はしなかった。

「お前はどんなんだ？」

「ちまちまと学校のためのホームページ作りやら書類作成の手伝い

をさせられてるよ」

「へー…何だかんだ言っただけで学校のために働いてるんだな。それで克哉にメリットはあるのかよ？」

「メリット？さあ？でもさ…いろいろやっている俺も覚えることがたくさんあるからいいんだけどよ」

「金も単位ももらえないのによくやるな」

「まあな。楽しいから別にいいよ」

朔夜はそんな克哉の態度に羨ましくも思った。自分は楽しいと思っただけのめりこんだものを見つけたことがなかったから。

しかし昨日の出来事を思い出すだけで、そんな友人を讃えてあげられるような気分でもなかった。

「そうそう…話しかえるけどよ、今度お前の家に遊びに行ってもいいか？最近下校時にお前と遊ぶこともなくなったし、これからテストが近いだろ？だから勉強も兼ねてどうかなーってな…まあ…軽い気持ちだ」

「え？」

そんな話が出るとも思わず、驚いた朔夜はどのように返していいのか分からなくなっていた。

「おいおい…まずいことでもあるのか？いきなり行くわけじゃないんだから、部屋が汚いならきれいにしとけばいいだろ？それに…俺

も長居をする気もないからよ……」

朔夜の気持ちとは関係なしに克哉はどんどん話を進めていた。

流石に朔夜もここまで来て白を切りとおすことは無理だとも感じていた。断ることは簡単だが、いずれはばれてしまうのは明白なのだから腹をくくった。

「あ…ああ、分かったよ」

勢い混じりでそんな言葉がつい出てしまった。それならばと、克哉は早速次の日曜に予定を入れてしまった。

朔夜はため息をついて今後の自分の生活に多少の不安も感じていた。

いつものようにバイトに入った朔夜は開始早々に愕然とする光景を目の当たりにした。

「え？」

目に映るのは昨日確実に忠告をしたはずのあの女だった。何もしなくても目立つのですぐに目に入った。

あの野郎…

朔夜の心の中に浮かんだのはその一言だった。しかしこのまま怒りを露にして対面してしまつたらそれこそバイト存続の危機に陥つてしまう。だから強制的に自らを落ち着かせた。

そこで出た決断は…

「すみません、店長…僕、今日は物置の在庫チェックと注文の方に回っていいですか？」

そう話して会わないことを選択した。すると店長は快く答えた。

「いいよ。あ…でも青果や肉、魚には手を出さないでね。あれはベテランの人じゃないと無理だから」

「ええ…分かっています」

とりあえず腐らないもの限定での許可が下りたので胸を撫で下ろしながら朔夜はひっそりと裏の物置に身を隠した。

バイト時間三時間きつちりそこで過ぎすと、朔夜は終了時刻に店の中に顔を出した。

店内を見回してもあの女の姿はどこにもなかった。三時間も店内をうろろろしていたらそれこそ頭のおかしな人間である。

ここで安心するのはまだ早かった。ひよっとしたら昨日のように出入り口で待たれているかもしれない。だからそれを見越して店内を違って外へ出ることにした。

誰もいないことを確認するとそのまま足早に帰り道を歩いた。

朔夜はあの女の行動の意味が分からなかった。だからどう対処していったらいいのか思い浮かびもしない。

バイトを止めて会わないようにするのは簡単だが、何故そこまで自分がしなくてはならないのか：そう理不尽さを感じる部分もあったのでその決断にはいたらなかった。

偶然助けたことで厄介なことに巻き込まれたのは自分自身が悪いのだが：納得がいかなかった。今の朔夜は平穏を誰よりも望んでいたから。

それと同時に日曜日に克哉が家に来るということも頭の中に浮かんだ。二重に朔夜を苦しめるものが存在するのだが、住居を偽ることは難しい。いずれは知られる事実である。

だから克哉には過去のことを話さないまでも現状を知ってもらうことは仕方のないことだと諦めもついできていた。

それに自分と真っ直ぐ付き合ってくれる人間はそんなにいないから心も揺らいでしまうのだ。

16話

三日後

バイト先にあの女が現れることはなく朔夜はほつとしながら毎日
を過ごしていた。そしていつものようにバイト先に行くとは何やら様
子がおかしいことに気付いた。

「さつくやくーん」

「はい？」

バイト先のパートのおばさんがにこにこしながら朔夜に声を掛け
る。

「あなた…モテモテねえ…」

そんな言葉に朔夜は何のことも分らず困惑するだけだった。

「いやねえ…昨日、あなたのことをしつこく聞いてくる女子高生が
いたのよお」

「え？」

「名前は何だ？とか高校はどこだ？とか、いろいろね…」

まさか…朔夜の頭の中に嫌なことが過ぎった。

「それで答えたんですか？」

朔夜はあの女がそんな暴拳に出ていたとは知らず、正に予想外の出来事だったから取り乱す。

「そんなに知りたいたいなら本人に聞けばよかったわよ…だから今日お店に来るはずだけど…」

「はあ…」

またまた最悪だ…朔夜は心の中でそう思いながら肩の力が抜けた。

周りの人間に知られた状態でこちらが無視したり、店内で大声でも上げたらそれこそ変な噂が飛び交うに決まっている。そしておばさん連中による噂話の伝達の速さといったらもう光通信を超えているのだから下手な行動は取れないのだ。

だから朔夜はあの女と会って話すという選択を余儀なくされる形になってしまった。

女はおばさんの話どおりに七時過ぎに店内を訪れた。

ここでは朔夜は冷静に対応する。

「ここではあれだから…終わってから外で話す」

そう端的にまとめて話すと女も納得したのか満面の笑みでそのままその場を立ち去った。

女とは対照的に朔夜は複雑な気持ちでいっぱいだった。

そしてバイト終了時刻、女は朔夜の言いつけ通りに待っていた。

「ここだと目立つ…先の公園で話そうか」

朔夜はするように促し以前この女の仲間に絡まれた公園へと歩き出した。

ららんと足取りの軽い女を背後に渋い表情のまま朔夜は足を動かす。

「ねえねえ…あなたの家ってここら辺なの？」

歩きながらもうるさく話しかけてきたが、朔夜は無視していた。

「ここでもいいか…」

足を止めると、朔夜は女の話の話を聞くことにした。すると女はまず自己紹介から始めた。

「そついえばさ…名前まだだったよね。私さ高田美羽たかだ みうっていうんだ。みうでいいよ…」

朔夜にとってそんなことどうでも良かった。

「この前は助けてくれてありがとう。まず、それが言いたかった。それでもう一つはごめんなさい…万引きしようとして…まさかあそこであなたが働いているなんて思わなかったし…」

万引きのことを反省しているのか、少しうつむいて暗い表情をしていた。

馬鹿丸出しの女なのかと勝手に誤解していただけにその行動は以外で朔夜も驚いた。

「用件はそれだけだったのか？」

「んな訳ないでしょー…本題はこれからだつて…」

先ほどの沈んだ態度はどこへやらといった様子ですぐに切り替わった。

「まずはあなたのことを教えてよ…私すっごい興味を持ったんだから。今まで他人にこんなに興味持つのって初めてかもしれないんだよ」

「そんなの知らねえーよ」

「名前だけでもいいから教えてよおー…」

甘い声を出して迫ってくる。しかしここで教えないとまた押しかけてくるに違いないとも考えた。だから朔夜はルールを作ることにした。

「わ…分かったよ。それなら約束をしてほしい。俺のことを教える代わりに絶対にバイト先には来ないでくれ…それともう一つ。俺がお前を助けたことは誰にも話すな」

「ええーどうして？」

「それが守られないのなら、俺は何も教えないし、これからもお前

を無視する。それにバイト先も変えるしな…」

そこまでするぞと朔夜が脅すと、美羽も観念したのか大人しくその条件を飲むことにした。

「俺の…名前は…高崎朔夜だ…」

普段自己紹介などあまりしたことがないので声が上がってしまった。しかし美羽はそれが聞けたことだけで大満足したようで、目が輝いていた。

「さくやかあ…いい名前だね」

「そつでもない…」

「まあまあ…これからもよろしくね、朔夜！」

「っておい！何でお前によろしくされなきゃならないんだよ、それに初対面に近いのにいきなり呼び捨てかよ！」

細かいことは気にするなと美羽が話したが朔夜はどうも納得がいかなかった。

「高校何年？」

「一年」

「学校は？」

「蓮旺学園…」

「それって超頭いい学校じゃん！」

「…」

返す言葉が見つからず無言になっていた。

そして美羽はもっと聞きたくてしょうがなかったのだが、朔夜はこの辺で切り上げることにした。

「もういいだろ…俺の正体も明かした訳だから、バイト先には来ないでくれよ。それと…ストーカー行為も勘弁してくれよな」

疲れた体を引きずるように朔夜はそのまま公園から去っていった。

それを見ていた美羽はまだまだ話したりないと不満そうな顔をしていた。

17話

日曜日

克哉が約束をした日が来た。

朔夜は朝早く起きると私服に着替えて待ち合わせの場所に歩いていった。

駅前にはこの町のシンボルであるクマにゃんという熊と猫の合体した大きな銅像が置かれている。そしてそこが目立つので大抵待ち合わせの目印に使われていた。

「待ったか？」

克哉は朔夜が着いたすぐ一分後に姿を現した。

「いや…」

「そうか…なら案内してくれよ」

「はいはい…」

歩きながらも若干悩んではいたが、ここまできたら逆に吹っ切れてもいた。

適当な会話をしながら数分で目的の場所に着くと克哉は流石に驚いた。

目の前には養護施設の看板が嫌でも目に入ったのだから。

「え？…ここか？」

そんな克哉に嘘をつくことはせずに朔夜は、はっきりとそうだと答えていた。

「そうか…なるほど…」

克哉は別に表情を曇らせることもせずに、寧ろほっとした様子を見せていた。

その態度が何を意味しているのか朔夜に分かるはずもなかった。

「ありがとな…」

「え？」

「いや…その…お前も言い出し辛かったんだろ？俺が無理やり誘ったもんだから…」

人の心を見透かすようなことを話すので、朔夜も素直に答えることしかできなかった。

「う…まあな…」

「でもよ、お前がどこに住んでるかなんてどうでもいいことなんだよ。貧乏だろうが裕福だろうがな…ははは」

ぶっきらぼうな言葉ではあったが、朔夜はどこかほっとしていた。

自分の過去にかなりの重い目を感じ、新たな生活もひよつとしたらうまうまいかないのではないかという疑心暗鬼がどこかにあった。だから本当の自分を見せることを極力嫌っていたのだ。

しかし唯一の友人に自分の一部を見せることで僅かではあるが重たい枷がはずれた気がした。

「この中は部外者でも入れるのか？」

「ああ…大丈夫だ。俺が話ししておいたからな」

「そうか…なら見せてくれよ」

朔夜はそのまま照れくさを隠しつつつ克哉を案内すると、施設内に初めての知人を入れることになった。

施設内に入ると周りの目は克哉に釘付けだった。あの朔夜が連れてくる人間がどんな奴なのかという魂胆が見え見てといえはそうだった。

「ねーねー…お兄ちゃんどこから来たの？」

小学生以下の子どもたちは容赦なく絡んでいった。そして新しい玩具でも手に入れたかのように遠慮なくパンチやキックをお見舞いした。

それだけでも疲れるのに追い討ちをかけるかのように小学生の女の子によるマシンガントークが炸裂する。

「ねえねえ、どうして朔兄と仲良くなったの？」

「朔兄って学校でどうなの？」

「暴れてるの？怖いの？」

「変態？」

「恋人できた？」

途中変な会話も混ざっていたが、克哉はその質問にも一つ一つぎこちなくもどうにか対応していた。

そんなもみくちゃの様子を見ていた朔夜も気の毒に感じていたので、この辺でいいだろうと取り付いていた人間を追い払った。

ぐったりとした克哉を見れば場慣れしていないのは一目瞭然だが、初体験の人間は大抵こうなってしまう。外界と隔離されたような環境からすればこのような客人は小さい子どもの格好の餌食なのだ。

朔夜の部屋に案内されるとそこには晃人の姿があった。

「あ…こんにちは」

晃人を見た瞬間に克哉はそんな言葉が出てしまった。

そして晃人はそんな克哉に気を使うかのように、

「朔兄…僕ちよっとそこら辺に出かけるけど何かいる？」

外出の仕度を整えながら朔夜に話しかけた。

「いや…特にない」

「あ…そう…じゃあね」

お気に入りのグレイのパーカーを着ると晃人はそのまま部屋から出て行った。そして克哉はその様子を黙って見ただけだった。

「これ飲むか？」

そんなその場に取り残されたような克哉に対して朔夜はそこら辺に置いておいた缶コーヒを差し出した。

「え？ああ…じゃあ、もらつよ」

少し拳動不審な様子になりながらそれを受け取りすぐに開けて口を付けた。

「すごいだろ？」

「え？」

「毎日こんな感じだよ。でもさ…あれぐらい元気じゃないと駄目なんだよ。それが強がっていたとしても…」

朔夜の言葉の意味は重く、克哉にもそれが伝わっていた。察しの良い克哉はどことなく気づいていた。

ここにいる人間は皆訳ありなのだ。

深くは追求しなかったが、朔夜は話を続けていた。

「勝手な大人が多いから俺らのような人間もたくさん出てくるんだ…俺がここにいる時点で気づいていると思うけど、俺の親も訳ありだ…」

「ああ…そのようだな」

「俺の両親は小学校の低学年の時に離婚した。父親が原因でな…それでその父親も中学の半ばで警察に捕まったよ」

朔夜が握り締めていたコーヒの缶がべこつとへこんでいた。

「まあそんな訳でここに厄介になってるんだが…目の当たりにしてどうだ？引いたか？」

薄く笑っていたが、切ない気持ちを隠しているかのように感情が入っておらず無理していた。

そんな朔夜を見て克哉は態度を変えることはしなかった。それよりも話してくれたことが嬉しかったようである。

「ありがとな。話したくないこと話してくれてよ…でもさ、だからって俺たちの関係がおかしくなることじゃないだろ？」

「そうだな…」

「ならいいだろ。俺もこれからここにちよくちよくお邪魔させてもらうからそのつもりでいてくれよ…それじゃ、少し勉強するか？お

前数学でどっか分からないとかあるって話してただろ？」

「うっ…ああ…」

すっかり克哉のペースになってしまい朔夜はそのまま飲まれる形になってしまった。しかし朔夜は先ほどの会話の勢いのまま自分の犯した暗い過去も話そうかと思っていたのだ。だが、それが遮られる流れになってしまったので、再び話そうという気にはならなかった。だから別に話さなくてもいいかという気にもなってしまった。そのまま二人は一時間に満たない時間勉強会をしていた。

18話

「さて…こんなもんで今度のテストは大丈夫だろ？」

朔夜の分らないと話していた箇所を全て教え終わると克哉は休憩を促した。

朔夜も勉強の方はもう十分だったので、その提案を受け入れた。

「外に出よう…気分転換に歩きながら話そう」

「そうだな」

二人は部屋から出るとそのまま施設の外に向かった。

「ねえねえ、もう終わりなの？」

「そっちのお兄ちゃんもう帰るの？」

「まだ帰らないですよ、遊んでよ」

「そうだよ、遊んでよ」

克哉の周りに小さい子どもが数人付きまとい大騒ぎしていた。

その様子を見ていた朔夜もやれやれといった感じで静観している。

「うん…でもまた来るから」

克哉はそう話したが子どもたちは寂しがつていた。玄関から二人が去っていく姿をじっといつまでも見ていた。

外は快晴で風も適度に緩やかに吹いている。二人ともそんなに厚着をしていなかったが寒くはなかった。

真っ直ぐに伸びる住宅街の道路を並んで歩いていた。

「騒がしかったろ？」

「ああ…でも楽しそうだな」

「毎日続くとうんざりだが、なければ寂しいかもな…でも意外だな。お前子どもの扱い上手いじゃないか、俺でも慣れるまで相当時間掛かったぞ…」

「子どもはそんな嫌いじゃないんだ。結構面白いからな…」

「へー…そんなもんか…」

感心しながら先の公園を目指していた。あの問題の女、高田美羽絡みの場所であったが朔夜はその公園が好きだった。

施設から歩くこと二十分でそこに着いた。

休みということもあって、たくさんの親子連れ子どもの姿がそこにはあった。その理由はこの公園がものすごく広く遊具がたくさんあるということだ。

「おいおい…ここ…すごい広さだな」

初めて来た克哉は驚きを露にしていた。その広さは克哉が見てきた公園の十倍はあったからだ。

木々もたくさん生い茂り、池もある。走り回れる芝生もあれば煉瓦置の通路や噴水もあった。

「俺の通学路で気にいつてる場所だよ…割といいだろ？」

「ああ…びつくりだ」

池の側のベンチを見つけるとそこに腰を下ろし、トイレ脇の自販機で買ったジュースを二人で飲んだ。

「そうだ。お前に聞きたいんだけど、何であんなに勉強できるんだ？俺のわからない所をまさか全部教えてもらえるなんて思いもしなかったからな」

克哉に聞くと、克哉はどこか寂しそうに答えた。

「それしか取り柄がなかったからな…まあ…小さい頃からずっと強制され続けた結果だ。でもそれも嫌になっってきてさ…反発するようになっただけで、自分の行きたい高校に勝手に進学したようなものかな…」

朔夜はそんな克哉の浮かぬ顔を見て、こいつも家庭内で何かあったのだらうと同情した。

「それはそうと、朔夜…お前対戦ゲームの腕の方はどうなんだ？大分上達したのか？」

にやにやと朔夜の方を見ながら話してきた。明らかに挑発しているかのようだった。しかし朔夜は強気で返す。

「俺が何もしなかったとでも思うのか？今ならお前には勝てるかもな…」

その発言の根拠に、バイトのない日は、あのゲームセンターによく一人で通っていたのだ。

「お…言ったな。そこまで言うならこれから行くっぜ、それで負けたら罰ゲームな」

負ける気のしない克哉は勝つことを前提にそんなことを口にした。そして用意周到に罰ゲームの書かれた手作りカードを用意していてそれを見せた。

「お前：明らかに今日俺を負かす気で遊びに誘ったろ」

「いいだろ別に…面白けりゃ。それに負けっぱなしは嫌だろ？」

「…まあな」

「なら決まりだ。っとその前に本屋にも寄っていいか？パソコン関連の本で買いたいのがあるからさ…」

「学校の手伝いに必要なのか？」

「ちょっと行き詰まりがあっつてな…限界な部分もあるからさ」

「そうか…なら、行くか」

飲み終えた空の缶を持ちながら二人はそこから立ち上がった。

するとずっと誰かが通りかかった。

ほんの一瞬であったが、その人に二人は釘付けになった。何故かというと、その人はとても美しく凛とした女性だったからである。

見ざるを得ないそんな雰囲気を漂わしていた。

髪は黒髪で長く、体の中に一本芯が通っているかのような歩き方がまた魅力的でもあったのだ。

そんな人物に会ったことがなかったので、二人からは素直な意見が出た。

「おい…きれいな人だなあ」

「ああ…」

本屋に行くことも忘れてそのまま立ちっぱなしの状態だった。

19話

克哉が本屋に入ろうとした時、朔夜は言伝を頼まれていたの思
い出した。

「そつだ…見積もりの話があった…」

「え？」

「いや…あつちの電気屋に配電盤の修理頼むのに見積もり出して
らう約束だったんだよ。お前は本屋でぶらぶらしていてくれないか
？すぐ行つてくるから」

「はいよ」

そこで二人は離れ、朔夜は電気屋へと足早に歩いていった。

施設内のあちこちはがたがたがきていたので、配電盤を修理しなくて
はならないことを最近知った。だから街に行くことがあったら話し
聞いといてと頼まれていたのだ。

小さな電気屋の中には中年の男性が一人座っていた。電話でしか
話をしていなかったの、どんな人間かは分からなかったが、声の
主がこの人だろうと思いつつ朔夜は話しかけた。

すると店主だったその男は、はいはい…と分かった様子で奥へ書
類を取りに行った。そこでは具体的な手続きはしな
いで、話だけを聞いて見積額を出してもらった。

数分で頼まれ事が済むと、克哉のいる本屋に戻ろうとした。すると朔夜は予想外の人物に出くわした。

「え？」

相手も朔夜と同じ反応を見せた。

「あ！」

その人物は朔夜を見るなり驚きの顔を笑い顔に変えて大きな声で話しかけた。

「うそおー…奇遇だねえーこんな所で会うなんてさあ」

私服姿の美羽がそこにいた。

制服同様に露出がそれなりに激しい感じの服を着ていた。

「ねえ！何してるの？買い物？」

朔夜が話す間もなくどんどん突っ込んだ会話をしてくる。だから朔夜は相変わらず何も言えないでいた。

「うっはあ…ラッキーだあ。まさか休日にこんなどつきりが待ってるなんて…」

どつきりはこっちだよと言いたげな様子で朔夜は美羽のことをにらんでいた。

「おい…勝手にテンションが上がるのは結構だが、俺…友達待たせ

ているから、もう行くぞ」

素通りしようとした時、ぎゅっと手を握られた。

「待ってよ!」

いきなり手を握られるものだから、朔夜もどきっとしてしまった。

「私も一緒に遊ぶ」

強引に朔夜を引きとめ、周りの目などお構いなしとばかりにそんなことを言った。

「はあ?ちよつと…いきなりそれは困るんだけど…」

「いいじゃん。いいじゃん。そのお友達も混ぜて一緒に遊ぼうよ!」

私:暇なんだよねえ」

軽いノリで迫ってきたが、朔夜は正直うっとおしく感じていた。だから無理と即答で断った。

「嫌だあ…いいって言わないと手を離してあげないんだから…」

馬鹿力で朔夜をその場に引き止める。

「迷惑掛けないから…ねえ?それに女の子いた方が盛り上がるでしょ?」

「それは…その女によるだろ!」

冷たい一言が美羽を突き刺す。すると流石に女の子だったらしく子どものように駄々をこねた。

「ひつどおーい…何よお…朔夜はそんなに美人で巨乳でお尻の大きい人が好きなの？」

大声を張り上げてそんな恥ずかしいことを口にするものだから朔夜も周りを見ながら取り乱した。

「お…おい！そんなこと一言も言っていないだろうが！勝手に決め付けるんじゃない！」

「じゃあ、何？もしかして…コスプレの似合う女の子の方がいいとか？自分色に染められる女がいいと？うっわあ…やらしい…」

滅茶苦茶な発言がどんどん飛び交い通行人の目にも止まりまるで朔夜が悪い人間のように扱われていた。

「ちよつと来い！」

頭にきたのか、恥ずかしくなったのか朔夜は美羽の手を強引に引っ張ってその場から離れた。

人通りの少ない場所まで移動すると、朔夜は美羽に怒鳴りつけた。

「ふざけんな！何で遊びに混ぜないだけであんなことを言われなきゃならないんだよ！もう少し周りのことも考えろこの単純馬鹿！」

息を切らしながら美羽に説教したが、等の本人はというと。

「そんな…強引に手を引つ張っちゃ駄目だよ…朔夜…」

別の世界に行っているらしく一人類を赤らめてどきどきしていた。朔夜には諦めのため息しか出なかった。

「あほらし…俺はもう行くからな…勝手にしろ」

克哉のいる本屋を目指そうとしたが、美羽がそのまま引き下がるはずもなく後を付けてきた。そしてそのまま気づいているが、無視して克哉と合流した。

20話

「あれ？その後ろの子誰？」

あまりにも朔夜の側にいるものだから朔夜が無視していても克哉が声を掛けてしまった。

「気にするな…背後霊だ。地縛霊だ。生霊だ」

そんな霊的なものの存在にしまったが、克哉の反応は違った。

「朔夜：水臭いな。彼女が出来たんなら紹介しろよ」

「え？」

朔夜の後ろにいた美羽が彼女という言葉に真っ先に反応して一人妄想にふけていた。しかしそれとは対照的に朔夜はというと、爆発寸前だったのだ。

「おい…今の俺の言葉聞いてなかったか？どう見ても彼女に対する扱いじゃないだろ？」

こいつは天然なのかと克哉を睨む。流石にこの時ばかりは以前の怖い朔夜がひよっこりと顔を出してしまった。だが、克哉はそうなのか？とあっさりとした対応を見せた。

「ちよつとした知り合いだ…別に無視して構わない…」

そっけない態度でそう話したが、克哉はそんな美羽をかわいそう

に思ったのか和やかに話した。

「おいおい…そんなに冷たくしなくてもいいだろ？お前何そんなに
かりかりしてるんだよ」

痛いところをついてくる。そう朔夜は思ったが詳しい話などでき
るはずもなくただ黙っていた。

「そうだよねえー…」

そんな克哉のやさしさを傘に美羽は前に出てきた。

「私：朔夜とあなたと一緒にただ遊びたいって話しただけなのに…
朔夜ったら…ふざけんな！コスプレしなきゃ嫌だ。もっと俺を楽し
ませるプレイをしるって言うんだもん…」

うそ臭い涙を浮かべながら訴えかけると、朔夜は必死に誤解を解
こうとした。

「嘘だ！お前一人で勝手に話作るんじゃないよ！」

まるで本当にそんなことがあったかのように話されたものだから
朔夜はただただ焦るばかりだった。

「お前…そんな趣味が…」

克哉も相手の話を真に受けてしまった。そんなあることないこと
を勝手にべらべらと話されては朔夜も流石にまいってしまい、美羽
に折れる形となってしまった。

「いや…遊ぶから。俺…そんなこと言っていないだろ？なあ？」

殺す勢いで美羽を見ると、そんな威圧にも平然としながら笑っていた。まるで自分の勝利を確信したかのように…

「そうだね。私の聞き間違いだったかも…つい朔夜が意地悪するか
ら冗談言っちゃった」

「あ…そうなんだ。やっぱりね」

克哉もそれに同調するかのようにはははと笑っていた。

そして当初の予定通りにゲームセンターに向かおうとしたが、朔夜は気になることがあり克哉に聞こえないように美羽にひそひそと耳打ちをした。

「お前…あの件大丈夫なのか？目立つ場所であいつらに見つかったら…」

「大丈夫…私の仲間が耐えかねて身内にはらしたから、警察やら学校と揉めてね…迂闊に手を出せない状態になっちゃったって訳」

「お前…一人おいしいじゃないかよ…」

「だってさ…そんな時に男は恥ずかしくて女の名前を出せないって弱みがあるから当然なんじゃない？盗った証拠もないしさ…」

「…いつ…」

あの時助けた自分が愚かだったと思わされてしまう話だった。

「いいじゃん。終わったことなんだし、私も改心したんだからさ…」
「改心ねえ…」

あの件のすぐ後に万引きをしようとしていたその女に改心という言葉が当てはまるのか見当もつかなく朔夜はただただ困惑するだけだった。

そのまま三人でゲームセンターに行くと、克哉と美羽は二人で盛り上がり、朔夜はどこか心の中ではしゃぐことができなかった。

それは美羽という存在が未だに理解できず、自分が負の世界に巻き込まれそうな感じがしていたからかもしれない。

元々過去に女性とあまり付き合うことも話すこともしたことがないだけに女心を読むことはできなかった。

悪さはたくさんしたが、そこに女は絡まなかったのだ。だから扱い方が分からない難しい電子機器を相手にしているかのような気分にもなっていた。

「はあ…」

遊びながらもついついたため息が漏れてしまう。

「そろそろ帰るか？」

浮かない様子の朔夜に気を使ってか、克哉はそう話した。

「えー…まだまだこれからじゃないの？」

遊び足りない美羽はぶーぶーと文句を言うが、朔夜はそんな二人をよそにさっさとゲームセンターを出ていた。

「おい…」

追いかけるように二人もそこから出た。

「悪い…俺、もう先に帰るわ…」

「え？」

それだけ話すと朔夜はそのまま帰ってしまった。

残された克哉たちは引き止めることなどできずにそのまま朔夜を見送った。

「あーもー…朔夜、冷たい…」

21話

「朔兄：今日来た人：例の友達？」

晃人は勉強しながら朔夜に話しかけてきた。

「ああ…」

そこから晃人はいろいろ克哉について聞いてきたので、朔夜は仕方なく教えてあげた。

別に隠すこともなかったので、学校での様子や放課後の過ごし方なども話した。

それを聞くと晃人は感心する素振りを見せた。

「そっかあ…人を寄せ付けない朔兄にも遂にちゃんとした友達ができたって訳か…」

「おいおい…どれだけ俺はお前の中で危険な存在になってるんだよ。俺は話しが苦手で人付き合いが下手なだけだ」

「それだけじゃないでしょ。だって朔兄の雰囲気は最初から人を寄せ付けないほどぴりぴりしてたもの…でもまあ…今となってはそれもないけどね…」

昔を懐かしむかのように晃人はそんな朔夜のことを話した。

「あの時の俺は…どん底に叩き落されたばかりだったからな。しかし…お前も同じようなものかもしれないがな」

「…」

朔夜の言葉を受けて晃人の言葉が一瞬でなくなっていた。まるで拒絶反応を示したかのようだった。

「悪い…思い出させたか？」

気にした朔夜は晃人を気遣った。すると晃人は首を横に振って、気にしないで話した。

「上辺だけの友達じゃないのはいいことだよ。僕みたいに人を信じられなくなったら駄目だよ。絶対にね…」

そんな意味深な言葉を口にしたが、朔夜は流すことなどできない。自分のことのように真剣に捕らえていた。

この施設に来たものは皆いろんな傷を背負っている。穿り返されたくない過去や人間関係…心を壊されてしまった者がほとんどである。それでも必死で生きていた。自分が人間であるために…生きる意味を知るために…
壊された心を完全に戻すことは無理だが、新たに踏み出して作ることは可能である。そんな作業をこの施設で小さいながらもそれぞれが行っていた。何気ない会話をしたり、寝食を共にすること…

そして朔夜はその中でも最年長者であり、特に異質な存在だったのだから彼が変わっていくことは誰もが嬉しく思い、見本にしようと思っていた。

「おい…晃人…お前背負い込みすぎるなよ。頭いいからって何でも割り切るってのは賢い選択じゃないんだからよ…」

「…」

「人からいろいろ言われるってのはそんなに悪いもんじゃない…まあ…俺が感じたことだからお前に当てはまるとは限らないけどな。まあ、いつでもどーんとこいよ！」

そう言っただけで晃人の背中をばんと叩いた。すると晃人はぬいぐるみのように軽々と前に倒れてしまった。

「ごほっ…ちよつと…朔兄…死ぬかと思ったよ…力強いんだから加減してよね」

むせながら朔夜を見たが、どこか嬉しそうにも見えた。

「おいおい…勉強ばかりじゃなく、体も鍛えるよな」

そのまま朔夜は風呂に行ってしまった。

22話

五月も終わりに向かおうとした時に朔夜のバイト先に新しい人が入った。話は聞いていたが実際に会うのは今日が初めてで、朔夜がバイト先に着くと丁度その人がいた。

「あ…朔夜君。この前話していた新しい子だ」

店長が紹介するとその新しいバイトの子が朔夜の前に立った。

「よろしくお願いします。齊藤優亜さいとうゆうあです」

それは若い女性で、モデルのようにすらつとしたスタイルに長い黒髪、容姿は透明感のある美女でメイクなどしなくても十分過ぎるほどだった。そして朔夜はこの女性をどこかで見たこともあると思っただ。

「今日から君と交替でシフト組むからしばらくは一緒に仕事して教えてあげてね」

「はい…」

朔夜はあまり乗り気ではない返事をしたが、それはこの女性に見とれてしまっていたからであった。

店長はそのまま現場にさっさと向かってしまい、その場に二人残されてしまうと、朔夜は会話に困っていた。

まず、何をしたらいいのだろうか？えっと…そつだ。自己紹介からだ。

「えっと…俺は、高崎朔夜です…高校一年生で、十六歳です。よろしく…」

初対面の人間にいきなりタメ口で話すのも失礼だと思い、丁寧な口調で自分のことを話した。

「朔夜さんですね。よろしくお願いします」

にこにこと笑っている優亜は純粹を絵に描いたような人間そのもので、裏の顔を全く感じさせなかった。

そんな優亜を見て、朔夜は正直目を合わせられなかった。

「じゃあ…仕事の説明するんで、俺についてきてください」

少し足早になりながら、優亜を誘導していった。そしていつも朔夜が仕事をしている場所である倉庫に連れて行くと、一つひとつ説明をした。すると優亜も真剣に話を聞いて仕事を覚えようとしていた。

「この注文書に記入して、ファックスで送るか電話で直接注文をするんで…」

注文に必要な手順と書類を見せて丁寧に教えた。

それから一通り教えることもなくなると、店の中へ移動し、品物の場所を確認し特に売れてなくなる商品も教えた。

「これで、説明は終わりだけど、何か質問は？」

ぎこちない説明の仕方だったので、上手く伝わらなかったのではないかと不安もあった。しかしそんな不安を払拭するかのよう
に優亜はやさしく答えた。

「いえ…親切な説明ありがとうございます。後は一緒に仕事をしながら教えてください」

朔夜はその言葉を聞いて嬉しく思った。近頃あった嫌なことも忘れられそうなそんな気にさせられた。

「なら…商品のチェックをしましょうか…」

そこから三時間、二人一緒に仕事をする事になった。

仕事が終わると朔夜は軽い足取りで、帰り道を歩いていた。

久しぶりにこんな感覚を味わったような気がする…そう心で呟いていた。

しかし引つかかるのはどこかで見ることがあるということだった。それを記憶の片隅から必死に探し出しながら歩いていた。

そして丁度いつもの公園に差し掛かると、朔夜は思い出した。

「そうか…」

克哉が朔夜の住む施設に遊びに来た日に公園にいた女性のことを

思い出したのだ。

ほんの一瞬のすれ違いであったが、目を奪われるような感覚は忘れていなかった。長い黒髪に人を引き付けるような独特の雰囲気。今思い出しても今日会った斉藤優亜そのものだった。

まさかこんな形で出会うなど予期できなかっただけに衝撃も増していた。

23話

次の日から数日間、優亜と一緒にバイトの時間を過ごすことになった。一週間は研修期間のようなもので、朔夜について仕事をする約束だったのだ。

優亜は朔夜同様に手際がよく機転がきく女性だったので完全に仕事を覚えるのに二日もあれば十分だった。

だから他愛もない話をしながらでも作業を進めることもできた。

「あのさ…優亜さんって何歳なの？」

朔夜が優亜と出会ってこんな普通の会話できるようになるまでに二日を要した。

「十七歳です…」

朔夜の一つ上だった。年を聞いたついでに高校も聞いてみたが、優亜は高校には行っていなかった。

「話すの恥ずかしいんですけど…私…学校よりも夢を取ったんです」「夢？」

「ええ…笑われるかもしれないけど、今、ダンスの勉強中なんです」「ダンスと聞いて朔夜はぴんとこなかった。そういった類とは縁の

ない生活をしていたので合わせることもできない。

「そして世界中いろんな場所で踊れたらなって…」

優亜の目は本気だった。だから笑うことなどできるはずもなく、朔夜も逆に感心していた。

「すごいな…俺なんか、将来のこと全然考えてないのに…」

「そんなことないです。見つかるのが私が早かっただけですよ。きっと朔夜さんにも見つかりますよ」

優しく微笑んで返してくれた。

「それで今はお金を貯めてるってこと？」

「そうですね。目標のお金が貯まるまではもう少し先なんで…ダンスとバイトの両立ですけど楽しいですよ…」

夢を持って生きている人間を見るのが初めてだったので、朔夜にとっても新鮮な会話だった。

自分の過去を思い返しても、今さえよければいいという考え方の人間ばかりが回りにいた。だからあんな無茶もできたのだと思った。

そうか…将来か…そんなことを考えてしまった。

「ダンスとかは自己流でやってるの？」

「いえ…ダンススクールに通いながらやっています。それで先生から

も外国に行った方がいって言われたんで、去年決心したんです」

「親からは反対されなかった？」

「されました…そこまで言うなら家を出て行く覚悟でやれって…それで今に至るんです」

援助をされないで自分一人の力でやってみろという意味だが、十六歳の時点でそれも厳しい話だった。だから優亜はぎりぎりの生活を余儀なくされているのだと朔夜は解釈した。

「バイトも掛け持ち？」

「そうです…えつと…全部で六つ位かな？」

「ええ！そんなに？」

「そうしないと早く貯まらないから仕方のないことだとも…」

「体…大丈夫？ダンスやってバイトやってって休む間もないんじゃないかな…」

人事だったが思わず心配してしまった。

「そこは若さでカバーです。なんて…」

「冗談を話すが優亜の夢に対する想いは相当のもので、必死に生きているというのが伝わってきた。

だから朔夜も自身に訴えかけていた。

俺も…もつとがんばらないとな…

そんな会話を繰り返している内に二人の作業時間は終わってしまった。そして優亜は一足先にバイト先を出て、次のバイト先に向かっていった。

そんな駆け足で去っている優亜の背中を見ながら朔夜は心の中で一言、「がんばれ」と呟っていた。

24話

朔夜の学校から二駅離れた場所にある松陵高校。ここは、いわずと知れた不良学校で、かなり荒れていた。

美羽の一件でもそうだが、ここは退学の基準が緩いとも噂されるほどだった。

喫煙、喧嘩、万引き、恐喝程度では退学にはならなかった。教師も関わりたくないのが本音で、いっそのこと警察に介入される出来事を起こしてみんな退学になって欲しいとも考えるほどだった。

「おい…最近、金の集まりが悪くないか？」

クラスを仕切る男がここにいた。名前は高槻庄司たかつきしょうじといい札付きの悪であった。

身長は百八十以上あり、引き締まった肉体の持ち主で、自分の力を誇示するかのように頭は金髪の短髪で耳にはピアスをしていた。

目の前の同級生を睨み付けながら話をしていた。

「いや…その…」

庄司に睨まれた男はびくびくと震えながらまともに目を合わせられずに言い訳をしていた。虎に狙われた獲物そのものである。

すると、庄司は何も言わずいきなり殴りつけた。相手の男の体

は、机にぶつかりながら転がった。それを見ているクラスの全員が肝を冷やした。

「俺が…集めると言ったら強盗でも何でもやってきっちり持って来い。つたく…使えねえな…」

気絶しているであろう男の方に向かって唾を吐いた。そして煙草を取り出して教室にも関わらず堂々と吸い出した。

「おい！他の奴らもよく聞け！」

クラス中に響き渡るような大きな声で叫んだ。

「今月は全員で三十万は集めてこい！じゃないと…」

そこから少しトーンダウンしてゆっくりと話す。

「どうなるか…分かってるよな」

荒々しい口調から一転したそんな話し方は皆に恐怖を与えた。誰も庄司には逆らえなかった。もし裏切ろうものなら常軌を逸した制裁が加えられる。そしてその光景を何度も目の当たりにしている人間たちがたくさんいるからこそ、庄司の言葉には嘘がない。

この庄司という人間はどこか壊れていた。感情の一部が欠落していると表現した方が正しいかもしれないが、彼の行動には突発的な暴力行為があまりにも多かった。しかも悪で有名な同級生も目を瞑るような行為で。

そんな何でもありの彼だからこの高校でも入学直後すぐに上級生

から呼び出された。

相手は三年の生徒十数名。

中学時代からの彼の逸話を聞いていたから、数も武器もそれなりに揃えていた。そして屋上へと呼び出し単刀直入に話した。

「俺らの下に付け、そして金を持って来い」

25話

「俺らの下に付け、そして金を持って来い」

そんな暴力的な言葉にも相手の戦力にも全く動じた様子を見せずに静かにしていた。平常心そのもので脈拍にも変化は見られなかった。そして首謀者を始め周りの人間も自分たちが優位な立場にあると思ひ余裕の表情であった。

「返事は一つしかないよなあ？」

じりじりと庄司に歩み寄り馬鹿にするように話しかけた。首謀者なりにここで圧力をかけて力を示さないと下の者がついてこないからだ。

「お前の噂は聞いている。そんなお前だからこそ俺らの傘下に入ればより強力になるんだ。こんな時代だ…アホみたいにせこせこ稼ぐよりもたくさん稼ぐ奴から金をぶんどった方が早いと思わないか？俺らは未成年だ…法の力にも限度がある。なら…今の内にどんな手を使ってでも稼ぐしかないんだよ。どうせ大人になったらクソみたいな人生しか待っていないんだからな」

自分なりの論理をまとめて話すと、庄司は初めて表情を変えた。

「くくくくく…はははははは」

笑っていた。その音量はどんどん大きくなっていく。

「いいな。その考え方。実に合理的で分かりやすい…」

「それなら……」

その先を話す前に庄司に遮られる。

「駄目だな。考え方には賛同できるが、俺が儲からない……そんな計画に乗れるかよ」

「何だと？」

「八割俺にくれるなら仲間になってもいいぜ。それ以外は認めない……」

これだけの人数に囲まれても全く態度を変えずに好き勝手なことを口にした。

流石に相手も頭にきたのだろう。いきなり庄司の胸倉を掴み脅した。

「てめえ！ふざけんじゃねえぞ！」

だが：無防備に庄司に触れた代償は大きい。ぼきんと指の折れる音が響く。

そんなことをされると予測も出来ずに相手は手を離して痛みに声を上げた。

「うるせえなあ……指の一本ぐらいだよ！」

そのまま庄司は相手の腹部に真っ直ぐ蹴りを入れた。まるで鉄球

が体にめり込むような重い衝撃を受けると、何もできずに崩れ落ちてしまった。

それを見た周囲の人間は咄嗟に反応する。数人の男が雄たけびを上げながら庄司に殴りかかった。しかし庄司はそんなもの蹴散らすかのように力で全てをねじ伏せた。

細かい技術などそこにはない。ただ拳を振り回すだけで相手が吹き飛ぶ。多少、殴られようが、蹴られようが関係なかった。鋼のような肉体はそんな柔な攻撃ではぐらつきもしなかったからだ。

容赦ない庄司の力によって相手の顔面が潰れ、歯が折れ、骨折するものもいた。鮮血を撒き散らし、その場は独壇場となっていた。そして徹底的に相手の戦力を奪うことを決めていたかのように戦意喪失した人物がいても許さない。何もできずにトマトでも踏み潰すかのようにぐしゃっと顔面を潰されたのだ。

誰も動くことのなくなったことを見渡して確認すると、落ち着いたかのように煙草を取り出して一服していた。

「ふー…」

庄司は煙を吐き出し、その凄惨な光景を見て笑みを浮かべながら優越感に浸っていた。ここなら退屈しなくて済みそうだ…そう思いながら屋上を後にした。そしてそこに転がっていた人間の大多数は全治数ヶ月の入院だった。それと同時に心には庄司という人間に対する恐怖心が刻まれた。

あそこまで執拗で徹底的なまでの暴力は同年代で経験したことがなかったことが第一だった。そして死を感じさせる恐怖というもの

をはつきりと体が捕らえたのは、あの時初めてだったからかもしれない。

それから庄司は一年生という異例の若さで松陵高校の支配者となったのだ。

だから松陵高校の荒れ方はそこから変わった。以前はまだ境界線があるかのような暴れ方をしていたが、統率者が狂った独裁者になっってしまったのはそれも皆無に等しかった。

金を集めるためにはどんなことをしても構わない。そんな暗黙の了解が勝手に成され、警察も常に目を光らせている状態だった。しかし庄司は自分が自ら手を汚すことをしないで、全て下の人間に損な役回りをさせていたのだから捕まることもなかった。

そのことに対して誰も何も言えずに庄司の思いのままに関わる人間は動いていた。

そんな順風満帆な日々にも思っていたが、ここで一つの波が立つ。

「庄司さん…ちょっと相談が…」

同級生の男が敬語で話しかけてきた。

「あ？」

いつものように煙草をふかしながらダルそうに男のほうを向いた。

「田沢たちの件です」

「ああ…佐久間工業のちんけな窃盗団か？追い込みかけて慰謝料倍増で手に入れるって話だったな…絞り取れたか？」

美羽が絡んでいたあのゲームセンターでの窃盗の件での話だった。

「そうなんですが…男二人はその話で持っていったんですが、もう一人の加担者の女を取り逃がしたんです」

「取り逃がすだと？あいつらが？」

庄司は信じられない様子だった。この学校でも自分の次ぐくらいに屈強な存在の二人だけに実力も認めていたのだ。男ならともかく女を逃がすなど有り得ないとも考えていた。

しかし事実そうなってしまったので、いきさつを詳しく聞いていた。

「誰かにやられたってことか？」

「そうなります…」

「どこのどいつなんだよ？」

「それは…」

話にしか聞いていない男はそこまでしか答えられなかった。しかし庄司の怒りは収まらず悪くもないその男をいきなり殴り倒した。

「使えねえな…そんな報告だけなら聞く意味がねえんだよ。この馬鹿が…」

そう話して火のついた煙草を投げ捨てた。

「でも…気になりませんか？その田沢たちを一瞬で倒した男…」

側近に近い男が話せなくなった男の変わりに会話を続けた。

「まあな…あいつらがそこらの高校生に負けるなんて見当もつかなかったからな…でもよ、弱いから負けたのは事実なんだよ。それにあのアホ共が舐めてかかったんだろうよ。尻拭いする気にもなれねえが…ここでその男をほっておいたら俺らの学校の見方が変わる」

「なら…」

「そいつを何とでも見つけ出して俺の前に差し出せ」

そこで事の張本人である朔夜を松陵高校の生徒で探すことが決まったのだが、あの一瞬の出来事だったので顔も学校も特定できない朔夜を探すことは極めて困難なことだった。

それでも松陵高校の生徒は庄司の言いつけを守るかのように無理だと承知である日以来数週間探し続けていた。

26話

入梅宣言が天気予報でされた六月の上旬。雨が毎日のように降っていた。

傘を差して歩くのが面倒な輩が多いこの季節は厄介で、泥が跳ねて靴は汚れる、ズボンも汚れるでみんな文句を言ってた。

「朔夜：今日バイトはあるのか？」

「いや、ない」

「何だ：優亜さんに会えなくて残念だな」

克哉がそんなことをにやにやと話していた。

朔夜は優亜のことを克哉に話していて、その話し方がいつもの朔夜と雰囲気が違うのがはつきりとしているので、克哉はちよくちよく探りを入れていた。

しかし朔夜は決まって照れくさそうに誤魔化すばかりだった。

「うるさい。そんなことないっつーの。今はシフトの関係上同じになる日は滅多にないんだよ。ご期待に応えられなくて悪いな」

皮肉のようにそう話すが、克哉は嬉しそうに朔夜を追い立てる。

「一緒の日は朝からお前楽しそうだよな」

「え？」

「明るいつていうか…ノリが良いつていうか。分かりやすく違うんだよなあ」

「そ…そんなことないだろ。大した違いはないと思うぞ…」

男同士のやりとりなら動揺などしない朔夜の意外な一面を見れた感じである。そんな姿を見れて克哉は嬉しそだった。

「別に隠すこともないだろ…好きなら好きでさ」

他人事のように克哉が助言するが、朔夜も負けじとある話をした。「そういうお前はどうかんだよ…美羽と会ったりしてるんだろ？」

「え？」

克哉はどきつとして言葉を詰まらせた。

克哉は三人で遊んだあの日以降に実は美羽と再び会った時があった。それも美羽が覚えていて声を掛けたのだが、いつものような一方的な会話でその時も二人で何故か遊ぶことになったのだ。そこで電話番号も半ば強制で交換して話したり、会うことがあった。

朔夜はそのことを直接聞いてはいなかったが、たまたま克哉が女と一緒に遊んでいた話を小耳に挟んだのだ。

美羽という名前が出なくてもどこの学校の制服の女と歩いていて…と聞けば察しがつくものだ。

「だって誰にも話してないぞ？」

「馬鹿…制服着て歩いていればすぐ分かるだろうが…」

「そうか…そうだよな。その…悪い…お前にも話してなくて」

「何で謝るんだよ。あいつは俺とは関係ないよ。好きにすればいいだろ。でもよ…」

気をつけると言いたかったが、そこで何故か口を閉じてしまった。

「何だ？」

「いや…何でもない。しかし…お前みたいな真面目君があいつと遊ぶなんて意外だな。まあ、きっとあいつが強引に誘ったんだろ？」

「そうなるかな…」

「それで何してたんだ？」

「お茶したり、服選びに付き合わされたぐらいだ」

「へえー…」

克哉が先ほどまで朔夜のことを追い詰めていたのに今度は立場が逆になった。

「会ったっていったって、一回位だ。それにそんな話もたくさんで
きなかったからな…」

聞いてもいないのに言い訳をするかのように克哉は頬を赤らめながら大きな声を出した。

「そうか…まあいいんじゃないか？」

そのまま昼食の時間が終わり何事もなく一日が過ぎた。

27話

曇り空の日曜日、克哉は美羽と待ち合わせをしていた。二人で会うのはこれが三回目だった。

いつものように克哉が先に待ち合わせ場所に着き待っていた。そしてそれから十分遅れで美羽が来た。

「ごつめーん。遅くなって…いやさ…服選ぶのに時間掛かってさあ…」

笑顔全開で克哉に話しかける。その表情を見ただけで克哉は満足だった。

「大丈夫…ちょっと待っただけだから」

「いきなり昨日電話して今日遊ぼうだなんて迷惑じゃなかった？」

「平気、平気…結構休みの日は暇してるんだ」

そんな風に優しく話すと美羽はそれなら早速出かけようと克哉の手を引っ張った。

「え？」

そんな美羽にとって何気ない行動が克哉には心臓破裂ものであった。されるがままに手を引っ張られ街中に向かっていった。

日曜の街中は普段の倍以上の人間が歩いていた。だから目を離す

と相手が見えなくなってしまいそうだった。

克哉はしっかりと手を握られたまま本屋に入りそこで離された。

「あのさ…私でも分かるようなMP3プレーヤーだっけか？その本
つてある？」

「MP3プレーヤー？持ってるの？」

「いや…今度買おうかなって思ってるんだけどさ、よく分からない
のよ。だから予備知識ってやつ？調べようかなあーって」

「パソコン持ってる？」

「え？何でパソコンが必要なの？」

「ないと曲入れられないのがほとんどだけど…」

「そうなの？それじゃあ、すごい面倒くさいじゃん。なんだあパ
ソコンが必要なんだあ…」

がっかりした様子で本を探す気も失せたようだった。

「パソコンは家にあるの？」

「ん…まあ、あることはあるけど、私使い方分からないし…機械っ
て基本苦手なんだよね」

それならばと克哉は手助けをすることを決意した。

「なら、俺が教えてあげるけど…」

「本当？マジで？克哉詳しくそうだから、それならありがたいな…」

思った以上に反応が良く、本当に自分のことを必要としてくれると克哉は感じ気分が良かった。そして本屋からすぐ出ると、今度は美羽が欲しいというMP3プレーヤーを見に家電量販店に向かった。

品物を見ながら簡単な説明をしてあげること、美羽は選びやすくなった。

今日の段階ではまだ買うのには至らないがそれでも収穫は十分あったという満足気な表情でそこを出た。

「何でそんなに家電に詳しいの？」

ファミレスでジュースを飲みながら美羽は克哉に聞いた。

「ああ…趣味…みたいなものかなあ？」

「へえー…私、取説の厚さ見ただけでやる気なくすけどね…」

「女の子はそういう人が多いんじゃないかな？やっぱり男は機械関係好きだから…」

「でも、助かるよお…私一人だとちんぷんかんぷんだからさ。詳しい人がいると間違った物買わなくて済みだしね…ねえ、朔夜も家電とか詳しいの？」

「え？」

不意に朔夜の名前が出てきて戸惑ってしまった。しかし朔夜のこ
とを思い出し返答した。

「あいつは…機械苦手みたいだよ。携帯もろくに使いこなせていな
いしね…」

「そうなんだ…」

美羽はそのまま少なくなつたオレンジジュースを飲みきつた。

「朔夜と克哉つて仲いいけど、高校入学してから？それとも小、中
から一緒だったのかなの？」

「小さい頃お互い家が近くてよく遊んでたけど、僕が引っ越してね。
それで十年ぶりぐらいに高校で会つたんだよ」

「うっわー…運命みたいだね。女と男の出会いなら良かったのに…」

「確かに…」

うんうんと克哉もうなずいていた。

「それで…克哉は県外に引っ越したの？」

「うん…親が転勤族だからね。俺の高校受験に合わせてここに来た
んだ。それと言い忘れたけど朔夜と小さい頃過ごした場所はこの隣
の市なんだよ」

「なら朔夜も引っ越してきたってこと？」

「いや…それはどうかな？俺もよく分からない」

朔夜が施設にいることは伏せておくことにして適当にはぐらかしていた。友人の諸事情を軽々しく話すことはどうかという配慮からの行動だった。

「ふーん…」

そこまで話が済むと、美羽は飲み物を取ってくると言って席を立った。そしてそんな後姿を克哉はどこか嬉しそうに眺めていた。

それからもファミレスでは会話が絶えることなくいろんな話をしていた。趣味や音楽、学校での出来事や勉強、スポーツジャンルは様々だった。

口下手な克哉も美羽の前ではそんなこと関係なく話せるのが不思議でしようがなかった。

美羽は静寂の間が嫌いなようで、次から次と話題を提供していた。だから克哉は話すしかなかったというのもあった。

時刻は五時を過ぎていた。優等生の克哉にとってこの時間帯はそろそろ帰らなくてはならない時間だった。しかし美羽との話が盛り上がりそこは切り出すことができなかったのだ。すると逆に時計を何度か見る克哉を見て美羽は気を利かせたのだろう、帰るような会話を切り出した。

「そろそろ私帰るね…」

「え？あ…そう…」

どこか寂しそうだが、ほっとしている部分もあった。克哉はその言葉をそのまま受け止め美羽を見送った。

夕暮れの中で美羽の姿がだんだん小さくなるのを見ると妙に切なく感じてしまい、胸の奥がきゅんとなるのが分かった。

克哉は自分の身に何が起こったのか瞬時に理解はできなかったが、何度も美羽の顔が考えなくても浮かんでくることでその症状の原因が分かった。

そつだ…僕は…美羽のことが好きになってしまったんだ…

28話

朔夜はバイト先でいつものように働いていると、優亜が話しかけてきた。

「朔夜君…ちょっといい？」

「え？何？」

「この商品の注文個数がちょっと分からないんだけど…」

渡された紙に目を通すと、朔夜はすぐに答えた。

「えっと…先月の売り上げ個数がかなり多かったですだから通常の倍ぐらいの注文で大丈夫だよ」

「そうなんだ…ありがとう」

何度となく会話をしたことで最初のようなよそよそしい固さは二人の中にはなかった。

そして一緒のシフトの時にはよく他愛もない話をしていった。

「朔夜君って何のためにバイトしてるの？」

優亜は朔夜の私生活に踏み込む会話をしてきた。

「まあ…簡単に言えば、家が貧乏だから自分の小遣いぐらいは稼ごうかなって…それと運動とは無縁だったから部活ができないってのもあるんだけどね」

「へー…意外だね。運動神経良さそうな顔してるのに」

「顔？顔で運動神経って良し悪しが分かるものなの？」

「いや…きれいな顔の人って何でも出来そうなイメージがあるのは私だけかも…」

そんな褒め言葉を不意に話され朔夜はどきどきしてしまった。それを誤魔化すかのように荷物を棚に勢いよく持ち上げた。

「そ…そうだよ。俺は別にイケてもいないし、スポーツはやったことがほとんどないからさ」

「中学時代は文化部だったの？」

優亜は棚の商品をきれいに並べながら話した。

「まあ…ね…」

そこは触れて欲しくない会話だけに上手な嘘も思い浮かばなかった。歯切れの悪い答えをするしかなかった。

「部活してないなら、バイトがない日は暇なの？」

「基本的には…他にバイトも掛け持ちしてないから」

「そっか…」

何かを確認したかのような表情を見せると優亜はそのまま店内に

戻ると言って倉庫から出て行った。

「……」

残された朔夜はそのまませつせと届いた荷物をダンボールから出していった。そんな中毎度のことだが単純作業はあまり嫌いでもないも思っていた。

そのままバイトの時間が終了時刻を迎え、タイムカードを押すとロッカールームに行き替えた。制服の上着を脱いでいつものように薄手のパーカーを羽織るとそのまま帰ろうとした。

辺りを見回したが、優亜の姿はどこにもなかった。軽く挨拶したかったが先に早々と帰ってしまったのなら仕方ないと諦め店から出た。

「は……」

一日の疲れを表すかのようにため息を大きくした。

そしてポケットに手を突っ込んで歩き出そうとした時、何かが手に当たった。

「ん？」

ポケットの中をまさぐりそれを出してみると可愛らしい封筒が入っていた。

自分で入れた記憶はなかったので、おもむろにその中身を確認した。

するとそこには、一通の手紙とチケットが入っていた。手紙には短い文章で、

『もし暇だったら見に来てください。優亜』

と書いてありチケットを見るとパフォーマンス関係のイベントがあるのが分かった。

日時を見ると丁度朔夜のバイトの入っていない五日後の土曜日の夜だったので、先ほどの会話の意味が分かった。朔夜は嬉しく思いう上機嫌で帰った。

29話

次の日の放課後朔夜は一人で街中を歩いていた。それというも用事があつたからだ。

施設内の備品が尽きていたのでその買出しだった。メモ用紙を片手に必要なものを確認していた。

大体がホームセンターで手に入るようなものばかりだったので、すぐに済みそうだと歩いていた。

すると携帯電話が鳴った。

着信を見ると克哉の名前だった。何だろうと思ひながら出ると、

「お前…今どこ？」

いきなりそんなことを聞いた。克哉が焦りながらかけていたので、何事かと朔夜は焦って答えた。

「街だけど…」

「そうか…なら良かった。あのさ美羽ちゃんが五時ごろ本屋の辺りにいると思うんだけど、俺が行けなくなったこと伝えてくれない？」

「はあ？自分で言えよ。お前携帯持つてるんだろ？」

「それがさ…繋がらないんだよ。電波悪いかなんか知らないけど…」
急に先生から生徒会の手伝いしろって言われて今から行かなきゃな

らないんだ…頼むよお」

滅多に頼みごとをしない奴が懇願してきたので朔夜も断るにはい
かなくなつた。

「全く…分かつたよ。会つたら話しく。でもいなければ帰るか
らな」

「ああ…それでいいよ」

そこまで話すと克哉は慌ただしく電話を切つた。

それから時計を見ると四時五十分を指していたので急いで本屋を
目指した。

重い荷物を持ったまま街中を移動するのは大変だったが目的の時
間までには間に合つた。

するとそこには美羽の姿があつた。

健気に人を待っている姿など想像もしたことがなかったが、逆に
朔夜の目には新鮮に見えてしまった。

近づいて声を掛けると朔夜がここに来るなど思いもしない美羽は
とても驚いた。

「ええ！どうして朔夜がいるの？」

「お前に話してくれつて頼まれたんだよ。あのさ…克哉の奴、生徒
会の手伝いしなくちゃならなくなつたから悪いけど来れないってさ

…っていつか、お前携帯持っていないのか？何度か電話かけたらしいけど繋がらないって話してたぞ？」

そう言われると美羽はカバンの中を確認した。すると学校に忘れたことに気がついた。

「やっぱー…学校に置き忘れたよ」

学校では電源を切っていたので繋がらなかったのだと朔夜も納得した。

「なら学校に取りに行つてそのまま帰れよ。今日はもう克哉も来ないんだからさ…」

そのように促したが、美羽はそんなこと聞いてはいなかった。

「ねーねーそれなら代わりに朔夜が遊んでよ。本当なら克哉に今日は付き合ってもらおう予定だったんだからさあ…」

猫のようにすりすりと体を寄せ付けて甘い声を出してきたが、朔夜は困った表情しか見せなかった。

「知らねえよ…お前と克哉の問題だろ？俺には関係ない。それに見ろよ。俺は買い物してきたばかりなんだよ」

重そうな荷物を見せてアピールした。しかし美羽にそんなことは関係なかった。

「いいじゃん、いいじゃん…私が奢るからその喫茶店で休もうよ。荷物重いんでしょ。私も持つからさ…」

勝手に朔夜の荷物を一つ持つと、手を引っ張って強引にすぐ目の前の喫茶店に引っ張っていった。

相変わらずの強引な行動に朔夜は断る気力もなくそのまま流されるがままに連れて行かれた。

30話

「イチゴパフェ大盛りで…あ…生クリームはたくさん盛ってフレークは少なめでよろしくー」

慣れたかのように店員に話すそんな姿を見て朔夜はこいつ凄いなあと引き気味に思っていた。

「それで…何がしたいんだ？お前は…」

頼んだコーヒーとパフェを待っている間、朔夜からそんなことを切り出した。

「朔夜と話すのも久しぶりなんだから、そんなぴりぴりしないでよ」

「しょうがないだろ。予定を狂わされた俺の身にもなってみろよ」

予定などなかったがそういうことにしていた。

「克哉から聞いたけど、朔夜って中学はここら辺じゃなかったんでしょ？」

「え？」

そんな話を切り出されるとは思わず驚いた。

「まあ…そうだな。隣の市だから少し離れてる…でも珍しいことじゃないだろ？高校は必然的にあちこちから集まってくるんだからさ。ならお前はここら辺なのか？」

話をあまりそっちに持っていきたくなくて話題を逆に美羽に振っていた。

「そうだね。私はずっとここが地元だよ。なにに私の過去に興味でもあるの？」

ふーんとあまり反応を見せないで返事をする、朔夜は続けて話した。

「なら…中学からあんな感じで悪さもしてたのか？」

興味本位ではあるが、自分のことは棚に上げてそんなことを聞いていた。答えづらいかとも思われたが美羽はけるっとした顔で答えた。

「そうだね…朔夜と出会うまではあんな感じの毎日だったよ。万引き、恐喝…いろいろとやったかなあ…」

悪びれた様子もなく思い出していた。

「…」

「家のこと考えるだけでムシクシヤしてたから、忘れるかのようになんかこと繰り返してただけ…朔夜に出会ったからねえ…もうそんなことどうでもよくなっちゃった」

恥ずかしがる様子もなく朔夜に運命の出会いだと告げたが、朔夜はそんな過去の話をされて喜べるはずもなく自分に重ねていた。

「だから、もう一切悪いことはしてないよ。朔夜に万引き止められたあの日以来からね…」

別に美羽の事を思ってたことではなかったのだが、一人の人間の進路を変えてしまったことには違いなかった。

「私もさ…ガキだったんだよね。あんなことでしかうっぶん晴らせなくてさあ…仲間の男たちも松陵高校の生徒怖がってもうしないって話したし丁度良かったよ」

にこにこ話すがそんな軽い話題ではない。朔夜の顔つきは暗くどこか寂しそうだった。

こいつも…自分と同じだ。

家の事情で荒れるしかなかった。自分をコントロールすることができなかった。理解者が誰もいなかったのだ…そう感じてしまった。

「その…家の方は大丈夫なのか？」

恐る恐る聞いた。

「大丈夫って訳じゃないけど…もういいやって感じかな？だってさ…私のこと何も考えてないのバレバレだからこっちからとくに諦めてやったよ…悪さしてみても無駄な抵抗しても無意味だって分かったしさ」

美羽は片親に育てられていた。よくある母子家庭ではあったが、ネグレクトと呼ばれる育児放棄の家だった。

母親は美羽が幼少期に離婚し、次々と男を変えていた。その際に美羽は邪魔だったのだ。

だから美羽の世話などすることもなく自分勝手に自由奔放に男の元に走っていた。

金は男に出させていたし母子家庭の手当ての給付金も出っていたので、そんなに生活に困ることはなかったが、美羽には愛情を与えなかったのだ。

金だけを渡してこれで何とかしろと言う毎日が小学校の時代から続いたのだ。

もちろん家に母親が帰ってくることはほとんどない。金とメモだけが置かれているだけで、美羽はひとりぼっちだったのだ。

親から見捨てられた子の取る行動は単純だった。事の良し悪しの分別もつかないまま自分の心の負担を減らすかのように本能で動いたのだ。そして付き合う人間は上辺だけの関係そのもので誰一人として美羽のことなど考えてはくれなかった。一緒にいるようで繋がっていない人間関係。その繰り返しであった。

そんな暗く重い過去を感じさせない明るさが美羽の持ち味でもあり、朔夜にない部分だった。

「そんな難しく考えなくてもさ…今は楽しいからいいじゃん。朔夜も克哉も相手してくれるから嬉しいんだ…なかなかこんな話ってできないからさあ…」

朔夜は自分の境遇に重ねてしまっただけに言葉に詰まっていた。

しかし素直な気持ち言葉に出ていた。

「お前…意外と強いんだな」

「え？」

そんなことを朔夜から言われるなど思わなかっただけに驚きも大きかった。

「いや…そんな風に割り切れるってなかなかないことだと思ってな…その…感心してるんだよ。上手くしゃべれないけど…」

言葉を選びながら話してはいたが、思い通りにまとまらず困惑した表情をしていた。そんな朔夜の顔を見て美羽は笑っていた。

「ぷぷ…朔夜でも私のこと褒めるんだねえ」

「う…うるさいな。俺だってけなしてばかりじゃないんだよ」

頬を赤らめながら運ばれてきたコーヒーを手に取り飲んでいた。そのまま二十分ほど喫茶店で過ごす、朔夜は無理やり美羽に付き合わされているんな所へ連れて行かされた。

31話

翌日、美羽との約束をドタキャンした克哉は朔夜に平謝りしていた。

「すまん!...俺も断りきれなくて...」

律儀な性格なので朔夜も大して気にしていないのに申し訳なさそうに頭を下げていた。

「おいおい...大したことじゃないって。それに克哉も遊んでた訳じゃないだろうが...」

朔夜もそこまでされるほどのことではないと思いきろ対応した。

「その...美羽は怒っていなかったか?」

克哉はそこが一番大事だったらしく朔夜に問い詰めた。

「ああ...別に怒ってはいなかった」

その一言で安心したようで克哉の表情は緩んだ。

「そうか...」

そんな友人の姿を見た朔夜は自然に感想が言葉に出てしまった。

「お前...本当に好きなんだな」

以前なら真つ赤な顔をして否定していた克哉もその時ばかりは取り乱すことはしなかった。

「ああ…そうだよ。俺はあいつが好きだ。今更隠してもしようがないしな…」

そんなありのままの気持ちをぶつけられ朔夜は逆に怯んでしまった。

「開き直ったか…」

しかし克哉は自分の発言に後悔などしなかった。遅かれ早かれこういうことを話すことには違いないとも思っていたし、何よりも自分の気持ちが抑えられなくなっているのが分かった。

昨日ドタキャンをしてしまったことで美羽に嫌われてしまわないだろうかとずっと考えていた。気にならない人間ならそこまで考えもしないだろうが、いつまでも頭の中に美羽の顔が残っているのだ。

消したくても消えない。

いつまでもいつまでも鮮明に笑っている顔が浮かんでしまうのだ。だから自分の決断した行為を恥じることはしなかった。

「朔夜…俺…美羽と上手くいくと思うか？」

いまいち自分に自信が持てないからそんな弱気な発言も出てしまった。友人に助言を求める気持ちで聞いてみたが、朔夜は嘘で励ますようなことはしなかった。

「こればかりは…俺も…分からんよ」

素朴ではあるが意味深な言葉で克哉に語りかけた。そして朔夜自身が複雑な心境にあったが、本人はどこか誤魔化すことしかできなかった。

強い克哉の想いが朔夜の心を刺激していたのだ。妙な劣等感を感じていると、克哉が話しかけた。

「そういうお前はどうなんだ？例のバイトの優亜さんとは…」

自分のことばかり聞かれては釣り合いがとれないと思ったのだろう。しかし聞いてばかりでは申し訳ないと思い、優亜からチケットをもらった話をした。

「へー…朔夜もなかなか進展してるようだな。そういう積み重ねが大事なんだよな…羨ましいことだ…」

自分がそういう状況に至っていないことを悲しく思いつつ、朔夜の恋路が上手くいっていることを喜んでいた。

しかし朔夜はそんな浮かれてばかりではなかった。

「どうだかな…俺は…まだまだ前に進めてないかもな…」

自分の気持ちと取っている行動を思い返し、罪悪感に耐えかねてそんな言葉を口にした。

克哉には何のことを言っているのか分からなかった、しかし朔夜が迷っているのだろうかとも取れた。

「ちて…そろそろ昼食の時間も終わりだな。さ、行くか…」

32話

朔夜はいつものようにバイト先に足を運び、黙々と仕事をしていました。今日は優亜は来ない日だったので一人だけで品出しをしていた。

時々人手が足りなくなつたレジにも顔を出すこともしばしあった。

忙しそうに仕事をしていると、入り口に見慣れた制服がちらりと見えた。

「ん…」

美羽であった。

彼女が朔夜のバイト先に来たのだ。朔夜は気づいたが気づかない振りをしていた。

バイト先で知り合いと話をしているのは店の印象に悪いことは承知だったので、あえてその態度を取っていた。しかし腹も立っていた。

ここには来るなと話していたはずなのに…

「朔夜…朔夜…」

人数の少ない場所で美羽が小声で朔夜を呼んだ。気を使ったのか回りをみながら大丈夫そうだと判断してから声を掛けていた。

「おい…帰れよ。バイトの邪魔だつての…前も話したろ。ここに来るなつて…」

「分かつてるつて…バイト終わるの待つてるから…それだけ言いに来た。それじゃ！またね」

それだけ話すとすつと店から出て行った。

だから朔夜もしつこいあいつにしては珍しいこともあるものだと思つてしまった。

バイト終了時間になると、以前のように美羽は待っていた。

「お疲れさーん」

相変わらずの軽いノリで話しかけてきたが、朔夜はあまりテンションが上がらない。

「飲むでしょ…」

缶コーヒーを手渡され、礼を言うとそのまま歩きながら飲んだ。

「朔夜さあ…携帯番号いい加減、私に教えてくれないんじやない？」

美羽が朔夜のバイト先に直接来たのはそれが理由でもあった。しかし朔夜は美羽に番号を教えると毎日しつこく掛かってきそうで怖かったので未だに教える気はなかった。

「何か用か？」

朔夜は美羽が何の用でここまで来たのか知りたかったので携帯の話は置いておいて聞いた。すると美羽はにこにこ話を切り出す。

「あのさ…映画のチケットあるんだけど見に行かない？レイトショーのやつでね。結構人気あるんだ。今話題の3Dってやつ？私も前から気になっていてさあ…」

その日は優亜に誘われた日でもあったので断ろうとした。

「あのさ…悪いけどその日は無理だ」

「えー…何で？どうして？どうして？」

「いや…その…行かなきゃならない所があるからだ…」

はつきりとその理由を話すことができなかった。

「克哉を誘えよ！お前ら最近仲いいだろ？あいつ映画とか好きだしさ…」

「えー…だって私、朔夜と行きたかったんだもん。それに土曜の深夜って危ないんだよ…こんな可愛い乙女を一人で歩かせるの？」

「駄目なものは駄目だ」

「ねえ、何の用事？終わってからじゃ無理なの？映画は夜中なんだからさあ…間に合わないこともないんじゃない？」

押しの強いところは尊敬に値するが、そんな二つの約束を掛け持ちできるほど器用ではなかった。

「だから無理だったの…」

「嫌！理由をはっきり言わなきゃ納得しない」

そこまで迫られたが、優亜のダンスを見に行くとは言えなかった。別に話しても良かったのだが話が余計にこじれそうで嫌だと思ったのだ。だから出まかせの嘘を思わずしてしまった。

「親戚の家に行くんだよ。その…法事があってな…どうしても来いって話になって…断りきれなくなっただよ」

「そうなの？」

「ああ…」

朔夜自身すらりと嘘が言えたのが不思議な感じであったが、美羽は目を丸くしてしまった。

「そうかあ…それなら仕方ないよね。ならば、別の日に誘うね…」

「お…おっ…」

朔夜の返事に力はなかった。

33話

金曜日

克哉は美羽の家でパソコン教室をしていた。

「それで…ここをクリックすれば、音楽のファイルが開かれるから…」

マウスを動かしながら説明してみるが、美羽にはさっぱりだった。一方克哉は女の子の家に入るのは初めてに等しいらしく緊張していた。

美羽の部屋は性格とは違ってきれいな方であった。

克哉が来るからといって特に掃除をしている訳でもなさそうだったが、程よく片付いていたのだ。

パソコン指導も一時間ぐらい経つと、美羽もだんだん分かってきたらしく、自分でも操作するようになっていった。

「あ…なるほどおー…」

思い通りになっているのを確認すると喜んだ。

「慣れだからさ…何度か触れていけば分かるよ」

克哉はそのように優しく美羽にアドバイスをした。それから美羽が買った音楽プレーヤーに曲を入れたりして一息つくことにした。

「じめん…こんなものしかないけどいい？」

美羽がそう言って持ってきたのはペットボトルの炭酸飲料だった。

「あ…別に何でも構わないよ」

克哉は差し出されたものをそのまま受け取り蓋を開けると飲んだ。

克哉はジュースを飲みながら不思議に思った。こんな広いマンションの室内に生活感があまり感じられないことに…

居間やキッチンを通った時に美羽の物はあちこちに見受けられるのだが、親のものがほとんどなかったり、食事も作ったような形跡がなかったのだ。もちろん玄関にも靴がほとんどない。

「あ…お母さんとかは仕事でいないの？」

気になっていたので遠まわしにそんなことを聞いてみた。すると美羽は冷めた目で答えた。

「さあ…あの人はもう何日も顔を合わせてないから分かんないよ…」

そんな話し方でただならぬ家庭事情があるのだと察した。克哉も思わず黙り込んでしまった。逆に美羽が気を使っていか、克哉を励ました。

「あ…気にしないでよお！私は一人で気楽なんだからさ。親っていたらいたでうるさいじゃん。だからのびのびできてこっちはいいん

だよねえー…」

「そうなの？」

「うん…忙しいからなかなか帰ってこないんだよ」

克哉はそんな美羽の話し方を見てどこか嘘をついているような気がしていた。しかしそこを追求することなどできなかつた。

「そういえばさ…克哉、明日の夜暇？」

「え？明日？」

「そう…実はさ、レイトショーの券があるんだけど行かない？」

朔夜に断られたあの映画のチケットだった。

「明日の夜か…うーん…」

急な申し込みに克哉はすんなりと返事を出せずに悩んでいた。すると美羽はつまらなそうな顔を思わずしてしまった。

「なんだあ…克哉も駄目か…」

「俺もって…他に誰か誘ったの？」

「うん。朔夜にも声かけたんだけど駄目だって…用事があるからって言われてさあ…」

そんな美羽の何気ない一言であったが、朔夜の心には何故か大き

な衝撃のように嫉妬心が不意に湧き上がってしまった。自分でもどうしてか分からない。だから克哉は勢いに任せて見に行こうと話してしまった。

「え？大丈夫なの？」

「俺も見たい映画だし、大した用もなかった気がしたからさ…平気だよ」

後先考えない行動を取ってしまったことは初めてだった。それだけ、今までの克哉の性格は計画的、冷静とも言えるのだが頭よりも心が先に動いたからの言動だった。

「そっかぁー…ありがとう。一人でいるのつまらなかつたんだ。ラッキー…」

美羽の素直な笑顔が見れるだけで克哉は幸せだった。そして自分が本当に彼女のことが好きなのだと再認識してしまった。

「朔夜は何の用事があるって言うてたの？」

克哉は聞かなくてもよいことを聞いてしまった。普段の性格ならそんなこといちいち詮索はしないのだが、今回は少し違っていた。

「え？法事があるって言うてたよ…」

美羽はありのままの話をしているのだろうと克哉はその話し方で分かった。しかしその瞬間、友人に対して何故嘘をつく必要がある、と強い怒りを覚えた。

「そ…そうなんだ…」

本当のことを話しても良いのだが、克哉にはそれを聞いたときの美羽の反応が怖かった。

だから何も言えなかったのだ。

そのままぎゅっと拳を握り締めて自分の口に出して語れない本音を押し殺していた。

34話

土曜日

朔夜は少しそわそわしながらイベントのある文化ホールに向かっていた。

こんな文化的なイベント会場に自分があまり相応しくないのではないかという負い目もあった。

少し前にはどちらかというとバーだのクラブだの如何わしい店に出入りしていたことが多々あったので、その差をヒシヒシと感じていた。

人が変われば変わるものだと人事のように思いながらも朔夜はチケットを受付に出して席についた。

この会場の集客数は千人に満たないぐらいの人数であったが、それなりの広さがあった。

一つ一つ席があり全席指定であった。そして朔夜の席は比較的ステージに近かったので嬉しく思っていた。

時間が迫ると満席ではないにしても八割は席が埋まっている状態だった。招待客がほとんどであったが、こういったイベントは大抵そういうものだった。

それからブザー音が鳴り響くとイベントが始まった。

暗くなったステージにスポットライトが浴びせられると、音楽に

合わせて数人の男女が様々な踊りを繰り広げた。

ダンスイベントだけあって、ジャンルも様々で朔夜が目にしたことのないようなダンスが次々に披露された。

優亜が登場したのは、始まって三十分してからだった。

「お……」

登場した時から思わず目を奪われてしまった。数人のグループで出てきても優亜だけが一際目立っていると言っても過言ではなかったからである。

そのルックスだけで人を引き付けてしまうかのようだった。バイト姿からは想像できないようなラフで露出のある格好としっかりと化粧を施した美しい顔はまるで別人である。

まさかこんなに変わるなど朔夜も想像がつかなかった。まるでテレビの世界の人間を見ているかのように手の届かない存在にすら思えてしまった。

それから優亜は重低音の響く激しい音楽に合わせて、力強くもしなやかに踊りを始めた。

外国に行きたいというだけあり実力も素人目で見てもはつきりと分かっていて。センターを飾り他のメンバーとは違った圧巻の動きを次々と見せると、自然と歓声も沸きあがるほどであった。

「凄いな……」

正直な感想が朔夜はそのまま口に出てしまっていた。

夢を追うということはここまで人間を変えてしまふのだろうか？と感動すらしていた。

五分に満たない時間ではあったが、その一部始終を目に焼きつけ、優亜の夢に対する努力を知ることとなった。

音楽が終わり、決めポーズをすると優亜はそのまま呼吸を整えながら舞台から去った。

拍手が沸きあがりそのダンスの素晴らしさを物語った。

それから二度ほど優亜は登場して別のダンスも披露していたが、どれも他者とレベル違いすぎてその場にいた全員が鳥肌を立てるほどであった。

ここまでとは朔夜も思わなかった。優亜の実力がはつきりと観客を通して伝わっていたので、海外に行くという話は絵空事ではないことだと実感した。

夢を語る多くの人間はそのための実力が伴わない。しかし優亜は違った。

人を魅了する何かをはつきりと持っており、見た者のほとんどが心を動かされるのだ。

努力が実を結んだ結果とも取れるが天性の感覚がなければそこまですららない。

朔夜は自分がちっぽけな存在だということを知り、こんなにも人を感動させられる人間がいることを喜んだ。

狭く暗い世界しか見てこなかったから、こんな眩しい世界に憧れるのかもな…

朔夜は全てのダンスを見終わると、清清しい気持ちで会場を後にした。

一人で歩く夜道であったが、どこか心が軽かった。いつかは自分もあんな目標が見つければいいなと思いつつもの帰路を歩いていた。

35話

同じ日に克哉と美羽は映画を見に行く約束をしていた。

時間は夜の八時で九時から始まる映画を見る予定だった。本来なら学生がこの時間に街中をうろついていれば補導されそうなものであるが、私服ではそれもよく分からない。

二人は駅前で待ち合わせてそのまま映画館に向かった。

「克哉は映画よく見るの？」

「うん…気が向いた時にね」

「私さあ…難しいのは駄目なんだ。ばーん。どかーん。倒したーみたいに分かりやすいのに限るんだよね」

「アクションとかってこと？」

「そうそう…それ。会話ばかり続くのって眠くなるんだよね」

だからこの映画を選んだのかと克哉は納得していた。

これから見ようという映画はアクション映画の最先端をいつているもので、前評判も上々で見に行った誰もが面白いと話していた。

「ねえ…朔夜と行けなくて残念？」

そんなことを美羽に聞いてみた。冷静な態度とは裏腹に克哉の内

心はどきどきだった。

「そ…そんなことないよ！克哉と見に行けるのだって楽しいもん」

どこか不自然さを感じながらも克哉はその言葉を自分なりに前向きに受け止めていた。

あまり気にしないでそのまま二人で夜の映画館に入っていた。

上映時間は二時間半。終わったのは十二時前だった。こんな時間に出歩くことのない克哉からしたら警察に捜索願いが出ていてもおかしくないのだが、今日ばかりは親を言いくるめて出てきていた。

「面白かったねえー…」

にこにこしながら美羽は映画館を出てすぐに話しかけた。

「うん。流石に3Dって言うだけあって迫力も凄い。前評判も嘘じゃないってことだね」

克哉は映画の最中も美羽のことが気になり、ちらちらと美羽の方を見ていたので、十分楽しんで映画を見てはいなかった。

横で見ていた美羽は本当に楽しそうな表情で映画を見ていた。目を輝かせて子どものようだった。

それを見ただけでも克哉はどこかほっとしつつ満足した様子だった。

「どうする？帰る？それともファミレス寄ってく？」

美羽が誘ってくれたので、それなら休もうとのことではファミレスに行くことに決まった。

店内にはまばらに客がいた。

土曜日の夜なので、人はいつもの深夜に比べると多い。ウェイトレスに美羽たちと年の変わらない学生が大人数のいる席のすぐ後ろに案内されると席に着いた。

二人でコーヒーを注文するとはばらく先ほど見た映画の話をした。

あそこが凄かった、誰が良かったと共通の話題で盛り上がった。

そうしている内にコーヒーが運ばれ、話題を中断するように一瞬の沈黙と同時に二人はコーヒーをすすった。

すると背後の聲がはつきりと耳に入った。

「へえ…なら松陵高校の高槻庄司って地元の間人間じゃないのか？」

「ああ…何でも隣の市の奴らしいぜ…あつちでも散々悪さして、こつちに引越してきたんだと。しかもだ…その当時あいつと並ぶ不良がいたらしい」

「へー…あの庄司と並ぶっていったら相当だな。お前の親戚がそつちにいるんだろ？聞いてるか？」

松陵高校の話をしていたので美羽の耳は必要以上に大きくなっていった。そしてその会話は二人の予想を裏切る結果にもなった。

「名前は…何ていったかな…そうだ。朔夜だ。高崎朔夜だったな」

36話

「名前は…何ていったかな…そうだ。朔夜だ。高崎朔夜だったな」

その名前が拳がった瞬間に二人は顔を見合わせ声を出すことができなかった。

「なあ、そいつもやっぱり凄かったの？」

他人の悪さをした話というものは皆知りたがり興味を引き付ける。だからその男もどどん質問してきた。

「恐喝、万引き、強盗、まあ…見境なしに悪いことに手を染めていたらしい。警察にもかなり厄介になったらしいし、そんな気性の荒さだから薬までやってる噂もあるってよ…それにあの庄司ともやりあったことがあるらしいって言うし…」

「うわあ…そんな二人がいたら隣の市は相当騒がれたんじゃないか？新聞記事を賑わせて警察も大変だな」

「なあ、庄司とそいつってどっちが強いんだ？」

「確かに。そこも知りたいなあ…」

「おいおい…あんまり信用するなよ。ここよりも田舎だから噂話が勝手に膨らんだだけかもしれないんだからよ…それにこんな話、松陵高校の生徒に聞かれでもしたら何されるか分からないからな。お前らもぺらぺらと話さない方が身のためだと思うぞ」

まるで自分たちには関係ないといった様子で話を続けていたが、美羽と克哉は身近な人間の登場によって打ちのめされた感じだった。互いに会話などできる雰囲気でもなくしばらく静まりかえっていた。

そんな空気を変えるかのように美羽は店を出ようと促した。

歩きながら美羽は話した。

「さっきの話しだけどさあ…朔夜のことかどうかは分からないよ。ただの噂話らしいし…隣の市だって言ったって朔夜がいたところか分からないじゃん」

克哉も美羽の意見に流されるかのように賛同していた。

「そ…そうだよ。ただの噂だし、別の人間かもしれないし…」

上手い擁護の言葉が見つからずそんなことを口にしていった。そして二人はこれ以上何かしようという気分にはなれず、にそのまま別れることにした。互いに噂の人物が朔夜ではないと、きっぱり否定することができないままに…

それから美羽は家に帰るなりいろんなことを一人悶々と考えていた。

自分の知らない朔夜の姿がいろいろあるのかもしれない。見てもみたい気もする…でも…それを知ってしまったら今までの関係が崩れてしまうかもしれない。

好奇心と拒絶される恐怖を同時に抱きながら勝手な想像を膨らませていた。そしてそんな中で自分なりの答えも探していた。

何があるうとも朔夜は私の中で大きな存在に違いはない。信じてい。自分が初めて出会った時の感覚が間違っていないことを…だから私が朔夜を否定することはしない。

今までただ揺らいでる曖昧な自分の恋心は、はっきりと好きに変わっていた。

他人のことをここまで意識したことがないだけに興奮も数倍だった。

それから数日の間、美羽は朔夜のことと頭が一杯だった。

37話

月曜日

朔夜は珍しく一人で昼食を取っていた。いつもなら克哉が誘ってくるのだが、それもなかったので一人で学食で食べていた。

一人で食べる昼食は久しぶりで寂しいものでもあった。一番安いうどんをすすりながら午後のことを考えていた。

そして今日は最後まで克哉は朔夜の前に顔を出さなかった。

こんな日もあるかと思いつつ朔夜はバイト先に向かった。優亜とシフトが同じ日になっていたので、土曜日のことを考えつつどきどきしていた。

「あ…朔夜君」

優亜が先に仕事に入っていたので、朔夜が来るなり声を掛けた。

「この前は来てくれたんだね。ありがとう」

いきなり礼を言われたので、朔夜は自分が来ていることを知っていたことに驚いた。

「え？あの…俺がいたの見えてたの？」

「うん…前の方の列だったから目に入ったんだよ」

あれだけのダンスをしながら観客を見れる余裕を持つてるのは凄
いと思わず感心した。

「ああいうイベントは久しぶりだったから少し緊張したよ…」

「そうなの？俺から見たら堂々としていて凄い一言だけど…」

「そう？」

「うん…ダンスなんて見たことなかったけど、見たことのない俺で
も素直に感動できるなんて実力が無いと無理だよ」

「嬉しいな…でもね、そんなに褒めても何もでないよ…」

照れくさそうに頬を赤らめている優亜を見て、朔夜は可愛いなと
思っていた。

「素人の俺が言っても説得力ないけど、海外でも十分通用すると思
うよ」

人の心を振るわせる演技ができる人間はそういないし、何よりも
優亜には人を引き付ける華があった。

そんな朔夜の言葉を聞いて更なる自信を付けたようで、優亜はこ
れからもがんばろうと自分に誓っていた。

「でも…無理しすぎないように…体が資本なんだからさ」

「そうだね。張り切りすぎるのが私の難点でもあるからさ…息抜き
するときはちゃんとするね」

そこまで話すとお互い仕事に戻り、いつも通りの流れになった。

朔夜は働きながらも自然と優亜の姿を目で追っていた。あの細い体からあれだけの力強い踊りが踊れるのが信じられないといった様子で、再確認しているかのようだった。

自分も人には言えないギャップはあるが、これとそれは違うな…と皮肉に思いながら品出しを黙々とした。

その日を境に朔夜と優亜の距離も縮まり、適度に遊びに行くような仲にもなってきた。しかしそれと同時に克哉と会う回数が減り、以前のように頻繁に会うこともなかった。

38話

噂話の一件から一週間と少し経過した頃、美羽が朔夜の前に現れた。

「やつほー」

携帯の番号を知らない美羽が朔夜と会うためには直接学校に来るしかなかった。

放課後の校門で待っていたのだが、流石に美羽の格好は周囲の目を引いてしまう。

「何だよ…暇人」

美羽には相変わらずそっけない態度だったが、本人は気にもしなかつた。

「これからちょっと付き合ってよ」

「嫌だよ」

「お願い！」

「お前の頼みごとは無茶が多いから断る」

「久しぶりに会ったのにいー…それはないでしょ？だったらここで叫んじゃうよ。私たち付き合いますって…」

「ばっ…何言ってるんだよ。意味わかんねえよ。どごいう理由でそうなるんだよ。ふざけんな」

「ぶー…いいじゃん」

不機嫌そうに朔夜の顔を見たが、朔夜は恥かしそうにそれは困るといった様子だった。

「何したいんだよ…」

とりあえず話だけは聞く姿勢になり、美羽はこっちのものだとばかりに食べたいパフェがあるから付き合えと言い出した。

「そんなことかよ…勘弁してくれよ…」

「カップルデーで半額なんだよ。あの特大パフェが…たったの五百円。それに今日バイトないから暇でしょ？」

「何でお前が俺のバイトのシフト知ってるんだよ」

「そんなの…お店の人に電話して聞けば分かるじゃん。今日は朔夜君バイトですかあ？つてさ…」

「お前はストーカーか？もう二度としないでくれよ」

「朔夜が携帯の番号教えてくれたらね」

「…」

これ以上は何も生まれない会話になってしまつと判断したのか、

朔夜はそのパフェの店に付き合っただけでやるいつものように渋々承諾した。

パフェの店は普段朔夜が入らないであろう店構えで正に異世界だった。

若干引き気味であったが、ここまで来て帰るとも言えずそのまま二人は入った。

早速美羽はお目当てのジャンボパフェ「ちょもらんま」を注文したが朔夜は無料の水だけを飲んでいった。

周りを見回すとどう見てもカップルばかりだった。カップルフェアの効果は絶大で集客率も相当良かった。

美羽の頼んだパフェはすぐに運ばれ、それを見た朔夜は絶句した。

その大きさは正に特大。グラスの大きさが花瓶のようだった。

「おい…お前…これ一人で食べれるのか？」

予想外の大きさに心配して聞いてみたが、美羽にとっては何の問題もなかった。

「大丈夫、大丈夫、別腹だからー」

何も食べていない状態で別腹もへったくりもないと思いつつ朔夜は見ていただけで胸焼けを起こしそうだった。

美羽はそんな特大パフェを食べながら話しかけた。

「朔夜さ…中学はこじじゃなくて違う所にいたって言ったよね」

「ああ…」

「その時って普通の中学生だった？」

美羽はファミレスで聞いた話を遠まわしに質問していた。そんな質問に感づいたのか、朔夜は逆に質問した。

「何でそんなことを聞く？」

「え？」

そんな質問が返ってくるとは知らず、美羽は驚く。しかし朔夜の過敏な反応から何かがあると判断できた。

「いや…あくまで噂話をね…」

そしてファミレスでの話を包み隠すことなく話してみた。

すると朔夜は大きくため息をついて、

「そうか…」

と一言漏らすだけだった。まるで観念したかのようにも見える。

「いやいや…別人でしょ。最初聞いたときは耳を疑ったけど、まさかねえーってさ…大丈夫、私は信じてなんかないよ。同じ名前の別人でしょ」

そう言っつて、気にもせずに黙々とパフェを食べ続けた。すると朔夜は重苦しい雰囲気のままぼそつと話した。

「いや…本当のことだ…」

聞き取れなさそうな小さな声であったが、はっきりと認めたのだ。その瞬間美羽の持っていたスプーンがぴたりと動きを止めた。

「お前をあの時助けられたのも…素性をあまり知られなくなかったのも…俺の…そのやましい過去のことがあったからだ…」

どうしてか美羽の前では素直に話してしまった。朔夜は自分のしたことを隠すにも限界があるのは分かっていた。だから誰かの耳に入るのも時間の問題だと、どこかで割り切っていたのだ。しかし何故か美羽の前では躊躇う話をすんなりしてしまったことを朔夜自身が理解できなかった。

「それって…朔夜が悪いことたくさんしてたってこと？」

「ああ…」

険しい表情のまま美羽の方を真っ直ぐ見ていた。誤魔化す気も微塵に感じさせない、決意にも似た発言でもあった。

「そっか…」

美羽は気の利いた台詞を口にするともなかったが、気まずい素振りを見せるわけでもなかった。あくまで自然体で朔夜の言葉を受け止めているようだった。

「分かったら？俺の存在は厄介なんだよ。だから…もう、俺には近づくな」

痛い目を見るのは自分だけで十分で、人を巻き込みたくないという意思表示だった。

そのままそこから立ち去ろうとした朔夜の手を美羽はぎゅっと握り引き止めた。

「あ…私。難しいことはよく分かんないけど、それって過去のことでしょ？」

美羽は自分の感じたことを素直に話す。朔夜が気を使っているのは分かっていたがそんなこと関係なかった。

「それが私とどういう関係があるの？」

「いや…だから…俺がお前らの側にいれば危害が加わる可能性があるってこと…」

朔夜は必死に説明しようとするが、それを一蹴するかのような心からの叫び。

「逃げないでよ！自分から！」

ぱんとテーブルを叩き、店内に響き渡るほどの大きな声だった。周りの目など気にせず感情のままに出た。

「え？」

いつもの口調と違う美羽の言葉にいつも冷静な朔夜は動きを止めた。

「人に言えないことって誰だって何かしら持つてるでしょ。それを無しにすることってのは無理なんだよ。それにさ、そんなに…そんなに過去の気にしてたらいつまで経っても前に進めないでしょ！朔夜はそんな弱い男じゃない。そんな計算高い男じゃない！私を助けてくれたんだもん」

静まり返る店内は、まるでたくさんの方がそこに存在しないかのようだった。

「いや…あの…」

逆に追い詰められた朔夜は経験のないことだけにおろおろするばかりだった。

一方で美羽は凜とした姿勢のまま朔夜に説教を続ける。

「私は気にしない。だから勝手に遠ざかろうとしないで！私を一人にしないで！」

美羽は今までこんなに人と向き合って話したことはなかった。去

るものも追わなければ、自分からも別れを告げることは平気だった。

冷めた心は誰の言葉も受け入れられず、空っぽの肉体だけがそこにあっただ。しかし朔夜は自分の心を突き動かす何かを持っていた。何度も何度も美羽の心の扉を激しく叩いていたのだ。

だからそんな唯一自分を変えてくれる人間を放したくなかった。

感情のままに大声を出したのも初めてで、はあはあと肩で息をしながら朔夜を見ていた。その目には涙が薄っすらであったが、にじんでいた。

そんな姿を見た朔夜は何も話さず黙っていた。

「出ようか……」

そう言うと、美羽は食べかけのパフェをそのままにして店を出た。

40話

美羽の姿を追うように朔夜は沈んだ様子でゆっくりと歩いていた。

そしていつもの公園まで差し掛かった。夕日に照らされた遊具がどこか寂しさを感じさせ今の心境をそのまま物語っているかのようだった。

美羽は立ち止まり振り返ると朔夜に話しかけた。

「ねえ…私のこと…どう思ってる？」

「え？」

朔夜には美羽の意図が分からなかったので、聞き返すような形になっちゃった。

「純粋に異性として好きか、嫌いかってこと…」

はつきりしない朔夜にそんな二択を迫った。美羽は心のどこかで期待していた。嫌だ嫌だと言ってもいるんなことに付き合ってくれる朔夜のやさしさは愛情の現われだと。

初めて会った時から運命を感じていたが、過去の話聞いてそれがより一層深まった。自分と似た人間がいるのだ。朔夜ももがき苦しんできたんだ。この人なら私の痛みも分かるはずだ…と親に虐げられた経験を共有するかのようにな。

そして再度自分の気持ち確かめるが如く美羽はありのままの心情

を言葉にした。

「私は朔夜のことの本気で好きだよ。軽い気持ちでいつもは言うてるかもしれないけど、今日は違う。はっきり言うわ。私は…高崎朔夜が好き…誰よりも…」

一片の迷いもなく自分の気持ちを朔夜に素直に伝えた。人の言葉には力がある。話し手の気持ちが十分こもっていれば、相手の心を突き動かすのだ。文字での感情表現にはない力であり、相手の素直な気持ちも見えてくる。

朔夜はすぐには美羽の質問に答えられなかった。正直な気持ち出会った時からどうして美羽を完全に否定できないのか分からなかったからだ。

嫌だの邪魔だの邪険に扱っていたが、心の底から嫌いではなかった。どこかほっとくことができない。こいつはこのままでは救われないのではないか…と同情心のようなものがあつた。しかしそれが美羽にははつきりと伝わらない。言葉にしなくては、誰もその気持ちを理解はできないのだから。

美羽は今までの関係を壊したくないがために我慢をしていた。

いつになったら正直な朔夜の気持ちを聞きだせるのだろうか？しかし…それをはっきりと聞いてしまったら私はもうやっと見つけた居場所がなくなるかもしれないんだ…怖いよ…苦しいよ…

ガサツに見えて内面の弱い少女は朔夜に拒絶されることを心底怖がっていたのだ。

だから勇気を持ってふざけた曖昧な質問ではなく真剣な面持ちではっきりと聞いた。

それがどんな結果になろうとも覚悟を決めて。

いつもの美羽とは違うのは朔夜も分かっていた。だから誤魔化そうという気はなかった。

「俺は…」

一語一語搾り出すように口にした。そしてその先の言葉を待っている美羽の心臓は凄い勢いで鼓動していた。当然こんな胸の高鳴りも経験はない。

苦しくて辛くて短い間なのにとても長く感じてしまった。

朔夜はそんな時間から美羽を開放させるかのように先を話す。

「お前のことは…妹のようにしか思えない」

それは二択にない答えであるが、単純に一人の女として好きだという要素はそこになかった。期待してしまっていた部分もあるだけにシヨツクも大きかった。美羽の目には自然と涙が浮かび上がる。

たったそれだけの言葉を聞いてどうして涙が出るのかも分からなかったが、美羽がそれだけ朔夜を好きだということの証であった。

泣き顔を見られたくないというのもあった。うつむいてぼそっと呟いた。

「ず…ずるいよお…その答え…」

友達として好きだと言われたような気がしてならない美羽はそんな答えなど望んでいなかった。寧ろ臆な気持ちなら嫌いとはっきり言って関係を断ち切って欲しかった。

嘘でもいいから心から好きでないのなら、嫌いと言って欲しかった。

ぼろぼろと涙が地面を濡らし、顔を上げられなかった。

「俺は似たような過去を持つお前のことがほっておけないだけ…期待を持たせてしまったような素振りになっていたんなら謝る。だけど…これが俺の正直な気持ちでもある。分かってくれ…」

ぎゅっと拳を握り締めて死刑宣告を口にしたような後味の悪い気分になった。

美羽だけではない。朔夜も心が苦しかった。自らの気持ちを上手に表現できないもどかしさに怒りすら感じていた。

「これで終わりにしよう。俺はもう、お前とは会わない。身勝手かもしれないけどそうしたほうがお互いのためだ…」

期待を持たせてしまったことは変えられない事実であり克哉にも申し訳ないことをしてしまった気分ではいっぱいだった。

だからここで決別することを決めたのだ。

美羽はこれ以上自分が何を言っても無駄だということを知った。

だから引きとめもしなければ、文句を言うこともしない。

朔夜という人間はそんなことで簡単に揺らぐはずはないことを知っていたのだから。

朔夜は立つたまま動けない美羽の前から去ろうとしたが、その前に一言話した。

「頼むから元のような生活には戻らないでくれ。それが俺の…唯一の望みだ」

最後の嘆願の言葉を口にするとう朔夜は振り返りもしないで帰っていった。

美羽は微動だにせず朔夜の姿を目で追うことができなかった。

41話

その日の夜。

克哉は自宅にいながらずと美羽のことを考えていた。朔夜の過去の話もすごいとは思っていたが、所詮は過去であると割り切ってもいたのだ。それよりも美羽の存在が自分の中でどんどん大きくなっているのが分かった。

映画は朔夜の二番煎じみたいなき感じだったかもしれないけど、楽しかった。

映画の内容も美羽のことが気になってあまり見れていないし、何をしていても頭の中に浮かんでしまうのだ。

胸の高鳴りが止まらず、気持ちをどう抑えていいのかも分からない。

だから携帯を手に取ると何度もかけようかどうか悩んで止めた。しかし今日は掛けてみよう。そして告白してみよう。

そんな気になっていた。

悩んでばかりでも前に進めない。それならばっきりと自分の気持ちを伝えてよう。曖昧な関係は嫌だ。

それに駄目だったとしても…

いやその先は考えないことにしよう。

部屋の中でいろんなことをシュミレーションしながら携帯を握りしめていた。

何て話す？

いきなり好きですはまずいよな…やっぱり普通の会話から切り出すべきだ。

それで、大事な話があるんだけど…って言えば相手もなんとなく察してくれるかな。

いや…それはともかく美羽に好きっていつでも人としての好きと勘違いされないだろうか？

まさか私も友達として好きとか言われないかな？

うっうっう…どうする？かけるか？かけないか？

ベッドに座りながら三十分ほど一人で脳内イメージを膨らませていた。しかし決断する時も来る。克哉はやってしまえという気持ちで美羽の電話番号を押した。

ぶ…ぶ…ぶ…ぶ…

繋がるまでの間がとて長く緊張感を与える。それだけで心臓の高鳴りが絶頂を迎えそうになっていた。そして呼び出し音が電話の中で鳴っていた。

出たらまず何て話そうか…えっと…

そんなことを考えていたが、なかなか美羽はでない。そのまま十回目の呼び出し音が鳴ったのを聞くと諦めて克哉は電話を切った。

意気込んでいただけに切った瞬間に大きく呼吸をした。鳴っている間は緊張のあまりずっと息を止めていたのだ。

出ないことをほっとしつつも時期を逃したかとかっかりもした。そして時間を空けて再度かけなおすかも悩んだが、その日は止めることにした。きっと用事があったて出られないんだ。しつこくかけるのも気が引ける…そう配慮した。

しかし実際は違った。

美羽は携帯を自分の目の前に置いていたのだ。だから当然、克哉からの電話も音で気づいていた。だが…美羽はベッドに着替えもしない状態で転がりながら呆然としていた。

朔夜に言われたことが胸に深く突き刺さっていた。その傷は最初は小さかったが次第に大きくなっていくのが分かる。

黙って一人でいると気が変になりそうだったからだ。克哉からの着信を見ても何も浮かばなかった。その目には活力が失われ、まるで死んだ魚のように淀んで一点を見つめていた。

そんなすれ違いの一日がこうして終わる。

42話

次の日、朔夜は克哉を屋上に呼び出した。

克哉は朔夜の過去を知らずに噂話で聞いただけだったのでその真意を確かめるかどうか悩んでいた。しかしそれよりも先に朔夜が自らそのことを口にした。

「あのさ…美羽からも聞かれたんだけど、あの噂話は…本当だ」

「え？」

何故そんなことを突然朔夜が口にしたのか克哉には分からなかった。だからただ驚くだけだった。

「お前と遊んでいた頃はまだ幸せな家庭だったのかも…でも…時間と環境で人は変わってしまう。親父が良い例だったよ。転落人生を分かりやすくたどった拳句に憂さ晴らしをするかのような身近な者への暴力。俺のお袋も逃げるし残された俺も必死に耐えるしかなかった…」

本来なら話したくない自分の過去を素直に話す友人の姿を克哉は静かに受け止めている。

「その後は…追い詰められ俺は感情のままに本能の赴くままに行動したよ。たくさんの人間を傷つけ、泣かせ、怨みも買い、その繰り返しの日。そんな生活に嫌気もさし、終止符を打つかのように俺は刺されて入院。施設の人間に引きとられて現在に至るって訳だからそいつらの話していることは嘘じゃない。こういう人間だっ

たつてことだ」

昨日の美羽に続いて友人を失う覚悟で話した朔夜は、どこかすつきりもしていた。

それは隠したい反面、誰かに聞いてもらいたいという部分があったからかもしれない。

朔夜は喧嘩には自信があったが、人の心を察する能力が薄れていた。だからそれを今必死に得ようとしている状態で、人の心と向き合おうとしていた。そんな朔夜の姿勢に克哉も応えようとしていた。だから過去の話だけならそれも向き合おうと決めていたのだが、話はそれだけで済まなかった。

「美羽にも同じこと話したけど、気にしないって話してた。そして…お前には話しづらいんだけど…その後…」

言おうか言うまいか決めかねていたことを話ついでに口にする。

「美羽に告白されたんだ…」

「え？」

その話の流れでどうして告白の話も出るのか分からなかったが、克哉は勇んで踏み込むこともできなかった。体が拒絶し言葉が出ない。血液が逆流するような気分だった。

「その申し出は断った。でも…悪い…何て言ったらいいか分からないんだけど…お前の気持ちも知っていたのに、こんなことになるなんて…その…」

一人で相当悩んでいた様子を克哉は察していた。そしてそんな苦しむ友人に冷たい言葉などかけられるはずもない。しかし美羽が朔夜に告白したことが、ずんと心に重くのしかかっていた。そう、朔夜の過去の話が霞んでしまいうくらいに…

だから発する声もどこか刺々しい。

「何でお前が謝る？」

克哉は朔夜が謝ることによって自分を見下していると感じたのかもしれない。朔夜にはそんな気は毛頭なかったのだが、立場が弱いものはいろんなことを想像してしまうものである。

克哉が好きだった美羽に告白され優位に立っていることに違いはなかったのだ。だから朔夜の言葉は敗者にかける言葉そのものになっていたのだ。

「別にお前が告白されたことは悪いことじゃないだろう？美羽が好きになるのは自由なんだからさ…」

ただ正論を述べることのできない克哉ではあったが、その圧力は暴力の非ではない。朔夜の心を締め付ける。拳を握り締める力が次第に強くなっていた。

「でもよ…薄々感づいてもいたよ…俺が会った時も常にお前のことを気にしていたからな」

「え？」

「あいつは…俺と会っている時ですらお前の話を何度もしていた。気になって仕方がなかったんだよ…」

朔夜は逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。初めて出会った友人にそんな蔑まされた目で見られることがこれ以上ない屈辱だったからだ。

「克哉…」

「しょうがないよな…俺が勝手に好きになっただけなんだからさ…」
どこか悲しい表情をしていたが、それを悟らせないようにも見えた。

克哉はその事実を受け止めることで精一杯だったのだ。自分の気持ちを手くコントロールできずに混乱していた。

「悪い…ちょっと一人にさせてくれ。俺もそんなに強い人間じゃないんだ…」

心の受け皿が限界を超えてしまったようで、そんな弱気なことを口にするのを拒む理由のない朔夜はそのまま大人しく黙ってそこから立ち去った。

ばたんと鉄製のドアが閉まる音がすると、そこには先ほどまでの雑音はなく静寂が流れる。

「…」

一人残された屋上を克哉は妙に広く感じていた。一人歩きながら

吹き荒れる風を体で感じていた。そしてぴたりと足を止めると。急に感情が高ぶった。

がん！

鉄の格子を思い切り叩く

「くそっ……」

何をやっているんだ自分は！そんな思いが浮かび上がる。

朔夜は悪くない…朔夜は悪くないじゃないか…あんなに正直に自分の話をした朔夜を責めることは間違いだ。俺は何をしているんだ？嫉妬してるのか？思い通りにならなくて…勝手な理想を抱きすぎた反動で？

ぎゅっと両拳を握り締めたまま恥ずべき行為を思い返す。そして頭の中では様々な思いや考えが交錯し自らを正当化してみたり自己嫌悪に陥ったりしていた。

美羽は…俺にもあんなにやさしくしてくれただじゃないか？それは…全部嘘だったのか？俺の勘違いだったのか？少しでも好きという気持ちはなかったのか？

これじゃあ、一人馬鹿みたいじゃないかよ…俺は彼女が純粹に好きだ好きだ。好きでどうしようもないんだよ。

感情がどんどん高ぶり克哉の心の痛みは激しさを増していた。

ちくしょう！胸が締め付けられる。感情が抑えられない。くそ！くそ！くそ！自分が自分がどんどん惨めになる…嫌な人間になる！

何でだよ！どうしてだよ！訳が分かんないよ！俺って何なんだよ。ここに存在しているのか？俺の存在ってあるのか？俺は…俺は…俺は…俺は…

何度も何度も両手で叩き続けて手が真っ赤になっていた。

「くそお…何やってんだよお！」

誰もいないことは知っていたが、自然にそんな心の言葉を叫んでしまった。そしてちっぽけな自分を嫌悪し取り返しのつかないことをしたことに気がついた。

43話

それから三人はばらばらになってしまったのは言うまでもなく、それぞれの関係はぎこちないものになった。

克哉は朔夜と会うことを止め、美羽も克哉に会うことをしなかった。

朔夜はそんな元の状態に戻ってしまったことを寂しくも感じていた。

以前の自分なら去っていく人間の気持ちなど知りたいとも思わない。勝手にすればいいと期待も何も抱かなかった。

だが、一時でも心で繋がりができてしまったことはそう簡単には切ることはできないのだ。その難しさともどかしさからか、元気はなかった。

「朔兄…何かあったんだね。それも今までとは比べものにならないほどに…」

そんな朔夜の様子をいち早く察したのはやはり晃人だった。寝食を共にしているだけに些細な気持ちの変化には敏感なのだ。

朔夜も何も話さないよりも口にした方が楽だったからかもしれない。晃人に今までのことを話した。

「別れがきたってことか…」

「そういうことだ。全てが元に戻ったんだ」

「でもさ、朔兄は悪くないよね。なのになんでそんなに悩んでるの？」

一連の流れからすると朔夜にそんなに落ち度はなかった。噂話にしろ、美羽の告白を断ったにしても、それを克哉に話したにしてもである。

だから晃人は克哉の勝手な一人よがりなのではないかと思っていた。しかし朔夜の考え方は違った。

「軽率だったんだよ…俺の行動も…」

克哉には話さなかったことを口にした。

「あいつが美羽のことを好きだと知ったら、会わなければ良かったんだ。それなのにあいつに呼び出されたからって何度も会ったんだ。期待を持たせるようなことをして…」

朔夜は美羽の気持ちも知っていたのに気を持たせるような行動をしたことを悔いていた。

友人が好きだと話しているのなら距離を置くべきだと話した。そして自分自身、期待を持たせていることを知りながら何度も会ってしまったことを認めていた。

「だとしても…そんな踏み込んだ訳じゃないんでしょ。思い込み過ぎなんじゃないの？」

「いや：俺は心のどこかであいつを意識していたのかもしれない：それを知りながら美羽も克哉も裏切るような行為してたんだ。そんなの断ち切るべきだったんだよ…くそ…」

晃人は朔夜が悩んでいる理由をはっきりと理解できなかった。晃人がまだそんな恋愛をしたことがないのが一つの理由だったが、こればかりは朔夜の心の持ち方でいくらでも変わってしまうからだ。

自分が非であると思えばそうなるし、悪くないと思えばその通りなのだ。

誰にも朔夜を裁くこともできなければ、答えを導き出してやることもできなかった。

「朔兄：こればかりは朔兄が主導権を握っているから難しいけど…時間が経てばきっとよくなるとも思うよ。人ってさ…一時の感情の高ぶりですごいことも言ってしまうし判断も間違っちゃうから…でも冷静になればもっと違った目で見れるようになるはずだから自然と考え方も変わるよ…きっと…」

自分の言葉に自信はなかったが、気の利いたことを話すとしたらそれしかなかった。

今の朔夜には何を話したとしてもきつと自分が悪いと思うだけだろう。だから時間が経つことを待つしかないのだ。

それから数日が経つ。

バイトをしながらも朔夜は考え事をする事が多くなった。それを見ていた優亜も気にした。

「朔夜君…大丈夫？最近元気ないけど…」

「そ…そう？疲れているせいかな？」

「うーん…体の疲れってよりは、悩みごとでもあるような感じがするけどな…」

よく見ているなと朔夜は思わず感心してしまった。

「ならば…今度また遊びに行こうか？」

「え？」

「映画見にさ…話題の映画らしいんだけどどうかな？」

そう言っただけで話した映画は美羽の誘ってくれたあの映画であった。朔夜もいろいろ考えていたが、その気持ちを吹っ切るつもりでその誘いに乗った。

いつまでもうじうじ気にしてもしょうがない。俺は…憧れだった目の前の女性のことだけを考えよう。

そう過去との決別をするように勢いよく返事をする週末会つことに決まった。

朔夜は優亜の働いている顔を見ながら再確認していた。

俺は…この人のことが好きなんだ。そうだよ。何を今更…いいじゃないか。この人と上手くいくのなら多少の別れがあっても…みんな

なを好きになんてなれるか。

そんなことを言い聞かせることで徐々に心持も軽くはなっていた。
しかしどこか冷めてしまう部分があるのも否めなかった。

44話

庄司は苛立っていた。

思い通りに金が集まらないこともあったが、自分の欲求を満たすような興奮する出来事になかなか出会えないことを不満に思っていたのだ。

弱い人間を追い込むのにも飽きてきたのだろう。刺激が少なくなり、自分から逃げるように遠ざかる者たちばかりだった。

空しい…そう感じる事ができれば無益な暴力もなくなるのだが、若さゆえの本能がそれを許さない。

だからそんな状態で行われる喧嘩は相手を殺してしまう寸での所までいってしまう。

仲間止められるか、警察が駆けつけなければきつと殺していただろう。

だから皆は恐怖心が未だに拭えない。

学校には毎日のように来ているが、ぴりぴりしているので声も掛け辛い。そんな中、側近に近い生徒が庄司に話しかけた。

「あの件の話ですけど…」

「あ?」

どの件の話だという顔でそっちを向くと、男は美羽の話をした。

「街の奴に片っ端から聞きまくっていたらあの女の話に行き当たりまして…面白い話も」

「へー…期待はずれじゃなきゃいいがな」

ろくでもないことを話すとすぐに拳を振るう庄司だけに男もごくりと唾を飲み込んでしまった。

「あの日以来、悪事には一切手を染めなくなっただってということと、最近仲の良い男友達ができたらしいです…」

そんな当たり前のようなことを口にする、やはり庄司は怒りを露にした。

「おい…そんなくだらなないこと仕入れたのかよ！」

ぎゅっと握られた拳が男に見えたが、間髪いれずに話を続けた。

「待つてください。あの女、俺たちと同じ側の人間だったんです。中学時代は恐喝、万引き、詐欺を日常に繰り返す札付きで…更生の余地もないとまで言われてたらしいんです。それが、変だと思いませんか？あの件以来から急に更生して、一人もいなかった友達まで作ってるんです」

「そんなの、警察が絡んでやばいと思ったから大人しくしてるだけじゃねえのか？」

「いえ…その位じゃ以前は怯みもしなかったらしいんです。寧ろ警

察が絡んでもそれを利用して更に悪事を繰り返す奴で…」

「けっ…利用できる人間はとことん利用するか…俺みたいな奴だな。なら更生の余地もないわな…」

自分のことを例に挙げてみたが、誰もそのことに対し笑うことも頷くこともできなかった。

「そんな奴だからこそ、急に変わったのはおかしいって話なんです。多分、きっかけになったのはあの件の助けたあの男の可能性が大きい…だから一人もいないはずのあいつにできた男友達も同一人物の可能性もあって怪しいかと…」

憶測で全てをまとめあげたが、そんなに穴もないから庄司も納得してしまった。それにそんな簡単に人が変わることなど想像もしたことないので怪しさも際立った。

そして馬鹿ばかりの学校なのに頭の切れる奴もいたものと側近の男に感心すらしていた。

「面白いな…ならそのお友達とやらに聞いてみるのも手かもな」

煙草を取り出すとにやりと笑いながら吸い始めた。

45話

優亜との約束の日はすぐにやってきた。

朔夜も少し緊張した感じで待ち合わせの場所にやってくる。これは何度経験しても慣れないものだった。

優亜は待ち合わせ時間五分前に来たが、朔夜はそれよりも十分前に着いていた。

服もきちんと選び、髪の毛もセットしてきた。大丈夫だ…そんなことを考えながら優亜と並んで歩く。

流石に優亜は周囲の人間から見ても目立つ。歩くだけで何人もの男が振り向いてしまうのだ。

釣り合いが取れているのだろうか？そんな心配を抱きながら朔夜は歩く。

「ダンスのイベント、最近はないの？」

「うん…もう少しで大きながあるんだけど…ちょっと悩んでいることもあってね」

「え？どんなこと？」

「選択を迫られているって感じかな？」

何の選択だろうと思ったが、それ以上優亜は話さなかったのだから

いてはいけないことかもしれないと朔夜は別の話に切り替えた。

「ま…今日は映画でも見て気晴らしするか！」

「そうだね。朔夜君元気ないからさ…朔夜君が元気ないと私も心配なんだ」

「何で？」

「朔夜君ってそこにいるだけでいろんな人に力をあげてる感じがするんだ。変な例えかもしれないけど太陽みたいに凄く大きなね…」

「え？そう？」

「うん…私だけじゃないと思うよ。人を守ってくれるようなそういう不思議な力を持つてるんだよきつと…」

朔夜はいまいちぴんとこなかったが、優亜がそう言ってくれるのなら悪い気はしなかった。

二人は並んで人ごみの街中を歩き映画館を目指していたが、その様子を数十メートル遠くから見ていた人間がいた。

朔夜たちが歩いている歩道の反対側の歩道でその人物は立っていた。

美羽である。

街に一人で出かけていた時に偶然見かけてしまったのだ。普通の人間ならこんな人ごみの中では、それが似ている人間か程度で見過

ごしてしまいそうだった。しかし美羽にとって朔夜の存在は大きく鮮明に頭の中に残っているのだ。

だからどんなに小さくてもどんなに密集していても自然と目は向いてしまう。

「あ……」

と口走った瞬間、二人で仲良さそうに歩いている姿を見た彼女の足はもうそこから動かなかった。

「……」

立ち止まる美羽の周りをたくさん人間が行き交う。店頭のマネキンのように固まった美羽の脳裏には様々なことが浮かんだ。

そうか……そういうことか……

たったその二人の映像を見ただけで全てを理解した。

はははは……馬鹿だな。最初から自分は……朔夜の心の中に存在しなかったんだ……勝ち目なんかないじゃないか……

涙は出なかった。でも心を引き裂かれるような思いではあった。

自分の視界からどんどん遠ざかる二人の背中をみつめつつ美羽は自分との対話を繰り返し返す。

捨てられた……捨てられたよ……また一人ぼっちだ……空っぽの私にまた戻る……悲しい。苦しい。誰も……私のことを見てくれない……

何も感じない毎日、何も期待しない毎日。今までの人ごみの明るい景色から、虚無の世界が広がって見えるようだった。

白くて広大な景色が自分の周りに無限に広がる…そこには当然道などない。自分ただ一人。

それを知った瞬間にどす黒い感情がこみ上げてきそうだったが、それを必死に押さえる。

「ふ…ぐう…」

思わず胸を押さえて耐えてしまった。

美羽の心はそんなに強いものではない。思春期で両親にも愛情を注がれなかった彼女にとってようやく自分で見つけた心のよりどころを失った衝撃は大きい。

以前のような自分に戻るのも時間の問題かもしれないと思った。そして数分立ち尽くした状態からそのまま幽霊のように暗闇に消えていった。

46話

映画を見終わった二人は夜道を歩いていった。女の子一人で帰すのもなんだと思い、朔夜は家まで送っていくと話した。

すると優亜は嬉しそうにお願いねと頼んだ。

帰り道に映画の話をしたり、今度はどこに遊びに行くかなどで盛り上がった。

会話は途切れることがなかったが、もうすぐ優亜の家に着く距離まで迫ったとき、優亜が急に足を止めた。

「どうしたの？」

「あのお…さっきの話なんだけど…」

思い立ったように話し始める優亜を朔夜はじっと見た。

「さっき？」

「映画を見る前に話した、選択を迫られているって話…」

「ああ…それがどうかしたの？」

朔夜はそんな話をしていたかな程度に聞いていた。しかし優亜は言おうか言つまいか悩んだ様子でゆっくりと切り出した。

「あれね…すぐに外国に行くか、ここに残ってもう少し力を磨くか

って話なの…」

「え？」

外国という言葉が出てきて、朔夜の思考が一瞬止まってしまった。

「それって…お金溜まってから行く話しじゃなかったっけ…」

「う…うん…そうなんだけど、援助をしてくれる人が見つかったらしくて、急に行けるようになったんだ」

それは唐突で朔夜に冷静に考えられる時間すら与えられなかった。だから上手く言葉もでなかった。

「あ…へ…：そうなんだ…：凄いやん。それは良かった…」

正直に喜ぶことはできるはずもなく、嬉しい出来事なのに声が沈んでしまう。朔夜の本心がそのまま出てしまったようである。しかし優亜も朔夜と同じ表情で喜んでいない。

「だけど…私は…：どうしたらいいのか分からないの…：今すぐに外国に行くべきか、ここでしばらくやってみるか…」

以前の優亜なら即答で外国を選ぶと思っていただけに朔夜にはその言葉の意味が分からない。

自分の夢を叶えたいんじゃないのか？そのためにたくさんのお金を貯めたんじゃないのか？

だから朔夜は、悩む理由をはっきりと聞いた。

「怖いのか？」

「違う……」

「援助されるのが嫌とか？」

「そうじゃない……」

「嫌な人の所でダンスをするとか？」

「いいえ……」

どれも的を外した質問だったらしく困惑していた。一体何が原因なのだろうか？

その答えは優亜に聞かなければ分からなかった。しかし優亜はすぐにその答えを話そうとはしなかった。

ためらっている様子が朔夜にもはっきりと見て取れた。

「えっと…あの…」

どくん…どくん…

何を言われるのか分からないが、その緊張感は伝わってくる。

息を吸うことさえ許されないような状態だった。

それから優亜は朔夜の目をはっきりと見ると大きく息を吸い込ん

で吐き出すように、

「あなたのことが好きになってしまったから…」

小さな声でそつと呟いた。しかし朔夜の耳には、はっきりと聞こえていた。

寂しそうにでも恥ずかしそうに話すその仕草は実に可愛らしく朔夜の心を奪う。

すぐにそれに対しての反応はできなかったが、美羽の時とは違う気持ちがあるにはあった。

「ここで…もう少しがんばっても遅くはないと言われたわ…しかし…外国へ早く行くことは環境に慣れる意味では良いことだとも言われた…でも…でも…あなたと離れることになることを考えると…どうしても残る方を選択したくなるの…」

言ってしまった。そんな表情を垣間見せたがもう後には引けないしんとする周囲と共に朔夜の顔を見るのも辛そうだった。

「でも…外国に早く行った方が夢には近づくんではしょ？」

朔夜は自分の気持ちを伝えることよりもまず先に優亜の未来のことを考えていた。

「うん…それもあるわ…ごめんね、急に変なこと言い出して…朔夜君にはいい迷惑だよな」

「いや…そんなことは…」

照れくさそうにそんなことを言ってみた。

「朔夜君にこんな大事なことに對して答えを出してもらうことは卑怯かもしれない。間違いかもしれない…けど…私の気持ちだけじゃ今は決められないの…もしも…私と付き合ってもいいって思えるなら、一週間後の二時に私の家に来て…行くか行かないか最終決断を出すのがこの日だから…」

「もしも俺が来なかったら…外国に行くってこと？」

「うん。あなたのことはきっぱりと諦めて私は行く」

「一つ聞いていい？」

「ええ…」

「俺の気持ち…優亜の人生を左右するなんてそんなことあってもいいの？」

「私は…自分の夢のことばかり考えて生きてきた。でも…朔夜君と出会って、いろんなことをする内に考え方も変わってきたの。夢ばかりじゃなく恋もしてみたい…もっと…人を好きになっしてみたい…そんな風に…」

夢だけを追うことで周りを見ずに突っ走ってきた優亜は朔夜によって違う人生もあることを教えられた。

人を好きになるっていうのはどういうことなのか…しかし朔夜はそんな大事なことを自分に任されていいものか疑問に思っていた。

感情というものは一時のものが多し。時間が経って冷めることがある。優亜が振り返った時にあの時の選択が間違いだっただなどと思うようなことがあれば、それは避けたい所でもあった。だが、優亜は変わるうとしてゐる。恋も夢も両立させようと…その気持ちには応えなくてはなるまい…

朔夜は腹をくくっていた。

「分かったよ。優亜がそれを望むというのならそうする…」

朔夜の決断に優亜は救われた気がした。そしてどんな結果になろうとも怨むことはしないと決めていた。

「ありがとう…」

礼を言うところまで二人は別れた。

朔夜はベッドの上で一人考えていた。

優亜は自分と付き合いたいと言ってくれた。それは俺も純粋に嬉しい。それが望みだったからだ。

だけど…俺の過去を受け入れてくれるだろうか？そしてここに住んでいることを認めてくれるだろうか？もしかしたらこんな姿を見たら嫌われるかもしれない…そんな悪いことばかりが頭の中を過ぎっていた。

いや…優亜はそんな子じゃない。自分の過去もきつと受け入れてくれるはずだ。

たくさん議論を頭の中で交わしながら付き合っべきか夢を取らせるべきか悩んでいた。

俺は…本当に…優亜の夢を遠回りさせてまで彼女のが好きなのだろうか？

そんな疑問すら浮かぶ。自分に自信がないからでもある。

あいつみたいに…感情のままに気持ちを伝えられたらいいのに…

美羽の顔が不意に浮かんでいた。

それと同時に自分は卑怯な存在だと思っていた。いろんなことを天秤にかけ、はっきりとした決断を何一つできない。情けない…優亜のことですら憧れなのか本心で好きなのか分からなくなっている…

頭を抱えながら罪のない枕を叩いてしまった。

人を純粹に好きになるって…俺には…無理なのかよ…いろんな人を傷つけといて…

その日は、はっきりとした決断が出ることはなくそのまま眠ってしまった。

47話

松陵高校の生徒は美羽の親密な友人を探す上でどうにか朔夜にたどり着いた。

しかしまだそれが事件の張本人かは誰も知らなかった。ただ美羽の友人というだけで、そいつが松陵高校の生徒を倒したのかは不明であった。

朔夜は帰り道の住宅街の路地で彼らと出会った。見た目から悪者の存在を惜しみなく出している感じで、堂々と相手を見下している様子だった。

「おい…お前…ちょっと付き合ってくれないか？」

挑発気味で声を掛けられると、朔夜はまずいなと思いつつ、どうしたらいいか考えていた。

まさか…あの時のことでの報復なのだろうか？それともただの恐喝か？

どちらにしても相手が松陵高校の生徒とあればまともな話でないことは確定していた。

「お前に聞きたいことがあるんだよ…こんな場所で目立つのもなんだし…ちょっと付き合えよ？なあ？」

並みの人間ならこんな暴力的な言葉を聞いただけで震えてしまいそうだが、朔夜は冷静そのものだった。そして因果応報とはこのこ

とだと思いながら相手に身を任せた。

「さあ…兄ちゃん。騒ぎにならないよにちょっとあっちに行こうか？」

朔夜は数人の敵つい男に包囲されながら連行された。

連れて来られた場所は廃墟のボーリング場で、助けを呼べるような環境ではないことが一目で分かった。

朔夜はここに来て、震えることも暴れることもしなかった。

男は全部で五人だった。おそらく噂の男に当たったのならこの人数でいかないと倒されるということが前提だったのだろう。

現に張本人がここにいるのだが、まさかこの男が庄司の探している人間だと誰一人思わなかった。

それだけ今の朔夜には悪人の雰囲気似つかわしくなかったのだ。

「お前…あの女…美羽とどういう関係だ？」

質問はそんな一言から始まった。

「え…と…ただの知り合いですけど…」

相手を怒らせないように丁寧に話す。

「いつどうやって知り合った？学校が違うよな…」

やはり自分を探しているのだろうか？そう思い言葉選びが慎重になる。

「落し物を…財布を拾って届けたんです。そうしたらお礼と一緒に遊ぼうってことになって…今に至るんですが、そんなに仲良くないですよ。会ったのだってほんの数回ですし」

苦しい嘘かとも思われたが、友人の知り合いなどと出すよりはましだと考えた。

「へー…お前があいつの財布をね…それで、あいつ何か話してなかったか？自分を助けた奴とかの話とか？」

本題に踏み込みやはり自分を探していることを確信したが、動揺しないでそのまま返答した。

「自分を助けた奴ですか？…いや…そんなことは話していませんけど…」

「本当か？」

ぎろりと睨みをきかせて嘘をついていないか確認してくるが、朔夜は目を逸らさないで「ええ」と話した。

嘘ばかりの会話であったが、朔夜の強心臓がこの時は幸いし、相手に信用を与えていた。

詰まることのない話し方で、こいつではないかと判断し始めたのだ。

「しかし…お前も災難だな。あんな女に関わってよ…」

「え？」

「あいつはよ…俺ら以上にしたたかで、悪人だぜ。友達なんて作れるような人間じゃない。人をまるで信用してないらしいからな。だからお前も騙されて金を取られるのが関の山だ…くくく…」

そこにいた朔夜以外の人間はくすくすと笑っていた。

美羽の境遇は知っていたから周囲の人間にそう思われていても仕方ないことだったが、朔夜は理由はなかったがどこか腹が立っていた。

何でそこまで言われなければならないんだと感情が湧き上がっていた。しかしここで一人怒っても不審に思われるのが分かっていたのでぐつと堪えていた。

「災難はそれだけじゃない…」

そこまで話すと朔夜は腹部に激痛を感じた。

「ぐ…」

目の前の相手が固く握った拳を朔夜の腹部にめり込ませていた。

「あの女に関わったというだけで、無意味に痛い思いをするんだからな…」

朔夜は思いがけない衝撃に両膝をついてその場に倒れた。

攻撃というものは予期できればそれなりの対処として体が身構えるものだが、それをなくした状態では百の力を百で受け止める行為でしかなかった。だから屈強な朔夜も油断をしていたから痛みに耐えられなかった。

腹部を強打されたことで呼吸が苦しくなり思考も鈍ってしまった。

「恨むならあの女を恨むんだな…うちらをコケにした代償は払ってもらおう」

そして更に追撃とばかりに倒れた朔夜の顔面をサッカーボールでも蹴るかのように蹴飛ばした。

がんとという鈍い音と共に朔夜の顔面が歪んだ。

「ぐふ…」

口から鮮血を撒き散らしそこで意識が飛んでしまった。

がくりとそのまま頭を地面に叩きつけると朔夜は全く動かなくなっていた。

目が覚めたのはそれから数十分後だった。目を開くとそこには倒れた時と同じ景色が見えていた。

「あ……」

ずきんと痛む頬がぼんやりとした意識をはつきりとさせる。

蹴られたことによつて頬の中が切れて出血していたが、時間が経っていたのでそれも止まっていた。

「く……は……」

立ち上がることは出来た。しかし体のあちこちが痛くてすんなり立つことは無理だった。

辺りを見回すが誰もいなく、ほつたらかしの自分が悲しくも思えた。

そしてゆっくり立ちあがり服のほこりを払つとあることに気づいた。

財布が抜かれている。

「くそ……」

それほど大金は入っていなかったが、貧乏学生にとって痛手に違いはなかった。殴られたことよりもよほどショックだった。

とりあえず殴られ歪んだ顔でバイトに出ることもできないので、今日は休むことにした。

携帯を取り出して連絡を済ませると、皆勤賞の朔夜は怪しまれることもなく休むことができた。

「はあ……」

どつと疲れが押し寄せて、壁にもたれかかった。そして先ほどまでのことを頭の中で整理する。

どうみても自分を探していることが一目瞭然だった。美羽の側にいる人間に的を絞っている辺りなかなか鋭いとも思っていた。しかしこのままではきつと克哉にも魔の手が伸びてしまうことが分かっていたのでどうするか悩んだ。

克哉が自分同様に関係ないと分かってくれば諦めてくれるかもしれない。しかし暴力を振るわれることが前提であるのは間違いないから困るのだ。

常に監視するわけにもいかないし、自分から名乗り出ることも遠慮しなかった。

「くそ……」

相手は手段を選ばず行動できるのに自分が何もできないことがたまらなく嫌だった。

それならば美羽と克哉を遠ざけるしかないのだろうか……そんなこ

とすら浮かんでいた。しかし不自然すぎる行動であるので避けたかった。

良い案も浮かばずにとりあえず帰ることにした。

49話

ぼろぼろの状態で帰ったことが目立つことこの上なしだと自分でも分かっていたので、朔夜はこっそりと自分の部屋まで入っていた。

「ふう…」

誰にも会わずにやり過ごしたことでほっとしたのはつかの間、部屋には晃人がいたのだ。

「どうしたの？その顔…」

腫れ上がった顔はやはり予想以上に目立っていた。だから誰が見てもそんなことを聞くだろう。

「いや…ちょっとな…」

流石にすぐ正直に話す気にはなれなかった。だから適当に誤魔化すと救急箱を取りに行くと話して一旦部屋を出た。

鏡を見れば見るほど暗い表情になってしまった。

朔夜はこの顔が明日もこのままだったら登校にも差し支えるのではないか不安だった。

大きなため息をついて部屋に戻ると、晃人は黙々と机に向かっていた。

朔夜のことを察して何も聞いてこなかった。

だから逆に朔夜は自分の口から話した。

「そうなんだ…それで、相手は半殺しにでもしたの？」

朔夜の強さを考えればそうなくてもおかしくないと思っていた。しかし朔夜が返した答えはその逆である。

「へえー…手も足も出ないでやられたんだ…でも、いいんじゃない？そのことで気づかれなかったんでしょ」

「多分…」

「お金取られたのは痛かったけど、ばれた方がもつと辛いよ…きつと…」

自分の取った行動に同意見を述べてくれたので朔夜はほっとしていた。

「でもさ、もう一人のお友達も気をつけた方がいいんじゃない？朔兄が襲われたのなら、彼もきつと…」

克哉のことを指しているのだが、朔夜もそうだと思った。仲の良い友達を片っ端から狙っているのなら当然そうなる。

「くそっ！どうすればいい…」

自分が巻き込まれることは納得がいくが、関係のないものが殴られるのは嫌だった。拳を握り締めて悩んでいた。

「一回朔兄のように殴られるのが一番良い方法かも…弱ければ何の問題もないんでしょ」

「無責任すぎるだろ…ちくしょう…良い方法がないのかよ…」

「なら…朔兄が正直に名乗り出る?」

そんな提案をされ朔夜の四肢がびたりと動きを止めた。

「それは止めた方がいいと思うけどね。だって噂では松陵高校を仕切っている高槻庄司はよほど危ない奴らしいから朔兄の人生なんか平気で壊してくると思うよ…」

「高槻…庄司だと?…マジかよ…」

「うん。中学でももっぱらの噂だよ。高校一年生にしてあの不良高校のトップに立った男って…類を見ない強さに自らの行為を省みない冷徹な心の持ち主だってね…」

朔夜はその名前を聞いて更なるショックを受けた。そのただならぬ雰囲気には晃人は心配した。

「大丈夫?」

「ああ…ちょっと昔のこと思い出してな…」

「まさか…中学時代の知り合いつてこと?」

晃人の何気ない一言は当たっていた。朔夜は無言でうなずいてい

た。

「あいつも…俺と同じだよ…自分の境遇に振り回されて感情をコントロールできなかつたんだ。狂った毎日を過ごし続け…そして自然と引き合わされた」

晃人はごくりと唾を飲み込んだ。

「俺は自分の道をどうにか見つけることができたが、あいつは自分の身を傷つけるかのように暴力を常に求め続けていた…俺も狂ってはいたがあいつに比べればまだ…しかし…よりによってあいつが絡んでいるなんてな…悪いことは続くってことかよ」

どっかと椅子に腰を下ろして現状を整理しようとした。

「まあ…そんなに焦って朔兄が正体ばらさなくてもいいと思うよ。責任感だけで無謀に突っ走れば状況が悪化するよ…それに…友達だつて襲われる保障はないんだからさ…」

晃人はどうにか良い方向に事が進むように願いながら朔夜を励ました。しかし朔夜は晃人の言葉だけで安心するはずもなく、険しい表情のままだった。

打開策は見つからない。今、無意味に自分が庄司に会った所での狂人は俺を許さないだろうとも考えていた。

「もしものことになったら…悪い…」

弱気なことを口にしたので、晃人はそんな簡単に謝らないで言った。

「朔兄…悪いほうに考えすぎだよ。まだ何も起こってないんだから。だから勝手に出て行くのだけは勘弁してよね」

それが晃人の本音だったのかもしれない。兄のように慕っている人間がいなくなることを望んでいない。

「しかし…ここに迷惑が掛かるようなことがあったら…俺は…」

晃人はそこで初めて声を荒げた。

「だから！何でもかんでも一人で背負いこまないでよ。ここにいる人間はみんな訳ありなんだから。それを承知で受け入れてくれてるんだからさ。もっと朔兄も人を信用してよ…」

普段は冷静で大人しい晃人がそこまで感情を出して話すことはなかった。だから朔夜も圧倒されていた。

「あ…ああ…」

朔夜は何でもかんでも一人でやろうとしてたのは事実だった。しかしそのことで相談することもできずに悩み勝手な決断を下すこともあった。そこをはつきりと指摘されたことで自分に足りないものを知った。

そうか…人を信用していなかったのだ。と気づかされた。

上辺だけの付き合いばかりで慣れすぎてしまったから完全に人を信用などできなかつたのだ。しかし今は違った。友達もでき、家族のように話してくれる仲間がいるのだ。

心の底から受け入れなければ、この先も何も変わらないんだな…
そう朔夜は反省した。

「俺も…もう少しお前らのことを信用すればいいんだよな…そうだな。分かったよ。ごめんな…勝手なことばかりで」

晃人に謝罪し険しい表情も解けて吹っ切れた様子だった。

「別に…朔兄が分かればそれでいいんだよ。たく…自分で生き方狭めて苦しんでいるから見ているこっちが辛いよ」

恥ずかしそうに話していたが、内心は嬉しそうであった。

庄司の元に朔夜を襲った奴らが報告に駆けつけた。朗報ではないからあまり気乗りはしないのだが、言わなかったら言わなかったで何をされるか分からなかったので半ば強制的だった。

「友人の奴に探りを入れましたが…目当ての奴じゃないかと…」

「どうして？」

「弱すぎます。抵抗することもしないであっさりと…」

「ふーん…」

「とりあえず財布だけは抜き取っておきましたが…」

朔夜の財布を庄司に手渡した。その財布を見ながら庄司は話を続けた。

「お前らが声を掛けた時に、そいつはどんな反応をした？」

「え？反応ですか？えっと…素直についてきましたけど…別に暴れることも逃げることもしなかったなあ…」

「そうか…それで殴られた時もまるで無抵抗なのか？」

「ええ…何もしなかったと…思います。一、二発殴ったらそのまま倒れたんで…」

それだけを聞くと、報告に来た男を追い払い一人で財布の中身を見てみた。

中には八千円の金とレンタルの会員カードが入っていた。

庄司はその会員カードに書かれた名前を見て目を見開いた。

「これは…」

高崎朔夜…

マジックで書いている字は少し消えかけていたが、はっきりと読むことができた。

その名を見た瞬間に凍りつく。

「何故…あいつが…」

庄司はカードを握りながら呟いた。そして間違いなのではないかと再度確認した。

しかし紛れもなくその名前はよく知っている名前だった。そして朔夜を襲った人間に先ほど聞いたことを思い出すと自分の知っている人間であることをはっきりと確信した。

喧嘩慣れしてない人間が取り囲まれたなら逃げるか、大声を上げるか何かしらの行動はする。だが、朔夜はそれをしなかった。素直についていったのだ。その上、殴られる時も無抵抗というのは有り得なかった。

殴られる痛みを知らない人間にとってその行為は避けたいもので、
どうにか防ごうとするのだ。

拳を黙って真正面から受け止められるなど、素人では有り得ない。
だから庄司は男の話を聞いて疑問に思っていたのだ。

まさか…場慣れしている人間なのだろうか？

そのように感じたが、勘違いかとも思っていた。

だが、その全てを繋ぐことが今はつきりこの名前でできたのだ。

「高崎…朔夜…」

こいつなら全ての行為に関連付けられる。そう、庄司は思っていた。

「くくくくく…」

教室の中で一人笑っていた。それは自分の退屈を満たす人物が現れたことで喜びのあまりに感極まったせいかもしれない。

自分に等しい人間が…俺の狂気を受け止めてくれるに違いない。

そう…俺と同じ人種のあいつなら…

庄司はぶるぶると震えながら、とめどなく溢れ出す自らの体に巣食う黒い感情を必死につなぎとめていた。

51話

克哉は美羽に何度か電話を掛けていた。しかし何度掛けても出ることにはなかった。今までならそれで諦め、時間を置いてから掛けてみていたのだが、克哉はそれをしなかった。

もう待てなくなったのだ。

会いたい…その気持ちが真っ先に浮かび、足は美羽の住むマンションの方へと向かっていた。

朔夜がどうか関係ない。俺は…自分の気持ちも満足に伝え切れていない。それなのにそのままって訳にもいかないだろ！

そのように自らを奮い立たせ踏み出す一歩は力強かった。

放課後直後の五時頃だったので家にいるかは分からない。しかしそのまま克哉は美羽の家の前までたどり着いた。

心臓はどきどきしていた。

連絡なしにいきなり会ったら向こうも引いてしまいかもしれない。

僅かな迷いも抱いたが、それよりも会いたい気持ちが勝っていたのですぐにインターホンを押す。

ピンポン

軽快な音が鳴り響くと部屋の中から微かに音が聞こえた。いるのだろうか？

それから間もなくドアが開けられジャージ姿の美羽が眠そうに克哉を見た。

「あ…克哉…」

克哉は美羽の表情からもただならぬ雰囲気を感じた。そして視界に入り込む暗い室内、ぱっと見ただけで点在する脱いだ服やゴミ…

一瞬の出来事ではあるがいろんなことを考えてしまった。

一方で美羽は克哉を見て、どうしてここにいるのか理解できなかった。

「あの…ちょっと話できる？」

電話を無視されていただけにすぐに閉められるかとも思ったが、美羽は少し待っててと話すのでドアを閉めた。

克哉はドアの前で数分立っていると、いろんなことを想像してしまった。

精神的に追い詰められてる？まさか…

しかし…美羽の目には…生気のないようにも思える…
いろんな憶測している間に着替えて髪を整えた美羽が再び目の前に現れた。

「ちょっとそこら辺でも散歩しよっか…」

美羽から克哉を誘導してくれたので、克哉は完全に嫌われていないとも感じほっとしていた。

マンション付近の整備されたきれいな遊歩道を二人で並んで歩く。

「ごめんね…電話何度もくれたでしょ」

「ん…ああ…いや、こちらこそ何度もごめん。しつこかったでしょ」

途切れ途切れの会話で、どこか他人行儀のような感じがした。

いつものような美羽の明るさもなければ、強引さがどこにもなかったからだ。

「具合でも悪かったの？家にずっといたとか…」

「うん…まあ…その…学校行きたくなくなっただけ。ちょっとサボってたんだ」

「そっか…」

膨らむことのない会話が数度交わされながらも美羽は浮かない表情のままだった。そんな美羽の顔を何度も克哉はちら見しながらどうしたらいいのか模索していた。

そしてこのままでは無言になってしまうのは明らかなので、克哉はどうにか会話を続けた。

「なら…体はどこも悪くないんだね？」

「うん…」

あんなに明るかった美羽からはその欠片も見えないほど暗く、小さく感じる。

その原因を作ったのはやはり朔夜のことなのだろうか？そう考えただけで抱きたくもない嫉妬心は湧き上がる。

「あのさ…もしかして朔夜のことでごうなっただ？」

単刀直入に聞いた。デリカシーのない言葉といえばそうだが、克哉にはのんびりと待っていることができなかつた。原因を知りたかつた。

「そっか…知ってるんだ…はは…そうだなあ…やっぱりそれが原因つて言えばそうなのかなあ…情けないよね。振られたぐらいでこんなになつちゃうなんてさ…」

弱弱しくも正直に美羽は自分の気持ちを語つた。それはきつと強がる自信もないぐらいに衝撃を受けた証だつた。

克哉はそんな姿の美羽を見て、踏ん切りがついた。ここで言わなくていつ言う？そう思い、高鳴る心臓を押さえながら必死に心から声を出して叫ぶ。

「あ…あのさあ。こんな時に言うことじゃないとも思つけど…俺は…俺は…美羽のことが好きだよ！決してかわいそうとか、そういう気持ちじゃなくて…純粹に…心から好きなんだ」

二つの拳をぎゅっと握り締めながら懸命に声を出す。

「え……」

自分がまさかこのタイミングで告白されるなど思わず、美羽は目を丸くしたまま呆然と立っていた。

一方で克哉はそのまま出せずに悩んでいた自分の胸の中に溜まっている気持ちを一気に吐き出す。

「遊んでいる時も楽しかったし、最近は何もしてなくても美羽の顔が…その…自然に浮かんでくる…だから…曖昧な気持ちなんかじゃない！俺の…俺の…本心なんだ」

この言葉話すために何度頭の中で練習を繰り返したか分からなかった。克哉は一人で何度も告白のタイミングを伺い、機会を逃した。それを毎回悔いているだけに相手に言えただけで、ほぼ満足ともいえた。

しかしそんな全身の力を使い果たしたかのような叫びは、美羽の心をそう簡単に打ち砕く行為には届かない。

固く凍った心を氷解させるにはそれなりの時間を必要とする。しかしその氷にきっかけのひびを入れることはできた。

ちくりと美羽の心を刺激し笑顔を浮かべることができてたのだ。

人の心からの温かい気持ちを全身に受けたのはこれが初めてかも

しれない。上辺だけの関係の付き合いでは自分のことをそこまで考えてもくれない。

好きイコール体の関係を求めようとする者ばかりが自分の前にいただけに克哉の心のこもった告白は嬉しかった。だから自然に笑みがこぼれた。

「あ…ありがとう…」

その微笑を見ることができただけでも克哉は自分の取った行動が間違いではないことを知った。

しかしだからといって返ってくる答えが良いものとは限らない。

「でも…ごめん。私…克哉のことは…その…付き合いとかそういう対象には…見れないの…ほんと…ごめん…」

自分が朔夜に言われたことそのものを克哉に話す。それが大きな罪悪感として美羽にのしかかっていた。

そうか…朔夜もこんな気持ちだったのだ。

そのことを知った。

相手が大事な人間だからこそ、断るのが辛いのだ…そして決断することが難しいのだ。

私は…馬鹿だ。こんなにも自分のことを気に掛けていてくれる人がいるのに…自分のことばかり考えて、自暴自棄になって…塞ぎこんで何もしない…

自らの言葉で傷つけてしまったかもしれない克哉の顔を見ることは辛かったが、克哉は逆に清清しい顔をしていた。

「大丈夫…分かってたよ。君は朔夜のことが好きなんだ。それはそれでいいと思う…」

今まで言えなかったことを言えたことで半分満足していたせいもあつたのだろう。克哉は朔夜に別れを告げられた美羽のように取り乱すこともなかった。

「だけど…いつまでもそのままじゃ前に進めないとも思うよ…さあ、元気を出して、いつもの美羽に戻ってよ。それでいつものように友達として遊んでくれよ」

克哉は純粹に美羽に元気になってほしかった。それが付き合えなくても別にいい。友達としても支えてあげたいという気持ちがかんにかあつたからだ。

しかしそれは時間が経てば変わってしまうかもしれない儂い一時の宣言でもある。人が一人の人間をずっと繋ぎとめておくことなど無理なのだから…

克哉はまだ人生経験も未熟である。だから湧き上がった感情をそんな風に割り切ることなど到底無理な話だった。

「…」

無言のままであつたが、美羽は嬉しくて仕方がなかった。親から貰わなかつた愛情を注いでもらっている気にもなつた。

だから涙も流れる。

どうしてか本人も分からない。勝手に出るのだから…

二度目の涙は悲しい涙ではなく嬉しい涙だった。これも経験のないことである。

「そんな…泣かなくても…」

そんな様子に心配した克哉は美羽の肩をそっと支えて落ち着かせようとした。

美羽の手に触れる温もりが愛おしく、寂しい…自分の恋は終わったのに…

でも…決めたのだ。自分は美羽を支えてあげよう。友人として…一人の人間として…それが難しいことだとしても。

「私…がんばるから…がんばるから…こんな所で挫けないよ…絶対に…」

自分に言い聞かせつつ克哉に聞いてもらうことで逃げ道を断つ行為に出たのだ。

折れそうだった心を克哉の愛情でどうにか持ち直すことができた。それならここからやり直そう…朔夜に言われたようにあの生活に戻るのだけは絶対に駄目だ。

私はもっと強くなるんだ。

久しぶりに外に出た美羽の感じた風は、とても心地よく大きく吸い込んだ空気には初夏の匂いも混じっていた。

もやもやした心の雲は一気に晴れて明日へ生きようという活力に繋がった。

目には力が宿り、明日を生きようと願う人間の目に変わった。些細な違いではあるが、そんな美羽の姿を見て克哉はほっとしていた。

「君なら…きつとがんばれる。だから…良かったらこれを受け取って」

克哉が差し出したのは一枚の紙だった。

「ここに朔夜の電話番号が書いてる。もしも…諦める気がないならまたチャレンジすればいいさ…」

克哉が半ば強引に美羽の手にその紙を乗せて握らせた。

「克哉…」

克哉の手の温もりと共に託すかのような強い意思を受け取った。

「朔夜もきつと悩んでる。美羽のことをはっきりと嫌いにはなっていないと俺は思うよ…」

そう話すと二人はそこで分かれた。

克哉は夕日を背中に浴びながら一人で歩いていた。

とぼとぼ…とぼとぼ…

足取りは重い…まるで一步一步何かを確かめるかのように歩いていた。

周囲には誰もいない。それを見計らってかは分からない。涙が出ている。

「あ…」

あんな体裁を守るような言葉を口にしてみたが、実際は心が痛んでいたのだ。

「う…う…」

何で？頭の中で理解などできるはずもない。体の部位ではないどころかが痛むのだ。

涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃになっていた。こんなことは幼少期以来だろう。

流石に声を出して泣くことはしなかったが、涙が止まらない。

心から好きな人に振られるのは…こんなに痛いんだ…美羽もこんな気持ちだったんだ…

それぞれが他人の痛みを知った日になった。

53話

庄司は偶然にも高崎朔夜に行き着いたことで、強引な手段に出ることを決めていた。

何故あの朔夜が進学校などに進学し、普通の人間のような人生を送っているのか知りたいのが第一だったが、純粹に庄司は会いたかった。

過去の朔夜を知っている唯一の人間だけに好奇心が尽きない。

「おい。高田美羽の友人つてのはもう一人いたよな」

「ええ…確か、克哉つて奴だと思いましたが…この前ぶちのめした朔夜つて奴の友人のはずです」

再確認すると、庄司はにやりと笑みを浮かべた。

「そうか…なら明日そいつを狩るぞ…それで美羽を拉致する」

「え？拉致ですか？」

「おいおい…やばくないか？」

高校生が拉致などという言葉聞いて平然とした態度を取ることができない。ましてやだ。周囲の人間は小声でざわついてしまう。

「あの…何で急に…高田美羽は警察に駆け込もうとしているから面倒だつてこの前話してたじゃないですか。？下手すれば俺らも…捕

まるんじゃ…」

一人の男がその場にいた者たちの代表して話す形になったが、庄司はそんな発言を無視した。

「おい…誰に意見してるんだよ？」

その一言でざわついていた者たちの声が一斉に止む。

「後先考えてどうなんだよ。俺がやれっていったらやるんだよ。こんな面白いシヨールは久しぶりなんだからよ…」

庄司一人が勝手に盛り上がって嬉しそうだった。他の者には何のことかさっぱりだった。しかし反論などできるはずもなく黙っていた。

「その克哉って奴は半殺しにして、人の見えないところにも捨てとけ…女の方は俺がやるからよ…」

狂人の目にはその行動の先など見えるはずも罪悪感も抱くことなく怪しく光っている。

集団行動は罪の意識も薄れるもので、あっさりとその場にいたものは従うことにした。

54話

運命の日曜日。

その日は雨が降りそうな層の厚い雲に覆われた暗い空だった。

朔夜の目覚めは悪い。

人は答えを探す時間を与られるといろんなことを考えてしまうのである。ましてや一人の人間の人生を左右しかねない。だから昨日も夜遅くまで悩んでいたのだ。

体も頭も鈍い…しかし決断は出せた。

俺は…優亜と付き合おう。

自己嫌悪の繰り返しと自信のなさ、そして妙な不安感からその決断に至ることに時間が掛かった。何度も何度も優亜のことを考えて自分に言い聞かせて僅かな自信も得ることができた。

そうと決まったら約束にまだ早い昼前に動いていた。その時間までじっとしているのは耐えられないので気分転換に時間を潰そうと思っていたのだ。

本屋に寄って本を読んだり、ゲームセンターで時間を潰しているものの全て上の空だった。

優亜に会いに行くことばかりを考え、今からときどきしていたのだ。

そんな様子で街中をそわそわと歩いていると、自分の学校の連中が歩いているのが目に入った。そいつらは後ろを何度も見ながら話していた。

「おいおい…あいつ…大丈夫か？」

「ああ…あれ私服だったけど松陵高校の奴らだよなあ…」

「うわあ…遠藤も災難だな。いちゃもんつけられてるようだったから…きつと殴られるぞ」

「ここにいたら俺らも危なくないか？まだ松陵高校の奴らごろごろしてるから、仲間だと思われたら巻き込まれるぞ…」

「早く行こうぜ」

そんな会話が耳に入り、朔夜は足をぴたりと止めた。

「おい！」

そして連中に声を掛けた。

声を掛けられた男たちは松陵高校の生徒が声を掛けたのかと一瞬思い驚いたが、見たことのある顔だと思ってほっとした。

「あ…高崎か？」

「誰だ？」

「隣のクラスの奴だよ……」

そんなやり取りもまどろっこしく、朔夜は急いで聞いた。

「さっきのお前ら話だけど……克哉が連れて行かれたのは本当か？ いったいどうだ？」

「克哉？ ああ……遠藤のことか？ 数分前だけど……場所まではなあ……」

朔夜は、はっきりとした答えが返ってこないのを、少しイラついた。

「河川敷の方に向かったかもしれないが……お前……どうする気だ？ 助けにでも行くのか？ やめとけよ。あいつら松陵高校の奴らだぞ……俺らみたいなのは関わらない方が身のためだつて」

「そうそう……誰か助け呼んだ方がいいって……」

大して仲良くもないからそんな無責任な言葉が出てしまう。だから朔夜も責めることはできないが、思わず言葉が出た。

「お前ら最低だな」

河川敷という情報を提供してもらったので、朔夜はそのまま従うように走って向かった。

朔夜には嫌な予感しかしない。

自分のせいで巻き込まれていることは間違いない。それで克哉が傷ついてしまったら俺の責任だ……それだけは嫌だ……

大事になっっていなければいいが…

人のために走ったのも久しぶりである。心配を胸に息を切らせながら街中を駆け抜けた。

一キロ近くは走ったであろう。河川敷が徐々に見え始めてきた。

人目を嫌って誘いだすとすれば、きつと河川橋の下に違いない。

そのように目星をつけると朔夜は迷わず数百メートル先に見えるその場所まで再び走った。

くそ…心臓が飛び出しそうだ。

こんなに走ったのはいつ振りか分からない。自分の体力のなさを怨みながらもどうにか目的の場所までたどり着いた。

「はあ…はあ…はあ…」

肩で息をしながら暗い橋桁の側まで近づくと声はしない。

もしかしたら間違えたのだろうか…

自分の勘が外れたことに苛立ちつつ周囲を見回すと誰かの足が見える。

倒れている…

そのように判断するのが速いか、体は動いていた。倒れているであろう人物の元へと駆けつけ様子を伺う。

「あ……」

朔夜の予想は的中した。

55話

そこに血を流して倒れている人物は克哉だった。

意識を失っているようで微動だにしない。

「おい…克哉！克哉！しっかりしろ！」

朔夜は抱きあげると、必死に声を掛けた。

克哉の顔面は殴られ腫れ上がり、唇は切れていた。目に見えるのはそれぐらいであったが、ひよっとしたら歯も折れ、服では見えないう部分が骨折しているかもしれない。

朔夜の数度の呼びかけに反応した克哉は薄っすらと目を開けた。

「さ…朔夜か…」

腫れ上がった瞼の下の眼には朔夜の姿が映っていた。

「お前…もしかして…松陵高校の奴らに？」

朦朧としているが、その呼びかけにも克哉はどうにか答えた。

「そうみたいだ…っ…」

その言葉で朔夜は申し訳なさそうに、頭を垂れて朔夜の肩をぎゅっと握り締めた。

「すまない…俺が…俺の行動が…お前に…迷惑を…」

上手く言えないがどうにか伝えることで精一杯だった。しかし克哉はお前のせいだとは言わなかった。

悟ったような感じで逆に笑っていた。

「久しぶりだな…こうやって話すのも…」

そんな些細なことだけで朔夜は救われた気がした。

ぎくしゃくしてしまった関係をいつまで続けるかも分からなかった。自分から克哉には歩みづらい。でもどこかまた元のような関係に戻りたいその一心はあった。だから不謹慎ではあったが笑みがこぼれてしまいそうだった。

「おい…冗談言ってる場合じゃないだろ。大丈夫なのか？」

「いや…大丈夫じゃない…体のあちこちが痛い…」

「あ…その…悪い…」

「さつきから謝ってはかりだな…でもよ…俺も自分のことばかりしか考えないでお前の気持ちなんか考えてなかった…だから…俺もお前に謝りたかったんだ。お互い様って形じゃないが…その…すまない…」

そんな素直な気持ちが朔夜に伝えられると、今まで味わったことのない絆の深さのようなものを感じた。

「お前の方が損してばかりじゃないかよ……」

俺が今まで築いてこなかったものが、こんなにも大切なことだったのか……

そう気づかせてくれた克哉に心から感謝をする。しかしそれと同時に克哉の体の具合も気になった。すぐに病院に行かなければならないのは間違いない。

「おい……立てるか？」

肩を持ち上げ立たせようとするが、克哉は自分で立てると言い、ゆっくりと立ち上がった。

「病院まで一緒に行くか？」

「いや……一人で行く……それよりも……お前……大丈夫か？あいつら……やたらとお前に固執しているようだからな……怨むならお前を怨めって言われたし。だから……美羽も心配だ」

美羽の言葉を出されたが、朔夜にはどうすることもできない。自分は今から優亜に会いに行こうと思っていたのだから。

そんな矢先に朔夜の携帯が激しく鳴る。

56話

一時間前

庄司は美羽を強引に自分の隠れ場に連れ込んでいた。

「離してよ！この前のことなら済んだでしょ。他の奴らから金を取ったんだからもう、いいはずでしょ。それに…あんたら…私が警察に駆け込めばただじゃ済まないことぐらい分かってるでしょ！」

自分の立場が分かっているいなぎやあぎやあとうるさく話す美羽に、庄司は迷うことなく裏拳を頬に叩き込んだ。

拳の裏を使ったのはそれなりの配慮だったのかもかもしれないが、この男の拳を顔で受けたのだから美羽は鼻から血が噴出した。

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐ…」

悲鳴を上げることも出来ずにくんと崩れ落ちた。

「おい…お前、立場分かってんのか？こつこついう行動に俺らが出ている時点で、そんなこと考えちゃいねえんだよ…」

この男…怖い…

美羽が初めて体験する恐怖は庄司の存在そのものだった。かたかたと全身が震えていた。

ぐいっと髪の毛を引っ張りあげられると、汚い椅子に座らされた。

「お前…朔夜を知ってるよなあ…高崎朔夜だ。最近仲良くなったんだろ？」

「…」

まともに庄司を見られなかった。

「お前みたいな害虫がどうやって朔夜と知り合ったかはどうでもいいんだがよお…朔夜に会いたいんだよ」

「え？」

「あいつの過去の話は知ってるよな。俺と同じように人の道を踏み外した奴なのに…今はどうだ？羊の皮を被ってやがる…進学校に入学？普通の友達？意味分かんねえよ。どうしてこうも人間が変わってしまったのか知りたくてよ…手っ取り早くあいつの周りの人間を傷つけてみたくなった…」

「あんだ…朔夜とどんな…関係があったの？」

「二、三度やりあったこともあったなあ。本当に殺す勢いつてのを感じたのは久しぶりだったからな…驚きと嬉しさがあったよ。こいつは俺と同じだったな…」

屈折した共感を持っていたが、自分と同類の人間がいない中で朔夜の出会いはそれだけ衝撃的だったのだ。

庄司は朔夜と同じような幼少期を歩んでいただけに人間がおかしくなった。

未婚の母に育てられ、次々と変わる父親…中には暴力を振るう者も多く、弱い存在の庄司には抵抗する術はなかった。

だから…心の奥底には常に「いつか必ず」という気持ちがあり、非力な少年の憎悪を育てていたのだ。

小学校の高学年に上がる頃には、そんな非力な自分ができることは武器を持つことだと知った。

いつものように訪れる父親面した母親の男が来るのを待ち構えると、思い切り木製のバットを頭に振り下ろした。

鈍い音と共に男の頭から血が流れ、その場に倒れた。普通それだけで自分のしたことに満足してしまいそうだが、庄司は違った。無抵抗な人間の両手両足に容赦なく追撃を叩き込んだ。

幸いその男は死ぬことはなかったのだが、両手両足骨折、頭部にもヒビが入っていた。報復に来るかとも思われたが、躊躇のない庄司の行動が思い出されるだけで、男は身の毛がよだっていた。だからそれ以来、その男は庄司の前にも母親の前にも現れなかった。

庄司はそこで学んだ。やるなら徹底的にやらなければいけない。自分が怖い思わせるくらいやらなきゃ駄目なんだと。

中学に上がると、体が大きくなったことで自分の拳だけでも十分誰とでも渡り合えた。

武器を持たなくても大丈夫になった。

そんな中で出会った朔夜には自分と重ねてしまふことがよくあった。

その理由の第一に殺す勢いという者を持っている唯一の存在だったからである。「殺すぞ」という言葉は簡単に口にできるが、実際に殺すという感覚までは易々と抱けない。殺意がそこにはないのからだ。

しかし朔夜も庄司も言葉で語るのではなく、暴力そのもので「殺す」という本質を語っていた。周囲の人間は当然その光景を目の当たりにして恐怖心を抱き、自分たちとは違う人間だと教えられた。止めなければきつと殺している…そんな現場を何度も見ていたからだ。

だから許せない。どうしてそんな簡単に殺伐とした重苦しい過去を捨てられる…自分の性格を律することができる…

嫉妬のような感情が自然と湧き上がり、朔夜をめちゃくちゃにしてやらなければ気が済まなくなったのだ。

57話

「あいつだけ、負の連鎖から抜け出そうだななんて卑怯じゃないか？だからよお…俺はあいつに試練を与えてやろうと思ってるな…」

この男が話すだけでまともな試練でないことは美羽にも分かった。

「友達の克哉だったかな？今頃俺の仲間にも半殺しにされてる。ひよつとしたら死んでるかもな…そしてお前の体も数時間後には見るも無残なくらいにぼろぼろだあ…それを見てあいつがどう反応するかなあ…」

弱みを握れたことで優位に立てたことを無邪気に喜んでいた。

「とりあえずあいつに電話掛けるよ…電話番号ぐらい知ってるだろ？ゲーム開始の合図を出してやるからよお…それにお前の泣き叫ぶ声が聞こえたらリアリティがあつていいだろ？」

にやりと笑いながら美羽を見下した。

この男は本気だ…

美羽も悪事に手を染めていた人間だからはつきりとその人間の本质…善悪、本気が嘘かの違いが分かった。

庄司に見えるのは、本能に忠実なまでのむき出しの欲望しかない。しかも破壊と破滅。それを望んでいる。誰がこんな人間に逆らえようか…

朔夜と会わせては絶対に駄目だ。そう直感したのか、携帯を出すのをためらっていた。

「おらあ！さつさとやれよ！」
容赦なく二度目の裏拳がごつんと美羽の頬に当たった。

「うう…」

顔面から再度鮮血が飛び散り、激しい痛みと共に頭の中はちかちかしていた。それでも美羽は携帯を取りださなかった。

逆に庄司を睨みつけて抵抗した。

「嫌だ…朔夜を巻き込むことはできないもん。私…馬鹿だからいつも朔夜に迷惑ばかり掛けてた…でも…でも…ここでまた頼りことなんかできない」

美羽は美羽なりに自分の気持ちに整理を付けていた。克哉に会ったことでそれができたのだ。朔夜の幸せを壊させない。もう彼には頼らない。そんな意思の表れが言葉になって出ていたのだ。

しかし庄司は面白くない。恐怖に怯えて何もできないと思っていただけに美羽の行動がうざったい。

「あんとと朔夜は違う…だって…朔夜は前を向いて生きている。自分なりにもがき苦しんではいつくばってね…でもあんたは…狭い世界でしか生きれない。前に進まず…ずっと同じ場所にいるんだ。居心地の良い場所に！」

黙って聞いていたが、馬鹿な女が説教を長々と話すことに腹を立てた庄司は前蹴りを容赦なく腹部に叩き込んだ。

「うう！」

椅子が後ろに倒れ、美羽に体も背中から地面に落ちた。それと同時にポケットに入れてあった携帯が飛び出し地面を滑った。

「うぜえんだよ。お前…耳ついてんのか？…たく…面倒くせえな…」

その携帯を拾い上げると、開いて朔夜の番号を探した。

「朔夜の番号は…」

かたかたと携帯の中を見ている庄司の背中に美羽が全体重を乗せてぶつかった。

「お…」

その拍子に庄司は携帯を落としてしまった。そしてそれを見た美羽は、その落ちた携帯を思い切り踏みつけた。壊すつもりでかかると力を十分入れて、何度も何度も…

「てめえ！」

それを見た庄司は我慢も限界とばかりに、本気の一撃を美羽の頭蓋に放った。

がくん…

美羽はその一撃で完全に気を失い、動くこともできずにその場に倒れてしまった。

「ちっ…誰かその女縛っとけ！」

落ちた携帯を拾い上げ、開いてみると画面にヒビが入ってはいるものの起動はした。

それを見るなりにやりと笑みをこぼしながらそのまま自分で電話を掛けた。

58話

見慣れない番号に戸惑うがこのタイミングで掛かる電話といえはきつと何かがあるとも感じた。

だからあえて出た。

「もしもし……」

すると低い男の声が電話口から聞こえた。

「おおい……朔夜あ……俺だよ。覚えてるだろ？昔の友人だ……」

名乗ることもしないで、その男は自分の存在をアピールした。しかし朔夜はその声だけでそいつが誰かはつきりと分かっていた。

「ちっ……やっぱり庄司……お前か、克哉をこんな目に合わせたのはよ……」

ぎりつと奥歯をかみ締めた。

「はははは……何だ……もうお宝探し当てたのか？あいつらには人目のつかないところに捨てとけて言ったのによお！……こんな簡単に見つかっちまうんじゃ興ざめだなあ……」

「お前……何がしたいんだ？俺が目的なのか？それとも美羽か？」

「そう言われたら……お前だな。だけどよ、あの女も俺らを散々こけにしてくれたから報復の対象にはなってる……そこでだ。両方の問題

を解決させるためにとりあえず女を拉致ってみたよ」

「何だと!」

「さあ、ここでゲームだ…お前が美羽を見事探し当て助けることができたらお前の勝ち。もしも無理なら…美羽が…どうなるかは俺を知ってるお前なら分かるよな…」

「貴様…」

「ヒントはやらねえ…まあせいぜいがんばりな…かなりの確率で、ずたぼろの酷い状態での対面になるかもしれないけどよぉ…はははははははは」

そう言っって一方的に電話を切られると、朔夜は携帯を握りつぶすような勢いで握り締めた。その様子を見ただけで克哉は気づく。美羽の身に何かがあつたのだと…

「おい!朔夜…美羽に何かあつたんだな…」

「いや…その…」

「あつたんだろ?」

「…」

「朔夜…俺はいいから美羽を助けてくれよ。お前の力ならそれができるとだろ?」

懇願にも似た言葉でぼろぼろの体のまま朔夜に詰め寄った。

「しかし…俺は…」

そんな資格がないといった感じで、どこか躊躇う姿に克哉はしびれを切らしたようで怒りを露にした。それはまるで克哉ではないような荒々しい口調だった。胸倉を掴んで力の入らない手で必死に握っていた。

「おい！いつまで悩んでるんだよ！」

朔夜の目は点になる。こんな克哉の姿を見たことがないからだ。それにいつ倒れてもおかしくない状態だった。

「お前は…本当は…美羽が好きなんだろう？それを隠してる…いろんな体裁を気にして…俺に遠慮して…誤魔化して…」

まるで隠されていた朔夜の心を暴くかのように次々と話す。自らが叶わなかったその気持ちを託すかのように…

「俺は本気だったんだ。はっきりと気持ちも伝えた…でも…駄目だった。けどよ、だからってお前を怨んだりするかよ…それよりもお前が自分の気持ちを押し殺していることを俺は許さない。いい加減…純粋な気持ちで…頭ん中でいろいろ考えてないで…動けよ！お前の……本当の気持ちでよ！」

今言わなくていつ話す。嫌われたままでも構わない。軽蔑してもいい。そんな気持ちで克哉の全てを吐き出した。しかしそれは朔夜の心を動かした。

自分の体裁ばかりに縛られ本心を隠そうとしていた朔夜の深層心

理にきつかけとなる一撃を与えたのだ。

「克哉…」

克哉の言葉で朔夜の心にずっと引つかかっていた何かが吹っ切れる。

「悪い…俺…行くわ」

朔夜の体は無意識に勝手に動き出し走っていたのだ。傷ついた克哉をその場に残し必死に河川敷を駆け上がる。

「朔夜…頼む…」

そんな朔夜の背中を見守る克哉の表情はほっとしていた。朔夜の本当の心を気づかせることができたことで満足だったのだ。

59話

朔夜はそのまま街中を駆け抜ける。

俺は…嘘つきだ。

何度も言い訳をして、目を背けて、なかったことにしようとして…

回想しているんなことが頭の中で浮かんでいた。いつも側には美羽がいた。わざと嫌がる素振りを見せても本当はかまいたかった。話を聞いてほしかったんだ。そして自分の本当の気持ちを話せたのも彼女が初めてかもしれない。

それなのに俺は卑怯な男だよ…優亜のやさしさで無理やり美羽を消そうとしていた。

くそお！そうだ…そうなんだ…

走る足には力が入り、あてもなく走る。

どこに美羽がいるのか分からないのに…

「俺は…馬鹿だ…大馬鹿野郎だ！くそっ…今になってこんな簡単なことに気づくなんてよお…」

失って知る美羽の温かさ…

この時ばかりは優亜のことは頭の中からすっかり飛んでしまっていた。

そんな勢いのまま街中を走り松陵高校の生徒のたまり場である街はずれの一角まで最短距離を目指した。

過去の自分の力が徐々に戻っていくような気すらして、活力が自然と湧いてきた。

そして松陵高校の生徒のたまり場に行くと、予想通りにそこには悪そうな男が五人そろって煙草をふかしながら談笑を交わしていた。

そんな場所へ息を切らして朔夜が登場したものだから視線は一度に集まる。

「何見てんだお前：俺たちに用か？ああ？」

一番体つきの良い男が朔夜に不用意に歩み寄ると、朔夜は迷うことなく拳を刺すように腹部に叩き込んだ。

腹筋を貫くような衝撃が走ると、声を上げることなくその男は崩れた。すると、それを見てその場にいた全員が朔夜に慌てて襲い掛かった。

四人に囲まれる状況になる前に朔夜は対面する人間を一人ずつ撃破した。拳をかわし、蹴りをかわし、無駄のない最小限の動きで四人の男を手玉に取る。

所詮、素人の喧嘩は勢いしかない。

構えもない動作から繰り出される大振りの一撃は追撃に耐えられない。

崩れた体勢に的確に自らの凶器である拳を叩き込み悶絶させた。

「ぐぐぐぐぐぐぐ」

そして意識のある一人の男を無理やり掴み上げると、

「庄司はどこにいる…答えろお！」

普段の穏やかな表情から一変し、鬼のような形相で睨んだ。

「知らねえ…俺らはいいつとは学年も違うし親しくない。だから…
何してるかなんて…」

苦痛に歪んだ顔のまま必死に答えた。

「くそ！」

的が外れて朔夜は焦りながら、次の場所へと向かった。

松陵高校のたまり場はどこだ…

まるで獲物を探すかのようにあちこちを駆け回り、見つけた男を
理不尽に殴り倒した。

過去の自分に戻っていく感覚はしていた。

解き放たれた野獣は迫られる時間に追い詰められ強暴さをどんどん増していく。

そして四回目の松陵高校の生徒との対面でようやく有効な手がかりを聞き出すことはできた。

「うう…高校側の…廃墟倉庫だ…そこがあいつらの居場所だ…」

顔面を殴打されて薄れ行く意識の中で男がそう話した。

周囲には三人の人間が朔夜に倒され転がっている。そんな奴らを気にも留めずに朔夜はまだ走り出した。

数回の喧嘩で無傷とはいかない。多少の怪我もしていた。それに走り続けているのだから体力の消耗も相当だった。足が普段の何倍も重くなり、自分の足ではないようだった。

だがそれでも走った。美羽の身に何か起こったことを想像したくないために…

時刻はもう既に優亜と会う時間を過ぎ去り、夕方になっていた。しかし今の朔夜にはそんなことはお構いなしだった。

60話

松陵高校から数百メートル歩いたところに、工場の倉庫跡地が存在した。老朽化したその建物は屋根や壁の至るところに錆びて穴が開いている。

広さは体育館並みにあり中の様子が分からなければ、音も聞こえないので、数人で集まりふざけたり、悪さをする場所には最適だった。

庄司はそんな場所をよく利用していた。

邪魔な存在に制裁を加えたり、金をむしり取ったり、武器を隠したり…と悪の巣窟と呼べるものだった。

そんな中央で美羽は椅子に縛り付けられていた。庄司から受けた一撃で気を失っていたが、目覚めていた。しかし騒ぐと面倒なので口には粘着テープがつけられていた。

「おい…あれからどのくらい経った?」

庄司が側にいた男に聞いた。

「二時間ですかねえ…」

時刻は四時を回ろうとしていた。

「そんなに経ったかあ…いい加減飽きてきたな…くくく…疼くなあ…そろそろこいつもずたずたにしたくなってきたよ…」

庄司はこれでも我慢していた方だった。朔夜がここに来るのではないかという期待感があつたからだ。しかしそれも時間と共に薄れていく。

退屈してきた庄司は苛立ち、その怒りの矛先を美羽に向けようとしている。すると、そこにいた一人の男の携帯が鳴った。

「え？ああ…何だと…本当か？」

ただ事ではないような様子で話していたが、庄司は関係なさそうに美羽を見つめて近寄っていく。そしてゆっくりと手を伸ばして体に触れようとした瞬間、電話を受けた男の言葉で止まってしまふ。

「庄司さん！奴が…こっちに向かっていているらしいです。何でも…うちの生徒十数人やられて吐かされたらしいです」

「十数人を一人で？」

その報告を朗報のように庄司は喜んだが、周囲の人間は得体の知れない恐怖に襲われている者がほとんどだった。

「くくく…お楽しみは後つて訳だ。命拾いしたなあ…」

美羽のことを舐めるように見ると、美羽の背筋は凍っていた。それと同時に朔夜が何故ここに来るんだ？と怒りにも似た疑問を抱いていた。

私など無視すればいいじゃないか、恋人のことを考えたらそんなことしなくてもいいじゃないか…

そんないろんな人間の想いや考えの中、朔夜は突如派手に姿を現した。

ばぁぁん

鉄製のドアを叩き自分の存在を周りに知らせる。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

服にはいたるところに血痕がついていた。自分の血であり、相手の血である。そして打撲のあざ、切り傷、擦り傷は当たり前のように体のあちこちに見られた。つまりぼろぼろに等しい状態だった。それに走りっぱなしだったので、息も切れていて今にも倒れそうな様子である。

「美羽…」

数人の男に囲まれたぼろぼろの美羽が目の中に飛び込み朔夜の脳内は沸点に達しきれそうだった。

その中心には自分の忌み嫌った男、高槻庄司がいつものように人を見下す目で朔夜を見ていた。

「久しぶりだな…朔夜あ。約二年振りか？会いたかったぞ？」

「庄司い…やはり…貴様か…」

声でしか聞いていない庄司だったので、実物を目の当たりにしてようやく実感が湧いた。

こいつはこんなことを躊躇せずにやってくる男だ…と。

「どうやら平和ぼけしてるみたいだな。一体どうしちまったんだよ？あの凶悪で凶暴ですぐにでも噛み付いてきそうなお前がよお…その面見ただけでも分かるぜ、完全に牙が抜けちまつてる。割り切つて大人にでもなったつもりか？社会の秩序だの法律だの人間関係だの考えてよお。そんなちんけな人間じゃないだろうが！こつち側の人間のくせによお…心に大きな闇を抱いている人間はそんな簡単に更生できねえんだよ。俺は結構お前のこと評価してたんだぜ？初めて自分と同じ存在だと思える人間だつてなあ…だけどよ…こいつも言うんだ、お前と俺は違うつてよお…何度も何度も俺の存在を否定しやがつて…」

美羽を指差してそう話した。

「人の話無視してそんなことばかり話すからうざくてよ…つい、ぼこぼこにしちまったよ。ぎゃはははははは…」

高笑いが倉庫内に反響する。それは気持ちの良いものではなく、朔夜にとっては抑えていた怒りを増幅させるきっかけ以外の何物でもなかった。

61話

わなわなと体を震わせ憎悪で全身が覆われそうだった。しかしそれを必死に押さえていた。昔の自分に戻るのは絶対に嫌だと無意識に体の中で抵抗していた。

「はあー…前のお前なら…仲間にかとも期待したんだが…そのなりじゃあ、全然駄目だな。人を圧倒させる雰囲気も感じないしまだ甘さも感じる…」

飛び掛ってこない朔夜をよそにどんどん挑発する。

「そんな無様な朔夜の姿なんかこれからも見たくないからなあ。だからよ…いつそのこと俺が過去の栄光ごとお前を絶望に叩き落してやるよ！」

そこまで話すと、回りにいた人間に朔夜を襲わせるように指示を出した。そしてようやく待たされたうつぶんを晴らし暴れられると周りの人間は一斉に襲い掛かった。

その数十三人。

無抵抗な人間一人に掛からせる人数ではなく、一方的なリンチでしかない。

朔夜の体は限界に近かった。喧嘩というものは持久戦ではない。何キ口も走り移動しながらの喧嘩で体力の底をついていたのだ。

向かってくる相手に対してどう反撃したらいいのか考えたが、思

い浮かばなかった。思考すらまともな判断を下していないのだ。

だから数で押し切られる。朔夜が拳を振るってもぞくぞくと後続の人間が襲い掛かるからである。

だからほとんど何もできずに顔面に拳を叩き込まれ、蹴りを入れられ、木材や鉄パイプでも追い討ちを掛けられた。

骨が軋み、体は悲鳴を上げ、血しぶきも舞い上がる。しかしどれ一つとして朔夜以外の人間のものではない。

その光景を見ていた美羽は涙を流していた。

自分のせいだ…自分のせいだ…うああああああああああああああああああああああああああああ。

ずっと自分を責め続け、縛られた椅子をがたがた揺らしてもがいていた。

解ける！解けるよお！

しかしそう簡単に縄は解けない。声も上げることができない。

これ以上見るのは辛くて、耐えられない。自分が変わってやりたかった。

数秒が数時間に思える拷問。

そして朔夜は地面に無様に転がると動かなくなった。それを見た庄司の興奮は絶頂に達する。

「はははははあ…おいおい…かつて最悪、最強とまで言われた暴君がこの様だよ。全く情けねえなあ…はははは…こりゃいい…」

朔夜は意識があるのか、生きているのかそれすら分からなかった。

朔夜の周りだけしんと静まりかえっていた。朔夜を殴っていた男たちも殴るのを止め、少し距離を置いた。

「なあに。こいつが死んでも誰も悲しみやしねえ。散々悪さしてきたんだからよお…それよりもこの女も殺さない程度にぼろぼろにしてやれ。朔夜だけじゃあ可愛そうだからな…」

そう話すと獣のような男たちの目は爛々と輝いていた。朔夜を血祭りにあげたことで興奮は最高潮に達していたのだ。

ようやく許しが出た…こいつも好きにしてもいいんだ…

そんな男を見ても美羽は怯まなかった。涙を浮かべながらも睨みつけていた。

ちくしょう！お前ら殺してやる！絶対殺してやる！

そう訴えかけていた。

しかし男たちは獲物を見つけたハイエナのように自分に群がろうとしていた。

庄司は参加しないであくまでも高みの見物をしている。これからどうやって美羽がいたぶられるのか楽しみだと目を見開いて眺めよ

うとしていた矢先、その期待は壊される。

ずり…ずり…

背後から地面を擦って歩く音が聞こえた。

まさか！

そう思い、振り返るとそこには血だらけの朔夜が亡霊のように揺ら揺らと立っていたのだ。

顔面は腫れ上がり、血だらけでその表情が読み取れなかったが、今までとは違う空気を身にまとう。

ぞくり…

どんな強者に出会っても危機に直面しても震えることのなかった庄司が初めて悪寒を感じた。

「じ…こいつ…」

嫌な汗を流して朔夜の行動を見守る。そしてその場にいた全員の視線を集めた朔夜はぶつぶつ何かを呟いていた。

「助ける…んだ…俺が…お前を…」

その眼光に力が宿る。物の怪ではないが、目の色が赤く染まるかのごとく禍々しい威圧感を与えた。

「殺せ…殺せえ！そいつは息の根止めなければ、何度でも来るぞ！」

庄司は自分が一瞬でも恐怖してしまったことを誤魔化すかのよう
に大声をあげて指示を出した。

美羽で楽しもうと思っていた男たちは、死にかけの朔夜を目の前にして、やる気のない様子でゆっくりと近づいた。

すると、朔夜は虚を突く。臨戦態勢の整われていない目の前にいた男の顔をがっと思ひと足を引っ掛けた後頭部を地面に思い切り叩きつけた。頭蓋が割れてしまわんばかりの力で……

轟音と共にその男は動かなくなった。

それをきっかけに朔夜の中で何かがきれた。押さえていたものを吐き出したのだ。

それは紛れもなく人を殺す意思。殺気そのものだった。

それを見た男たちは一瞬怯んだ。恐怖からであろう。それを朔夜は見逃さない。

落ちていた鉄パイプを素早く手に取ると右の男の顔を躊躇することなく殴り、左にいた男ののどに後ろ蹴りを入れた。どちらも何もできず崩れて落ちる。一人の男は頬の骨が砕け、もう一人はのどを潰され悶絶していた。

本気で殺す勢いである。

人を集団で殴るといふ行為には殺意がない。誰かがやるからやっている。別に死にはしないだろ？そんな程度である。

だからそこにいた男たちは生まれて初めて自分が殺されるという危機に直面したのだ。

目の前の惨劇を見て庄司か同等かそれ以上の恐怖を感じ、体もいつも通りにすんなり動いてはくれなかった。

反対に朔夜はその弱い心を食い漁る獣のように攻めてきた。

恐怖に耐えながら襲い掛かる男を手玉に取るのは容易い。体が固いから大振りもするし、判断が遅い。それを避けると急所を狙った一撃を容赦なく叩き込んだ。後頭部であり、金的であり、みぞおちであり、人体で鍛えられない箇所を躊躇することなく狙って攻撃した。そして十三人いた人間もあつという間に五人に減ってしまった。

「つく…はあ…はあ…はあ…」

血まみれの朔夜はまるで人には見えない…本能むき出しのまま邪魔な存在を駆逐する化け物だった。

五人の男たちは誰が先に朔夜に襲い掛かるか顔を見合わせてしま
う。

「これは…お前らが…望んだことだろう？なあ！」

不適な笑みを浮かべて睨む朔夜は立場の全てを逆転させたのだ。

だから残る五人は当然の如く戦意を喪失させ、その場から逃げた。

「ちっ…」

そこに残ったのは庄司ただ一人となったが、庄司は先ほどの恐怖心を一時の迷いとばかりに拭い去り自然体を装っている。

「ようやく昔の自分を取り戻したのか？どうよ、気分は？本能の赴くままに人を破壊する感覚は気持ち良いだろ？所詮：隠したってお前は俺と同じなんだよ。でもよぉ…これだけは違っってはつきり言えるぜ」

朔夜が庄司にすぐ触れられる場所まで近づいた刹那、庄司は鋭く速い蹴りを朔夜の顔面に入れた。

「ぐふうっ！」

大きい体格からは想像がつかないぐらいの速さで振りぬく刀身そのものである。

「俺の方が強いってことだよ！」

朔夜はもろにその攻撃を受け、後方へ転がりながら吹き飛ばされた。

「殺意を持った攻撃ってのは俺にもできるんだぜ？」

庄司はそのまま朔夜に走って近づき、反撃の間を与えないように追撃した。

拳で足でぼろぼろの朔夜を殴り、蹴り上げ追い詰める。

「打たれ強いってのは褒めてやるよ。だがなぁ。これで終わりだよ！」

とどめとばかりに大きく右の腕を後頭部に向かって振り下ろした。脊髄を的確に狙い、砕かんばかりの鋭さだった。しかし朔夜はその僅かな隙を見逃さなかった。

大振りになった攻撃を半身でかわすと、そのままの流れに身を任せ右腕を掴むと逆の方向に思い切り捻った。

「ぐうああ！」

体勢を大きく崩した庄司は腕をねじりあげられたまま地面に顔を擦り付けた。

それと同時に激痛が肩と肘に入る。

肩が脱臼し靭帯がねじ切れたのだ。そして朔夜の猛攻はそれだけではなかった。そのままの勢いのまま膝を庄司の顔面に刺すように叩き込んでいたのだ。

「があ！」

鼻骨は折れ、意識を刈り取るには十分なほど脳を揺らした。

強靱な肉体を持つ庄司とは言え、脳までは鍛えられない。だからそのまま屈服するような形で倒れてしまった。

びくびくと痙攣しながら動かない。それを見た朔夜は肩の力を抜いた。

「はあ…はあ…はあ…」

やっと…終わった…

朔夜は憑き物が落ちたような穏やかな表情に戻り、ゆっくりと立ち上がると美羽を見た。

美羽の目からは涙がとめどなくあふれている。そこまでして自分を守る理由が分からなかったからだ。

朔夜はそのままゆっくりと美羽の元へと歩いた。動くことすらままならない男の一步はかなりの時間を要したが、それでも前に進む。

そんな時、後ろから声が響き渡る。

「さ…さくやあ…」

たった二つの攻撃で戦えない状態にされた庄司だった。

精神力だけで立っているのは朔夜も同様だったが、庄司は左手にナイフを握っていた。

「お前だけは…殺す…ここで…」

常軌を逸した目をしていた。それは、もう庄司は朔夜を殺すことしか考えていなかったからだ。ぶるぶると手を震わせながら朔夜を怨んだ目で睨む。

63話

朔夜は正気に戻り改めて庄司をはっきりと見ることができた。

何て醜い姿なんだ…本能のままに生き、中身が空っぽで臍の存在…

その姿を過去の自分と重ねてしまう。自分は気づくことができたがこの男はいつ気がつくのだろうか？

そんなことを考えていた。

「庄司…もう止めにしないか？こんなこと続けて何になるんだ？お前だって…もう分かてるんだろ？空しいだけで不安な毎日…無限に続く焦燥感…」

庄司の動きがぴたりと止まった。

「俺は…もう…そんな世界から抜けたんだよ。二度とごめんだ…あそこに戻るの…だからお前も早く抜け出せよ…」

まるで激励しているかのようだった。

庄司自身も朔夜が話したことを薄々感づいてはいたが、それは口にはできなかった。そのことを口にしてしまったら自分の全てを否定してしまうことになってしまふと思っていたからだ。

だから踏みとどまる。

俺は…これが俺なんだ。と。

「う…うるせえ！そんな戯言俺が素直に聞くと思ってるのか？はは！お前は今の自分に酔ってるだけなんだよ。俺より強いから見下してやがんだよ！」

強がってみたものの心に絡まっている紐がどこか解けた気がしてはいた。

「おらあああああああああ」

全ての雑念をかき消したかった。だから庄司は闇雲に朔夜に突っ込んでいった。

そして左手に握られたナイフは朔夜の肉体を狙っていた。朔夜は避けようとは思ったが、体が反応できない。そのまま十数センチのナイフがわき腹に滑り込んだ。

「ぐっ！」

二人の動きはそこで止まった。

刺した庄司はそのままゆっくりと手を離ししりもちをつくと、ナイフがからんと地面に落ちた。

朔夜は立ったままだった。そして痛そうにわき腹を押さえながら庄司に話しかけた。

「庄司…もう…俺と…美羽に関わるのは終わりにしてくれ…頼む…頼む！」

それは最初で最後の懇願だった。朔夜はさっきまであれほど憎んでいた庄司を許していたのだ。

だから庄司は震えていた。

どうして…こいつは…そこまでできる？

刺したんだぞ？俺を…怨めよ。呪えよ。叫べよ。

その時点で庄司の心は折れた。

朔夜という人間を屈服できないということをはっきりと自覚したのだ。

朔夜はそのままよろよろと美羽の所までくると縛られた体を開放し、全てやり終えたかのように倒れた。

わき腹からはじわじわと血が流れる。

美羽は粘着テープを自分の手で剥ぎ取ると、朔夜を抱きかかえながら声を掛けた。

「どうして！何でこんな無茶するのよお！私のことなんか無視すればいいじゃない」

声を荒げ朔夜に今までの疑問を投げかけた。しかし朔夜はたった一言で全てを返す。

「好きだから…」

「え？」

「気づいたんだ…ようやく…本当の自分に…悪かった…振り回して…」

そして朔夜はそのまま満足そうに意識を失ってしまった。

64話

朔夜が目覚めたのは病室の中だった。

あれだけの大怪我を負っていたのにも関わらず、大事に至らなかったのは不幸中の幸いだった。

丸二日寝ていた朔夜自身、目が覚めて自分が生きていることに安堵していた。それから医者がやってくると怪我の具合を説明された。

肋骨三本、左腕骨折。腹部は八針縫われていたが臓器には異常はなかった。

そして全治二ヶ月。入院二週間を宣告された。

「君が何をしてこうなったのかは後で警察が聞きに来るからそのつもりでいてくれよ」

医者はそういい残すと去っていった。

「やっぱりか…」

こうなることも目に見えていたから覚悟していたから取り乱しもしなかった。

あの時、自分はこうなってもいいと決めたのだから仕方がない。そう割り切っていた。

それからしばらくして医者の話したとおりに警察関係者が足を運ぶと、朔夜にあの時の状況を根掘り葉掘り聞かれた。

嘘をつくことはせず、素直にあったことを話した。すると警察も深く追求することもせず、ありのままのことを話した。

「確かに君は被害者だと思うが…君にやられた者も相当の怪我をしているからねえ…一歩間違えば死んでる者もいる。それでだ…過剰防衛という見解もあるから完全に無罪とは今のところ言えない。でも、安心しなさい。そこまで深刻な状況じゃないから…」

「はい…」

そんなにしつこく聞かれることもなく、そのまま警察はまた来るよと話して帰っていった。

その後からは施設長が朔夜の元に現れ、容態を気にしたり学校の教師もいろいろ聞きにきた。

「疲れた…」

動けない状態で普段会わない人間に会って話すのは予想以上に精神力を奪う。朔夜はぐったりして夕方の赤い空を窓越しに見ていた。

すると、ドアをノックする音が聞こえた。

またか…そんな気分で気持ちの入らない返事をするとうちのドアが開いた。

「あ…」

そこにいたのはあの日約束をすっぱかしてしまった優亜だった。

「あの…その…」

突然の出来事に頭の中は真っ白になり朔夜はどのように声を掛けたいのか分からなかった。

「朔夜くん…大丈夫？」

「う…ああ…まあ、その大丈夫です…」

気まづくなつてか何故か敬語になってしまっていた。この時朔夜の頭の中には間接的に優亜を振ってしまったことの罪悪感もあったので、自分の言動がおかしくなっていることにも気づかなかった。しかしそれより優亜は本気で心配していた。まさかこんな状態に朔夜がなっているなど考えもしなかったから。

「聞いたよ。友達の克哉君から…」

「え？あいつから？何で？」

詳しく聞くと、克哉が気を利かせて優亜にもどうにか連絡を取ったらしく優亜は来たようだ。そしてあの日の出来事も話してしまったらしく朔夜が自分を選ばなかったことも分かっていた。

「あの…私ね、外国に行くこと決まったから。それで…今日はお見舞いと一緒にさよならを言いに来たの」

「…」

「何も言わないでお別れつても寂しいでしょ。私も…朔夜君に会ってから外国に行きたいし…」

気まずそうに話していたが、朔夜のことを必死に振り切るうとがんばっているからそんな態度になっってしまう。

優亜は涙は見せない。そう決めていた。だから気丈に振る舞い弱い自分を隠し通す。

「だから…その…今までありがとうね」

そう言って笑ったまま右手を差し出した。握手を求められたのだ。朔夜はその手を固く握ると激励の言葉を口にした。

「こんな俺に言う資格はないかもしれない。でも…優亜…君ならきっと自分の夢を叶えられる。俺は…俺なりにがんばるつもりだ。だから前を見続けてくれよな」

「う…うん！」

優亜はきつと泣きたかったのかもしれない。必死に笑顔で隠していたが、口元がふるふると僅かであったが震えていた。

「朔夜君も…がんばってね」

朔夜に感づかれることはなくそのままやり過ごして部屋を出ることができた。足取りはどこか駆け足になっていた。

そして出てしばらくすると、こみ上げるようにいろんな感情が優

亜を襲い遂に押さえることができずに泣き崩れていた。

出会いも別れもその人間にしか分からない特別な存在である。優亜もそこで特別な別れを初めて体験し、心を痛めていた。しかし朔夜を恨むことはしない。自らの気持ち伝えるだけ伝えることができた。

だから悔いはない…

涙を拭い立ち上がると、背筋をぴんと伸ばした。すると不意に吹く風は弱った優亜の背中を押すかのように暖かく優しく包み込んだ。前に進もう…

新たなる決意の元、優亜の足取りは誰よりも力強かった。

65話

朔夜は身動きの取れないまま物思いにふけていた。動けないことは逆にいろんなことを考えてしまい気分を暗くしてしまう。

自然とため息も出ってしまった。

すると看護婦がやってきて検温時間だと体温計を渡した。

「そういえば…あなたのことずっと心配して部屋の前で待っていた女の子…今日もこれから来るんじゃないかしら…」

時計を見ると夕方の五時を指そうとしていた。

「あなたも手術終わって目が覚めたばかりなんだから来ても長居させちゃ駄目よ」

そう指摘されると看護婦は体温計を受け取って部屋を出た。

その数分後、さっきの看護婦の言った通り美羽が会いに来た。

何度か訪れたこの病院にも慣れたようで迷うことなく朔夜の部屋までたどり着く。以前なら病室に入ることもできずにただ待つことしかできなかったのだが、今日は面会謝絶の札が取られていた。何度も確認しそれが間違いはないということを受けとめた。

朔夜の目が覚めたのだと解釈すると、気持ちが表れるようにドアを勢いよく開けた。

「朔夜…」

昏睡した状態から目覚めた朔夜は、まだ痛々しい様子だった。しかし美羽は会えたことだけで胸がいっぱいだった。

「ああ…よう…」

恥ずかしそうに返事をするだけで精一杯だった。朔夜はいろんな人間に会い、いろんな話をしたが美羽と会うことが一番気になっていたのだ。

「あのさ…俺も…その…この通りだけど大丈夫だ…だからよ…心配するな」

以前なら意識することもなく、強気の姿勢のまま通せたのだが、そうもいかない。好きという感情が芽生えてしまったから厄介でいつものように接することができないのだ。

そんなよそよそしさを見せないように頭をかいたりして必死に誤魔化した。

「あの日のことだけど…えっと…」

あの日、思考も行動もめちゃくちゃであつたから冷静になった今、どう説明しようか一人うんうん悩んでいたが、美羽がすつと朔夜に近づくとそんないらぬ雑念をかき消すかのよう朔夜の唇に美羽が唇を重ねた。

「…」

朔夜の目が思わず見開いてしまった。

自分の身に何が起こったのだろうか？そんなことを考える余裕すらなかった。ただただ高鳴る心臓の音だけが鼓動して聞こえてくるようだった。

部屋の中は真っ白な空間と無音の世界に変わる。少し開いた窓から吹いてくる風でカーテンがひらひらと揺れて時間が止まっていないうことを知らせているようでもあった。

美羽の温もりを初めて自分の肌で感じ取り、自らの五感が研ぎ澄まされた感覚に陥った。

互いの唇が離れ、顔を見合わせた。

「あ……」

朔夜の顔は赤かった。一方で美羽はしたり顔で小悪魔のような笑みを見せていた。

この時ばかりは朔夜も美羽のことを愛おしくも感じてしまった。

「ありがとう……朔夜」

ささやくように話す言葉さえ朔夜の心を奪ってしまいそうだった。しかしどうにか現実に戻り今までのことを謝る。

「えっと……その……でも……悪かったな。巻き込んでしまった……」

「気にしないよ。全然。朔夜のおかげで今の私があるんだからね。強くなっただ。私……朔夜と克哉のおかげでね」

「そうだな。強くなったな…」

「それでね。朔夜、お願いがあるんだ」

「何だ？」

「私も朔夜と同じように家のことでいろいろ揉めてるの…それをきつちり片を付けたらあなたと付き合いたい」

「家庭と向き合っつてことか？」

「うん…今まで逃げてばかりだったんだけどね。少しでも強くなれた今の自分ならできそうな気がするんだ…だって克哉も朔夜も逃げなかったでしょ？自分から…」

美羽の家庭内のことはよく知らなかったが、朔夜は同じような傷を持っていることは薄々感じていた。そしてそのことに対して向き合おうとする美羽の姿は大きな進歩だとも思った。

最も身近な存在が自分という人間を裏切り否定した時の傷は計り知れない。美羽の負った傷もそう易々と癒えるものではなかったが、本人が変わろうと気づいた。それだけで十分なのだ。

人は…自らの揺ぎ無い意思で動き始めた瞬間、その世界の見方も捉え方も感じ方も変わるのだ。

美羽の見る景色はこれからきつともつと良いものになるはずだ。人生の先輩に当たる朔夜はそんな風にはつきりと感じ取った。

「なあ、美羽。俺も…がんばるよ。今回の一件で退学は確実だろう。でも…他校に移って自分の進む道…生きる道みたいなものを考えようとも思ってる」

まだ十六歳という若さから人生について考えるのは早いとも思えるが、朔夜は一時の感情で酔って話しているわけではなかった。

人の欲や暴力を嫌というほど目の当たりにしてきた彼だからこそ慎重になっていた。きつとこの先漠然と生きてても未来はない。

自分の好きな奴を幸せにできなくてどうする？

「朔夜ならできることも分かってる。だから私もがんばれる…私たち…もう少し大人になったらきつと今の選択が間違いじゃなかったって思えるかなあ？」

「思えるさ…きつとな」

それからその言葉通りに朔夜は学校を退学になった。いくら友人の克哉が教師たちに働きかけ、訴えかけてもその決断が覆ることはなかった。止むを得ない状況であったとしても暴力を相手に振るいその結果、重傷者も数名出ていたからだ。

頭の固い人物ばかりで話しにならないと、克哉は腹を立てていた。しかし朔夜はそんな行動を起こしてくれた克哉にとっても感謝していた。

損得勘定抜きにした人の付き合い。

あいつはきつとこれからもずっと親友でいるんだろうな。そんな

ことを考えてしまった。

66話

一カ月後

八月に入り、最高気温は三十度以上を超えていた。蝉ですら落ちてしまうような暑さに学生もサラリーマンもうんざりしながら学校や会社に向かって歩いていった。

そんな中、朔夜は汗をかきながら引越しの準備を整えていた。

施設を出る日が今日の午後だったので自分の荷物の仕分けをしていた。持っていくもの捨ててもいいものいろいろあったが、物をあまり持たない朔夜の性格も幸いして仕分け作業はそんなに掛からなかった。

ダンボールの中に無造作に服や本を詰め込んでいると晃人が姿を見せた。

「朔兄…本当に行っちゃうの？」

「ああ…」

朔夜がここを出ると話して数日が経ったが、晃人にとってあまり実感が湧かなかった。しかし目の前で荷物をまとめている姿を見ると本当なんだなと切ない気持ちになった。「じゃあ、もう…ここには帰ってこないのかな…」

朔夜との別れが自分にとってこんなに大きなものだとは知らなかった。晃人は冷静に装って本心を隠していた部分がたくさんあったが、

その脆く壊れやすい殻が剥ぎ取られていくような感覚だった。

朔夜の背中を見ているだけで、泣きそうになっていた。

「晃人…」

「え？」

「俺はまたここに来るよ」

「…そんな社交辞令はいらないよ」

「ばあーか。俺が約束破ったことあるか？」

朔夜は嘘をつくことはしない。それだけ自分の言葉に責任を持っているのを晃人も知っていた。しかしこればかりは本当に約束を果たしてくれるのか分からなかったが、朔夜の強い一言でそんな不安も一蹴された。

「俺を信じるよな」

そこに一片の迷いも打算も何もない。純粹な発言そのもので、たったそれだけだったが、朔夜の言葉は晃人の心をしつかりと掴んで離さないそんな力を持っていた。だから晃人も「うん…」とうなずくことしかできなかった。朔夜はそのまま片づけを続け、何枚かの服を手に取り晃人に聞いた。

「俺の着ない服…お前着るか？サイズはちょっと大きいかもしれないけど、お前もすぐにでかくなるだろ？」

チエツクのシャツを手に取り見せた。すると晃人はそれを素直に受け取り着ることを照れくさそうに宣言した。朔夜もそんな晃人の姿を見て嬉しそうだった。

そこで朔夜の仕分け作業は全て終了した。午後には引越し業者の車が施設の前まで来ることになっていた。

ダンボールで三箱。ここに朔夜の全てが入っているかのようにだった。

今まで相部屋だったこの部屋も朔夜の荷物がなくなること妙に広く感じてしまう。

それから朔夜は昼食を取り施設長に挨拶を済ますと、業者の車を待っていた。

「朔兄 今度はいつ来るの？」

小さい子どもたちが無邪気に朔夜との再会の話をしていた。

「俺がもっと勉強して賢くなったらまたここに帰ってくるから期待して待ってるよ」

ぼんぼんと頭をなでてそんなことを話して聞かせた。子どもたちはただ単純に喜ぶだけだった。

そして晃人もその会話を聞いていた。

そこで朔夜は施設の職員になってまた戻ってこようとしているのを知った。

それが朔夜の夢なのだろうか？

晃人には分からなかったが、朔夜の性格を考えたらそれも有得るのだ。だから

「朔兄らしいや…」

そんなことを思わず呟いてしまった。

午後二時過ぎに予定よりも十分早く業者の車は施設前に到着した。予想より早く準備しておいて良かったとばかりに朔夜は荷物を入り口前を出しておいた。

業者の人間は手馴れた様子でその荷物を運び、布団やら饞別でいただいたタンスとベッドを車の荷台に積み込んだ。

「これで全部ですか？」

確認をすると、朔夜はそうですと答えた。

ここでもうこの施設とは別れるということをも本人も感慨深く感じていた。

施設前には全員が出迎えていて、朔夜の様子をじっと見ていた。三歳の幼児から中学生の子まで様々である。いろんな気持ちを抱き、それぞれが朔夜との毎日を思い返しているようでもあった。

遊んでくれたり、馬鹿な話に付き合ってくれたり、迎えに来てく

れたり、ご飯を作ってくれたり、いろんな雑用を嫌がらずに引き受けてくれたり、この施設の良き兄として過ごした日々が心の中に鮮明に浮かび上がっていた。

だから悲しかった。涙を浮かべるものも少なくはない。

そんな中で施設長が先頭に立ち、朔夜に激励の言葉を投げかけた。

「君は私たちの誇りだよ。だから…別れるのは寂しいよ。でもね…君は胸を張って前に進みなさい。そしていつでもここを尋ねてきなさい。我々はいつでも受け入れますよ」

本当の親のように自分を包み込んでくれた施設長の脳裏には朔夜のとの出会い、そして過ごした日々が思い浮かんでいた。よくここまで成長してくれた…その想いが何よりも強く心に働きかけ、涙を浮かべながらも朔夜に微笑みかけた。

そんな施設長の表情を見てしまった朔夜も同様に感情を抑えられない。

そんなに自分は感動もしなければ、別れも普通にできるはずだと決め付けていたから。

それなのに心は揺れ動き、みんなと過ごした日々を思い出すだけでこみ上げるものが朔夜を感傷的にさせた。

「お…俺は…必ずここに…帰ってきます。だから…だから…それまで待っていて…くれませんか？」

涙と鼻水で上手く言葉が伝えられない。柄にもないことをと思っ

ていたが、正直な朔夜の気持ち体が裁を上回る。朔夜は顔をぐしゃぐしゃにしなが自分なりの別れを告げた。

「待ってるさ…君が立派な姿になって帰ってくるその日までね…ここにいるみんなも同じ気持ちだよ」

施設長から最高の激励の言葉をもらい朔夜は新たな一步を踏み出せることを嬉しく思った。

仲間がいたから…自分を愛してくれる人がいたから…自分も人を愛することができたから変わったんだ。教えられることも多く、一人の力では無理なことばかりだった。

そして朔夜は自分のした決断に後悔はなかった。これからも前を見て生きていこう。そんな気持ちだけが残っていた。

「それじゃあ！」

胸を張ってみんなに最後の挨拶をする朔夜の姿は凛々しく後から続くものたちに力を与えた。

そして引越しのトラックはたくさんの人に見守られながら走っていった。

朔夜の未来を祝福し応援するかのよう炎天下の中の道をゆらゆらと陽炎を残しながら突き進む。

67話

「よっ…」

克哉が朔夜に声を掛けた。久しく会う友人だっただけにその姿が変わっていないだろうかとまじまじと見ていた。しかし克哉の期待に沿えるような違いも存在せずあまり変わらない朔夜の姿にがっかりしていた。

「なんだ…もう少し変わってるかと思ったのに」

「何を想像してたんだよ」

「いやあ…太ったりはげてたりしたら面白いかなあーってな…」

「悪いな…ご期待に添えられなくてよ」

今日は成人式だった。体育館に集められた若者がスーツなり着物なり普段着ないような服装に身を包み、どこか違和感を感じさせた。

朔夜はしばらくこの地を離れていたのだが、戸籍はこの地の住所にしてままだったので、ここで成人式を迎えるために戻ってきた。

克哉との再会は実に四年と数ヶ月振りになるのだが、小まめに連絡を取っていたので互いの近況は知っていた。

克哉は超難関の大学に進学をされていて、都会で一人暮らしをしていた。そして朔夜も資格を取るために地方の短期大学に進学していた。

「朔夜：お前：今年卒業だよな。就職は決まったのか？」

「ああ：何とかな」

「就職難の時期によく決まったな」

「そうだな。自分でもびっくりだったんだけどよ。いろんな人の繋がりがあつてな」

「へー：それは良かった。こっちに帰ってくるのか？」

「ああ：春からはここで新生活だ」

来賓の話す長い話を聞き流しながら二人でひそひそと会話していた。勿論、壇上に立つ人物の話が終わると拍手を上空でやった。

それから一時間と少して式が終わると、記念品を受け取り会場を二人で後にした。

「これから飲みに行かないか？」

克哉からそんな言葉を口にした。

「え？お前：酒飲めるのか？」

「まあな：たしなむ程度だけど、大学の先輩に鍛えられたよ」

意外だなと朔夜は思いながらも街に足を進めていた。

成人式のあるこの時期は街中も無意味に混雑していた。

どこを見回しても若い男女がテンション高めになって羽目を外していた。きつとその中に同級生もいるだろうが、関係ない様子で二人は一軒の居酒屋に入った。

席に案内されるとお決まりのとりあえずビールでの注文を済ませた。

「お前がいなくなってからもう四年以上経つんだな…」

「長いようで早かったかな…」

「あの時は学校中で大騒ぎだったからなあ…まさかお前がそんな事件を起こすだなんて誰も予想しなかったから…」

「人を外見で判断してるからだよ」

「はははは…言ってる。俺もまさかお前が不良だったなんて思いもしなかったからな」

そんな過去の話をしていると、冷えたビールが運ばれ話の腰を折った。

「とりあえず乾杯しますか…」

「そうだな」

そしてジョッキをがっつんとぶつけると久しぶりの再開を改めて祝

った。

朔夜は元々酒が強い体質だったのか、ぐいぐいと一気にビールを飲み干した。一方で克哉はそこそこ酒を飲める程度だったので少しずつ喉に流し込んだ。

「こつやって酒を飲み交わすと俺らも大人になったのかなって思うよな…」

「そうだな。俺も昔はいたずらに酒を飲んだり煙草を吸ったりしてたが、あの時は何も面白くなかった。だけど…今は楽しいよ。自分から逃げるような生活でもないし、自分のやりたいことができるからな…こつやって初めてできた友人と再会もできてるし」

「照れくさいなあ…でもよ、嬉しいよ。俺も同じ気持ちだから。とはいっても…俺にはそっちの気はないからな」

「死ね！」

談笑をしばらく続けていると、注文していた食べ物が次々と運ばれ酒も進んだ。

酒が強くない克哉の顔はすぐに赤くなっていた。酔いも回り気分も良くなっていたのか朔夜に聞けなかった質問もつい口にした。

「美羽とは…どうなってる？」

そんな不意をつくような質問に朔夜の飲む手が止まった。

「連絡は取ってる…あいつもあいつでがんばってるらしい」

「らしいって…会ってないのかよ！」

「ああ…」

「どうしてだよ！あれだけのことをしてまでお前守ったんだろ？それなら…」

「そんな単純なことじゃないんだ。あいつの家庭も大変でな…親が多額の借金残して行方くらますわ、あいつも施設に引き取られる引き取られないで揉めるわでな…」

「親戚いないのか？」

「お前も知ってると思うが…あいつの母親は男をとつかえひっかえで育児放棄を平然としている。だから肉親もそうだが近い存在は縁を切ってるんだよ…」

「まじかよ…」

「だからあいつはあいつでいっぱいいっぱいなんだよ…でもよ、悪いことばかりじゃない。あいつも自立することを考えて高校もどうにか卒業して専門学校に進んでる。今年卒業だ」

「何の専門学校だ？」

「富士関係だつて聞いている」

「意外だな…」

「俺もそう思うよ…でも…あいつなりに選択して…それで前に進めたんだから嬉しいよ」

「あのさ…ぶっちゃけた話聞いていいか？」

「何だよ…」

「お前ら付き合っては…ないのか？」

「多分付き合っては…ないなあ。互いの意思表示みたいなものはしたんだけど…まずは自分の身の回りのことで互いに精一杯だったからそれが落ち着くまでは…」

「そうか…」

克哉はそれ以上突っ込んで聞くこともせず黙っていた。すると朔夜は話を自ら続けた。

「今年の春に再会するんだ」

「え？まじで？」

「ああ…未来の方向性つても見えてきたからな」

嬉しそうにそんなことを話す朔夜を見ていた克哉はうらやましそうだった。

四年半もの歳月を会わずに互いのことを想っていられるなど現実的に無理な話だと決め付けていたからだ。そしてたくさんの誘惑やら心変わりといった困難を乗り越え再会することは計り知れない喜

びになっているはずだとも思っていた。

「しかし…お前らが幸せになってくれなら俺はそれで満足だ…」

淡く儂い恋を思い出しながらそんなことを呟いてみた。酔っているせいもあったが、ふわふわしていても良い気分だった。

克哉と朔夜はそのまましばらくの間、安い居酒屋で同じような若者がたくさんいる中、くだらない話を肴に飲み交わした。

三月の終わり、桜が咲き始めた並木道を朔夜は上下一万円程度の安いスーツを着こなして歩く。

その足取りは軽くそして未来を夢見ているかのようにだった。

学校を卒業し就職先に向かっていたのだが、今日の天候はそんな日にぴったりなぐらい暖かくやさしい感じだった。

時計を見るとまだ一時間も早かったが、朔夜には別の目的もあったのでこの時間に通いなれた場所に向かっていた。

歩いているうちに昔の光景が蘇る。

たった数ヶ月の高校生活だったが走馬灯のように回想していた。

克哉と出会い、美羽と出会い、そして優亜と出会った。恋心というものも初めて抱いたし友人もできた。

目の前にはいつもの公園があった。

「変わらないな……」

お気に入りの公園はよく手入れがされており、以前の姿とまるで変わらなかった。

思い出を確かめるように公園内もゆっくりと歩いたが、春休みだったらしくたくさんの子どものせいでそんな気分も少々壊された。

自販機でコーヒーを買くとベンチに腰掛け周囲の様子を見ながら体の力を抜いてほっと一息をついた。

目の前にあった池には鴨の親子がすいすいと泳いでいる。時間がゆっくり流れるかのように朔夜はそんな光景を見ながら何も考えなかった。

すると誰かの手が背後からすつと伸びて持っていたコーヒーに手を掛けた。

「え？」

後ろを振り返るとそこには美羽がいた。

四年半振りに会う美羽の姿はまるで変わりにない。持ち前の明るさが際立つかのように全身に張りが出ている。

服装はどちらかというと大人しくなってしまうのだが、容姿は大人っぽくなりそれなりの化粧を施し、体は以前よりも曲線美がはつきりとしていた。

声だけでは人は分からないものだ。朔夜はその姿に目を奪われ、ごくごくと自分のコーヒーを飲む美羽に掛ける言葉を失った。

「おひさー元気だった？」

そんな朔夜とは対照的に感動の再開をぶち壊すかのような挨拶がされた。

流石に朔夜も怒った。

「お前なあー…もつとこう…感動的な再会の仕方はないのかよ！俺が馬鹿みたいじゃないかよ！」

そんな朔夜を見ても美羽は態度を変えなかった。

「私さ…こういう状況苦手なんだよね。そわそわして待つのが嫌いだし…この方が親しみやすくいいでしょ？ねえ？」

「同意を求められたが朔夜は答えようがなかった。それでもまあ嬉しいことに違いはなかった。」

「まあ…お前が元気なら…別にいいけどよ」

「ありがとうね」

そう言っただけで飲み干して空になったコーヒーをゴミ箱に投げ入れた。

「どっちの礼だよ」

まるでコーヒーが自分かと言いたげだったが、美羽が急接近しそんな気持ちも吹っ飛んでしまった。

「会いたかったよ」

そう話すと自然にやさしくキスをした。

「ん？」

朔夜には頭の中の整理がつかず混乱していたが、美羽の温もりを感じる事ができ、まあ…いいか…と思いながら開いていた目を瞑った。

このまま時が止まればいいのにな…

そんなことが頭の中を過ぎっていたが数秒後には現実に返された。

「朔夜…就職おめでとう！」

美羽は満面の笑顔で朔夜を祝福した。

「う…うん。ありがとう」

体を起こしながら朔夜は先ほどの余韻にふけていた。

そして美羽の顔をまじまじと見ると、ああ、こいつも大人になったんだなあ感慨深く思った。

「待たせて悪かったな…でも…これからは一緒にいられる」

「うん！私もこっちで就職決まったしね」

「なら…これから一緒に行くか？俺の就職先に…」

「朔夜の故郷だよね…勿論行くよ」

それから二人で歩き始めると、朔夜の人生を変える場所になったあの施設へと向かった。

春の風はまだ冷たいが、そんなことをもろともしないぐらい二人の気持ちは高ぶっていた。

これから訪れるであろう未来に心を躍らせ、どんなことでも乗り越えられそうな勢いがあった。

朔夜は願った。

ささやかでいい…多くは望まないから隣の人と幸せになりたい。

美羽も願った。

この人との繋がりがいつまでも切れませんように…

こうして不器用で不完全だった二人はようやく繋がった。

最下層の家庭環境の餌食になり、心の傷を負い自分を探すかのような荒れた過去を互いに持っていた。

そこからの脱却を他人との繋がりで脱却することができた。そして希望が持てた。だから前に歩き出せる。自分たちの未来は悲観するほど狭いものではなかったのだ。

自らが変わろうとした瞬間にその閉鎖的な空間は無限に広がる空に変わった。

そんな空の色は自分の色に自由に染められる。そしてそれはきつと明日も笑っていられる暖かい色に違いない。たくさんの色で染められたカラフルな空が出来上がっている。

二人は手を繋いで大きな空の下、新たななる一歩を踏み出した。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6480/>

見えない自分

2010年10月17日18時26分発行